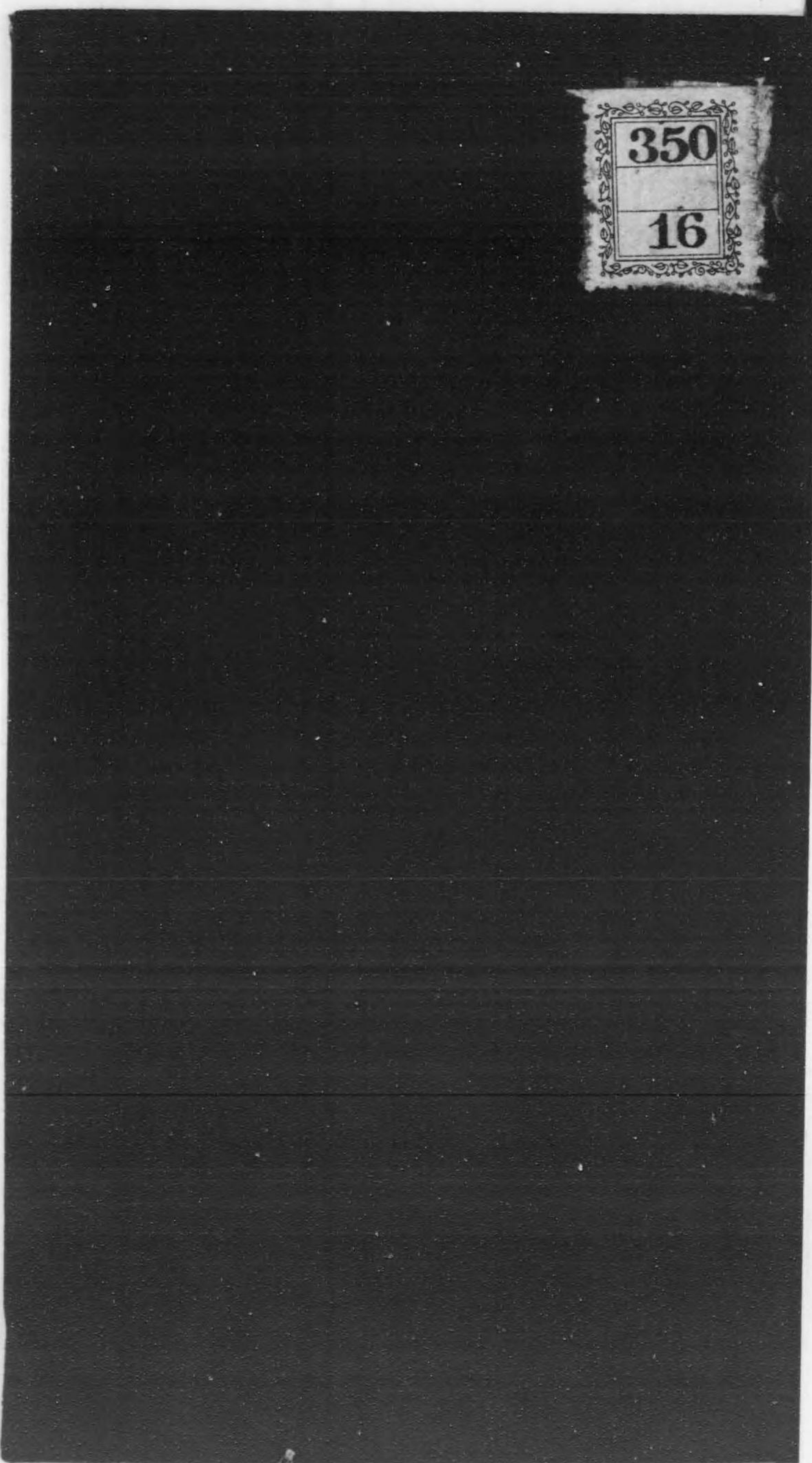


始



350  
16



文學士 依田喜一郎 選訂



東京

嵩山房藏版

# 道話

續編

大正  
2. 3. 28  
内交

檢閱濟



道話

## 序

この數年來、精神修養の讀物として、論語、孟子等の譯書の、續々出版せらるるに至りしは、誠に喜ばしき傾向といはざるべからず。然れども是等聖賢の書たるや、義高くして旨遠く、従つて一讀直にその眞意を會得せんことは到底一般讀者に對つて望むべくもあらず。されば余は、かゝる高尚深遠なる聖典よりも、寧ろ通俗卑近にして、夙くより我邦に行はれたる心學道話の類を翻譯して、現時の讀書界に推奨したらばとは、常に考へ居る所なりき。

抑も道話の文たる、字句平易にして、何人にも讀み得べく、而も趣味豊富にして、一たび之を繙けば手卷を釋くこと能はざるなり。その説く所、通俗實踐の道と旨とし、或は聖賢の語を掲げて諄々として訓誨し、或は俗談巷説を交へて巧に

誘導諷刺し、人をして膝を叩いて感服せしめずんば已まず。されば言俗なりといへども義必しも淺からず、説凡なりといへども旨却て深きものあり。所謂知らず識らずの裡によく品性の陶冶を爲すものといふべきか。古來修養に關する書は枚舉に遑あらずといへども、通俗讀物として最も適切なるものを求めなば、余は實に心學道話を以て、その第一とするに躊躇せざるなり。

頃日書肆嵩山房主人、余に囑するに通俗修養書の選訂を以てす。余敢へて辭せず、即ち心學道話中の傑作十數種を選び、正續二卷の小冊子となしつ。今その發刊に臨み、聊か讀者の朶にもなれかしとて、一言心學の由來を述べて序文に代へんとす。

心學とは今を距ること百八十年前、丹波の人石田梅巖翁の始めて唱へたる學派にして、その目的とする所は、實業社會の子弟を感化誘導し、人間固有の能力を

開發せしめ、獨立自重の精神を養成するにありき。翁は齡二十三にして京都に出で、實業家の徒弟となりしが、古來聖賢の通用性なる、至誠、勤勞、忍耐、仁愛の四徳を併有し、毎朝同輩に先んじて起き、毎夜同輩に後れて寝ね、寸暇あれば端坐几に對して書を読む、かくて繁忙なる徒弟の境遇にありながら愈心を學に潛め、遂に道德上の難問を解決せんと思ひ立ちぬ。始め神道を學びしが、後佛教をも修め、更に又儒學をも究め、遂に神儒佛三道を打つて一丸とせる新説を獨創し、四十二歳の時始めて講筵を開き、風教の維持改善に努力するに至りぬ。

かくて梅巖翁に次で、手島堵庵、中澤道二、布施松翁、柴田鳩翁等續出し、大にこの學派の普及を計りしかば、翁の歿後數十年にして、心學講義所の設置せらるゝもの、全國に涉りて其數二百有餘の多きに達し、徳川末世の國民教育は、殆ど心學者の占むる所となるの盛況を見るに至れり。然るに時世は急轉直下の勢を

以て明治維新の大變革となり、歐米の新學説は急潮の如く浸入し來り、政治學術教育宗教すべて百般の事物悉く舊觀を存せざるに至り、さしも隆盛を極めし心學の如きも、全く世人に忘却せらるゝに至りぬ。然れども拙劣なる倫理書の翻譯は到底人心を陶冶するの力なく、淺薄無定見なる修養談は書籍に雜誌に、新聞に殆ど送迎に暇なきばかり現はれ來れども、何等精神上の饑渴を醫する能はざるにあらずや。新しきもの必しも善からず、舊き物豈悉く棄つべけんや。我國民は二大戦役を経て、漸く自覺の時代に入れり。こゝに端なくも、一旦廢れに廢れたる心學は今や將に復興の氣運に嚮はんとす、是實に我思想界の爲に慶賀すべきの事たらずんばあらず。

今や本書の選訂漸く業を畢へ、裝幀新に成り、普く世に行はれんとするに當り、余は衷心より、深く心學諸先哲の苦心を偲ぶと共に、併せて斯學の隆盛再び昔日の如くならむことを祝福して已まざるなり。

大正元年十二月中旬

依田喜一郎識

## 凡例

一、從來刊行の類書は、例話に引用せる聖賢の句にて漢文のものを、其の儘印刷に付せり。されど、かくては、漢文を読み能はざる人々には、折角の名句も其の意義を解し難き憾あり。されば本書は是等を悉く和譯して読み易からんことを勉めたり。

一、從來刊行の類書には、殆んど取捨選擇の勞を認むべきものなし。本書は是等類書と選を異にし、選者があらゆる道話を精讀して、傑作を探り、正續二篇となしたるものにして、賣卜先生安樂傳授の一部は、其の用例、大人の讀物として不可なきも、青年の讀物としては寧ろ除くにしかずと信じ、之を除きたる外、他の諸篇は悉く全篇を採擇したり。

一、正續二篇に分ちたるは、傑作中の傑作ともいふべき諸篇を正篇に集め、正篇に漏れたる傑作を續篇としたるに非ず。道話の傑作十三篇を、各册

凡例  
 約三百頁と豫定して、適宜配列し、心學の祖石田梅巖翁の齋家論を正篇の始に、翁の事蹟を續篇の終に載せ、首尾を整へたるに過ぎず。されば正篇の讀者は必ず續篇も亦精讀あらんことを望む。

訂選 心學道話 續篇

目次

一、賣卜先生糠俵……………	虛白齋著……………	一頁
二、賣卜先生糠俵後篇……………	虛白齋著……………	三〇
三、孝行になるの傳授……………	脇坂義堂著……………	七〇
四、福相になるの傳授……………	脇坂義堂著……………	八一
五、長命になるの傳授……………	脇坂義堂著……………	九三
六、松翁道話……………	布施松翁著……………	一一〇
七、石田先生事蹟……………	門人編……………	二七八

以上

訂心學道話下

文學士 依田喜一郎選訂

賣卜先生棟俵

賣卜先生席を改め、一番は誰ぢや。  
 私は縁組の事に付き御占が頼たし、翁算木を投て曰く、望人は二人望れ人はひとり、一方は男に不足なけれども、外の事に少し言分、又一方は外に言分なけれども、男振が少し劣る歟女の曰く、扱々きつい見通しさま、仰の通り一方は器量に不足なけれども、親達は昔かた氣、暮方が上過るの、格式が能過るの、何角と申されます、又一方は諸事實素儉約を守る家、親達は此方を望なれど、器量は左程にござりませぬ、翁の曰く、親達は何といふぞ、はい親達は質素な方を望なれど、私が顔を見て、縁の道ばかりは押付られぬ、其方の心次第と有故に、私も心迷ひ占に任する氣、翁目に角立て曰く、卜は以て疑を決す、疑はずんば何ぞトせん、同

賣卜先生棟俵



じ路二筋有て、問人も無くしらざるときは、トて天に任す、一筋道にトは入らぬ、此縁組に疊算も入物賦、縁の道ばかりは押付られぬなど、は親達も親達育が悪い、汝も嫁入せば子を持つて思ひ知れ、親の子を思事假初ならず、我なき後にも、兎有うか角はあるまいかと、末の末まで案じ置親の安堵する方は娘の不機嫌、娘の好なは親の氣遣ひ、其處へは心の付かず、鼻の先の男撲み、腹筋がよれるわい、親の指圖は天のさしづ、親に背くは天に背く、何國にて身の立べきぞ、殊更婦人は貴も賤も親に添ふ日のすくなきもの、故に盡しても盡しても、盡し足らぬは女の孝行、嫁入しては夫につかへ、夫の親に孝行盡し、老ては子に従ふ、身産の親に仕るは纔十五年か二十年、孝行は足らずとも親の望の方へ行、氣を助るがせめての孝行、涕もかんで涙も拭、早く歸りて孝行盡せ。

其次は誰ぢや。  
私渡世は小糠商賣、まんまと口過はいたせども、はかりきつた身體にて、大晦日はすりほらひ、年中糠働をするも残念、商賣替を致す積り、是々の内何商賣が性に合ん、御占給るべし、賣卜翁の曰く、何商賣も同じ事、一升入徳利は一升、遇と遇さるは時也、律義一遍に仕馴た小糠よかるべし、扱又爰に寒翁が馬といふ事がある、信をとつて能聞れい、其元の輕い渡世

が薬に成て達者で居るやら、商賣替て心づかひが多くなり煩ふて死やら、替た商賣が繁昌して俄金持に成やら、其金故に盗に逢ひ丸裸に成やら、往て見ねば知れぬ事ぢや、西へ往たらば犬に噛まいものを、東へ往て犬に噛れたと思へども、西へ往かなんだが何程の仕合やら、内に居れば此足は蹴缺まいといへど、棚の物が落掛て天窓へ疵が付かふやら、其疵のおかけにて持病の頭痛が治るやら、人間萬事寒翁が馬、扱此人間萬事の内、少しにても私が這入れば寒翁が馬とは言さぬ、可レ爲事をせず爲まじき事をしての禍は己がなす所なり、萬事に私を交へず慎み其上に来る禍福吉凶苦樂は寒翁どのに任すべし。

其次は誰ぢや。  
愚老が定命御占給るべし、翁の曰く、長壽が望ならば死とき我は百歳まで生たと思へ、百歳、八十ぢやと思へば八十、唯八十の百のと思ふばかりの事也、七十にて死る人思違ひにて八十ぢやと思へば八十、イヤ／＼六十ぢやと思へば六十、皆思ふ迄の事也、命は迹も無く先もななく、今ばつかりのもの也、我常に云ふ世界皆同年、斯云へばとて生死は天に在りて、此方の知つた事では無いといふは舌長、其天命を縮るは人也、飲食柩席の不養生、七情の用るやうにて、一生の内幾年縮るも知れぬ、四十にて死る人天命は五十ぢややら、五十にて死る人五十五

が天命やら、醫書に曰く「我が命は我に在りて天に在らず」と。  
其次は誰ぢや。

此間 打續 夢見凶し、御占給はるべし、翁の曰く、夢見悪くは一入慎み善事を行へ、善事を行へばこれ即吉夢也、稼に追付貧乏なく、慎みに克つ禍ひなし、たとへ善き夢を見ても其夢を鼻に掛け恣に行は、禍忽ち來るべし。

又問ふ翁の教にては、凶夢も吉と變り、悪女も美女に成るとの噂、かゝる不思議もあるや如何翁答て曰く美目好き者其美目好を自美目好とすれば、其美目好を失ふ、醜者者其醜を自醜とすれば其醜を消す、顔容の美惡而已にあらず、諸道皆此の如し少しにても矜誇心あらは、味噌汁の味噌臭く醬油汁の醬油くさきの穢りをうけん、京羽二重は肌目も細く色も白く媚よしなれど、是も百目の絹を百二十目と高ぶれば、能はよいが直の高いが疵なりと手を指す人稀ならん、河内羽二重は色も黒く肌目も麤て不器量なれど、拾刃の木綿を九刃也と低出れば直に惚る人数多あらん、容のいはく是は左もあるべし、百目の物を百目、拾刃の物を拾刃と云は如何、是にも亦云ひぶん有や、翁曰 此處出入なし、去ながら今云ふ拾刃百目と見せる代物は皆手くだ有て油断ならず、色の黒いは白粉にてちやかし、生え下りの無いは蕪で黒め、

齒の缺たるは蠟石を埋め、髪の薄きは染川を履ふ、櫛笄は猶更衣類また凄じ、三々目位の身上に内儀の出立を見れば千兩も取女形の舞臺衣裳、又吳服屋仲間の黒人直打にも、アノ衣裳の結構、供まはりの立派、安う踏んでも先千目からの身上と、評判する娘子の道行、樂屋を覗ば間口五間には足らぬけな。

其次は誰ぢや  
拙者相應に暮せども是ぞといふ樂しみなし、何を樂しみにいたし樂んや、御考給るべし 翁曰く、樂は苦の本、苦は樂の本とかや、樂みたいとおもふ苦もなく、苦をせまじと思ふ、苦なくんば、何れの世界に苦のあらん、財寶田地なければほしき苦があり、有れば又失はじとの苦をする也、貯たいと思ふ苦なければ耗さじと思ふ苦もなし、家屋舖身の廻りいやがうへにほしき苦あり、あれば有ほど苦は多し、親にか、りの息子の、主持の若衆など、一夜二夜の樂しみが際々の苦と成、苦に苦を重ねれば一生の苦となり、自身の苦のみにあらず親兄弟の苦に成る主親を持し身は一入慎み樂みたい苦を止よかし、百病は苦より生ず、樂みたい苦を止て天命を樂むべし、又問、私本より病身にはあらざれども、百病は苦より生ず、樂みたい苦を止て天命有まじきや、翁曰く力の強きを強として其強に誇る者は人に勝事を快とす、此故に我より強

者ありて争ときは吾必危からん、力柔を柔として其柔に安んずる者は人に勝事を快とせず此故に我より柔者ありても争はず、争はざれば危事なし、されば昔より其力を恃で其身を亡せし人和漢其數を知らず、能騎者は落、能游者は溺る、也、河を馮し、虎を搏にするなどは是匹夫の勇力也、實の勇は然らず、無理非道をもよけて通し、堪忍のならぬ處を堪忍し、己に克、己にかつ、おのれに克にあらすんば勇力とはいふべからず、日夜朝暮、地とりして、己に克、己にかてば天下に敵なし、是を勝ざるの勝といふ、唯強き奴は人欲也、此人欲と地どりするに、中々十番に五番は勝てぬ、閉口く

次は誰ぢや

私十二歳より去方へ奉公に参り、今年二十五歳、少々銀子を遣ひ過し、其銀を黒めんと、さまんもかき、彼是の損重り、親方の銀を餘程あけ、只今にては術盡き欠落と胸を据る候、追人の掛らぬ方角御考下さるべし、翁頭を振ていはく、危しく、泉時を替るといふ卦ぢや、昔し此泉東をさして飛びゆく、鳩問て曰く、何國へか飛さり給ふ、泉の曰く、此里の人々我聲の悪きを嫌ふ、故に飛去也、鳩くうく、笑て曰く、飛行先の人々もまた汝が聲の悪きを嫌ふべし、汝が聲のあしきを直さば何ぞ飛ざる事のあらん、其元も此通り、唐天竺へ飛去ても

心の悪を直さずでは、行衛定ぬ雲介、ちよほくれちよんがれにて一生をくち果ん、主親に勘當受ては天下の御帳面にもれ、人の内にては無きぞ、今又本心に立歸り過を改めば、欠落するには及ぶまじ、今本心に歸りても金は皆遣ひ果す、迹偏也と言んが、爰が彼の本心、過てば則ち改むるに憚ること勿れ、是迄の過は是非なし有べかりに底を叩き、幾重にも詫を願へ、許容あらば其恩を胸に懐、ちよほくれの事を忘れず、心力を盡し私心なく奉公せよ、扱銀子の代には給銀も着仕も辭し、冥慮に叶ひて宿這入せば残銀を償ふべし、若また宥免なくして如何様の咎に逢ふても本心さへ本心ならば、身の過を悔るばかり何をかうらみん。

次は誰ぢや

此わんばくでござります、歳は十歟九ツ歟、づつと寄て手を出した、はて珍しい手の筋、精出して手習すればぐつと手の上る筋、惜い事は手習が嫌ひさうな、習はねば一生無筆で人に笑る筋もある、扱此六月七月には水に溺る、といふ小筋がある、川へゆく事ならぬぞ、どれ右の手を出した、此月は剣難の筋が見ゆる、指を切るか手を突か、小刀細工のならぬ月ぢや、扱又爰に迷ひ子になるといふ恐しい筋がある、むかひ隣へ行にも親だちに問ひ、行とあれば行、ゆくなと有れば行かれぬ、断なしに行が最期、人買に連て去る、畏手筋、これお袋灸の事も云

ふ歟、次手に御頼もうします、どれ脈を見て遣ふ、此月は煩ふも知れぬ月ぢや、身柱とすぢか  
ひするねばならぬぞ、又來月つれてござれ。

其次は誰ぢや。

是は元より下京に住居する好風と申按摩にて候、我母の親を持、心一杯孝行を盡せ共、ある夜  
不思議の夢も見ず、今に釜も掘出さねば、昔に變らぬ貧き暮し、天道未だ御存知なきか、但  
しは誰ぞと間違は致さぬ歟、御考給はるべし、翁笑を忍で曰く、それ孝は子たる者の盡す  
べき役にて盡なり、其盡すべき役にて盡す孝行、何の不思議有てか福を期、扱又不幸なる者は  
雷にも打たれ、蛇にも呑れん、是盡すべき役の孝行を盡さざる天罰なり、又盡すべき役の孝  
行を盡し、福の來るを期は、價を取て駕をかき、其乗せたるを恩に着せ、益を貪る駕かき同前  
實の孝子は然らず、孝行を孝行と思はずして孝行を盡す、是心に盡し足されば也、汝は自孝  
行を孝行と思へり、孝行を孝行と思ひて盡す孝行は、孝行にかぎりあり、きのふは何程の孝行  
を盡し、けふは是々の孝を盡しぬ、明日も何かな能孝行が盡したいと、孝行を拵えて盡す、是  
は唯親を悦ばしめんと言らるる孝行也、是を佐平治孝行とて世間にまゝ有孝行也、むかし人  
の曰く、碁は勝んと打べからず、負まじと打べし、親には氣に合とすべからず、背かじとすべ

しとなり、背かじとする孝行は影日向なし、合ふとする孝行は拵物にて、先に所謂佐平治孝行  
也、斯いへばとて汝を不孝と譏るに非ず、孝行は眞似でもすべし、或國の太守狩に出給しとき  
老母を負ひて過るものあり、太守見給ひ其故を問給ふ、郷人の曰く、彼れは平生孝行にはなき  
者也、太守孝子には御褒美を給ふと聞、老母を負て孝行を似せ、御褒美を貪るえせ者也と答ふ  
人を易て問給ふに答また前の如し、太守の曰く、世上には悪き眞似をする者多し、彼れは善き  
眞似をする者也とて、御褒美數多給りぬ、太守の仁徳に感じ、かのえせ者實の孝子になりしと  
かや。

次は誰ぢや。

私は失物に付て御占が頼たし、一兩日以前金子五兩硯筒の引出しへ入れ、折節客來に取まき  
れ忘れ置しが、今朝ふと思ひ出し引出を見るに、其金なし、もし覺違ひもやと思案の底を叩  
紙屑籠までさがせども更に見えず、彼是思ひ廻らすに疑しき事ありて、潜に心を付て見るに、  
其人の顔色もの、云さま立振舞に至るまで、慥に此人の仕業とは見えながら、是といふ證據も  
なし、云ひ出して悪からんや善からんや、御考へ給はるべし、翁の曰く、過て人を疑は、人と我  
と共に亡ぶ、危しく、昔し斧を失ふ人あり、其隣の子を疑ひ、其顔色聲音起居動作を見るに

ひとつとして盗にあらざるはなし、日を経て外より彼斧を持來り、永々借用辱と返辨す、斧主初て疑晴れ、其の隣の子を見るに、顔色聲音起居動作微塵も盜臭き處なし、是等は是斧に心を失ひし者なり、汝も其失ひし金を尋んより、先その失ひし本を尋見るべし、唐土に二人羊を牧者あり、其一人は書に見入て羊を失ひ、又一人は博奕して羊を失ふ、其所作は異なれとも、羊を失ふに至ては一つなり、其羊を失ふはまづ本心を失へばなり、書物も書物の見やうによつて其本心を見失ふ、況や博奕名聞利欲色欲においてをや、恐るべし。

其次は誰ぢや。鳥目一錢にて百病の藥ありと聞、御考如何。翁の曰く、不斷保養に灸すべし、古書に曰く、聖人は已に病めるを治せず、また病まざるを治す、已に亂れたるを治めず、未だ亂れざるを治む、病已に成りて後之に藥りし、亂已に成りて後之を治むるは、譬へば湯して井を掘り、鬪ふて兵を歸るが如し。ト已に病るを療するは衣の垢を濯ふが如し、一濯くにて、強く成か、弱く成か。

第一孝によし  
能書 臣には忠によし

一々擧るにいとまなし

又問ふ。ひとつの夜具に、十人寢て寒からざる考ありと聞く如何。答て曰く、何程結構なる緞子繡珍の夜具なりとも、二人は知らず三人は寢られまじ、是を木綿の夜具にせば十人も十五人も寢らるべし、寒夜に御衣を脱玉ひし天子もあり、恐れながら一人木綿を堪忍すれば十人寒苦を凌ぐべし。

其次は誰ぢや。

私昨夜提物を落す、落候處御考下さるべし。翁曰く、昔より裸で物は落さぬといふ、常々裸の事を思へ、これ物を落さるる咒なり、往古より産衣着て生れたといふ人を聞かず、裸かいて誕生したる沙汰もなし、皆丸裸で生れたる人なり、其丸裸で生れたる人の中に、丸裸で居る人はひとりもなし、此所會得せば何をか落すとし、何をか失ふとせん、其丸裸で産れ其丸裸で死る此身、金銀財寶一物も我もの有んや、是皆世界の寶なる事明かなり、是を我物なりと思ふ人は、己が榮耀榮華には金銀を惜しまず、人の事には吝きものなり、淺ましからずや昔楚の國の王、狩に出て弓を亡へり、其近習者と請ふ、王の曰く止よ、楚人弓を失ひ楚人弓を得ん、又何ぞ是を求めん、孔子聞て曰く、惜いかな其大ならざること、人弓を遺し、人之を得

賣卜先生糠俵

るといはざるは何ぞ必らずしも楚のみならんや。楚の字だけつけじやと、此方の親玉はの給ひし也、今世間の奢る人吝き人は金銀の手廻るを我物ぢやと、いつの頃よりか思ひ込し間違ひ也金銀財寶は扱置き、先寝たり起たりする此身、我物か我物で無いか、御工夫く。

其次は誰ぢや。句ひなどは假の物ながら、えならぬ句ひには心ときめく、是は如何なる事やらん、御考給はるべし。翁曰く、句ひばかり假のものにて、紅白粉はかりの物にあらずや、紅白粉はかりの物にて、髪飾り衣紋は假の物ならずや、紅白粉も粧はず、句ひもとめぬ丸裸は、假の物にあらずや、或は琴の爪音の氣だかきを聞き、和歌の優しき手跡などの拙ながらぬを見ては、猪口鼻そけも知らでまづ心ときめぬ、たとへ目鼻口もとのしほらしく、姿聲音の可愛らしきも皆地水火風の寄細工、唯今生て働きます、忽ち五輪と變りますれば、惣やうさまへのおいとまを乞ひ、天からくくく其ときめくものはいかなる物にて何國にあるぞ。

其次は誰ぢや。此腰物御考給はるべし、我等にも少し奢なれども珍敷道具、性に合はゞ求たし、翁目の鞘をばづして曰く、自心に奢と思ふ道具は、則性に合はぬ也、奢は細微を慎むべし、是程の事は儘

よ、彼れぐらるの事はなど、自ら赦すべからず、蓋に一杯ほどの奢が、末に至りては大船を浮ぶ、或人能き鍔を一枚掘出し、刀屋を呼び、此鍔我等如きには奢りなれども、此儘置ても費也此脇指へ打替たし、扱此鍔に此縁頭不相應ならば吟味して給はるべしと、まづ縁頭を奢りぬ、傍に人有て曰く、此縁頭に此鍔は不足ならずや、奢り給へといふ、亦鍔も奢りぬ、中にも堪忍なりさうに見えし目貫、鍔が替りては見るに堪へず、又目貫も奢る、襦袢り揃へば初め奢りなると思ひし鍔、今にては不足なれ共、是はまづ堪忍すべし、堪忍のならぬは肝心の魂と、相應の身を吟味して是も奢り、切羽はゞ鴉目迄打揃へ是に相應の小柄をと方々吟味し、是も奢りぬ、扱腰物に釣合ふ印籠巾着を奢り、是をさけ是を指て此衣類は不似合と呉服屋沙汰、此袴には此羽織は不足、此小袖に此帯は劣るなど、是もまづ相應に奢り、着替て指てぶらさけても、是迄の朋友一家は段違にて面白からず、様々に吟味して風體相應の付合を修り、此付合に此座敷は下作な、庭廻りが不風雅など、家業の勝手もかまはず、家屋敷を廣め、造作の物好、是より奢りに實が入て、終には身代を棒振虫、浮沈みは世の習ひ歟。

其次は誰ぢや。先生の占立妙なる事豫て某承ら、金子の生る樹の作り様御考給るまじきや。翁しやかに

まへて曰く、人草木に培ふ事を知れども、心に培ふことを知らず、心に培ふ故貪欲にして足る事知らず、足る事知らざれば千箇の寶も無きが如し、是を貧乏人とも云ひ、又有財餓ともいふ、足る事を知れ足る事を知れ、足る事を知るときは是ぞ萬福長者なり、何をか有とし何をか無とせん、或人の語りき、我庭前に梨の樹あり、初て實を結ぶ事九ツ、其年は二ツ足らず、其翌年は三十生り、此年は亦足らざる事十二三、其翌年は五十生て甘足らず、梨の數増せば足らざる數彌々増し、後くは買ひ足して賦ぬ、一昨年の大風に此梨の樹倒れて枯ぬ、其後は梨もなし、足らざる事の世話もなし、鬼に瘤を取られしと笑ぬ。

其次は誰ぢや。

酒の酔本性忘れず、昨日の跡を聞に參つた、酒の損益承らん。翁の曰く、諺に一杯人酒を飲み、二杯酒酒を飲み、三杯酒酒を呑む、人酒を飲ときは、爵を散じ血を和らけ毒を消し邪氣を防ぎ夏は暑をはらひ冬は寒を凌ぐ、是酒を飲む人も、春の花秋の月にも酒を飲む人稀にして、多くは酒人をのむ、子曰く唯酒は量なし、亂に及ばずか、人に下戸あり上戸あり、其數に量なし、唯亂に及ばざるを限りとす、柔弱多慾の輩は皆酒に呑まれ、外行ひを敗り、内徳を亂る、過是より大なるはなし、又曰く酒の困をなさず、既に困るにいたりては、輕きものは疾とな

り、脾胃を損じ瘀血を醸す、酒によつて發る病一々舉るにいとまなし、重き時は父母を忘れ、命をも隕す、或は邦をも亡し家をも敗り、海山も呑み、田畑も飲み、牛馬も呑み、娘をも呑む此類又數を知らず、客肘を張て曰く、汝下戸の分際として何ぞ酒の意味を知らん、汝は酒の過のみ知て酒の徳を知らざる也、酒は憂の玉簪、五六杯かたむくれば憂でも屈託でも、さつぱりと掃散し、心にかゝる塵もなく、泣顔忽ち笑顔となる、是酒の一徳也、素面のときは心細く、一人は一里の路も行けぬ、飲ば忽ち千人力、山でも川でも恐れなく却て夜道が面白い、これ徳の二なり、談すべきこと有るときなど酒の力を借らざれば、心も弱く口も重く、下戸にさへ云ひ負る、不思議や酒が乗移れば、傍に人なき心地、長者でも先輩でも理を非に曲て云ひ伏る、是徳の三也、嗚呼酒なる哉、翁の曰く、汝が謂ゆる徳は我の謂ゆる過也、人は賢愚となく老少となく、憂なき事能はず、父母疾に臥給ふ歟、又は身まかり給ひても、汝は酒で憂を拂ひ泣顔忽ち笑顔にするか、是過の第一也、孟子の曰く命を知る者は岩牆の下に立たず、危を恐れざるは、命を知らざる者也、却て夜道が面白く、山川の恐もなく、災を招く事は又過にあらざるや、汝傍若無人に人と争ひ、非を理に曲て云伏るを酒の徳なりといふ、口はこれ災の門、酒は是災の根也、汝はいまだ酔が醒ぬ、まあく休め後に逢はふ。

客の曰く、酒の論はまづ措く、口は災の門ならば善導大師口より彌陀を吹出す事如何。翁の曰く、唱れば佛も我もなかりけり、南無阿彌陀佛く、口からは佛を出さふと、鬼を出さふと、嘘を出さふと、實を出さふと、福も出で禍も出づ、親しくなるも口、疎くなるも口、敗るも口、成るも口、口ばかり斯あるに非ず、盗みする手もあり、欠落する足もあり、不義の道具も所持したる身なれば慎ますんばあるべからず、古語に曰く一言以て邦を興し一言以て邦を亡すと。

其次は誰ぢや。

渡世に追れ學問いたす餘力なく文盲なる私、かゝる一文不知にても道にかなふ行ひありや、御考下さるべし。翁の曰く、孝行也、論語に曰く、君子は本を務む、本立て道生ず、孝悌はそれ仁の本たるかとたとへ一文不知なり共、文盲に孝行盡さば、是を君子の人とも學びたる人とも云め、文章を工みに書き詩を達者に作るばかりを學者とは言はず、産業を缺き米錢を費し學問して何の爲ぞ、萬卷の書を闇記ても父兄に孝悌ならざる人は、一文不知の孝子には劣らずや或人語て曰く、我舊里に孝子あり、名は網屋何某、老母に仕て至れり盡せり、我見る處を以て其一二を語らん、夏の日の暑には屋上に水を洒ぎて老を涼しめ、冬の寒夜は裾に臥て足を暖め

家業の外は一寸も内をいえず、老母の傍に問ひ慰む、其下の町に頼寺あり、法談ある毎には老母を負て参詣し、亦負て下向す、年四十を過ぎる迄妻を娶らず、孝の衰ん事を恐れてとなり、老母死て後初て娶り今は男子二人を持てり、或とき孝子外より歸り庭の濡たるを見り、其妻にとふ、妻小兒の尿なりと答ふ、夫の曰く、親の譲り給しこの屋敷我俸の小便にて此の如く汚す事恐れあり、勿體なしと已來を禁め、其土を掘り他の土を入替ぬ衣類又此の如し、親の身に觸れ給し物は恐ありとて、子供は勿論自身も着す施物にやなりぬらん、或日我問て曰く、足下の孝心一郷に亦類ひなし、何れの師に學て此の如きや孝子恥る色有て曰く、孝行は中々我等ごとき及ぶべき事に非ず、身體髮膚皆父母の賜なり、其身體髮膚皆父母の爲に盡し終りても、もともと也、其より上の孝行を盡されば、孝行にてはあるまじと、流涕して又曰く、老母在す内には我に代りて仕る者なし、故に産業の外には内を出ず、何の餘力ありて師に仕る事を得ん、今に至てかたのごとく不學文盲なりと語りぬと語りぬ。是等の人は未だ學ばずといふと雖必らず學びたる人に勝れりとや云はん。

其次は誰ぢや。

近年は昔しと違ひ、時節が悪うて渡世しがたし、何ぞ能身過有まじきや、御考給はるべし。



翁空うそ吹て「海士のかる藻に住蟲の我からとねをこそながめ世をば恨じ」これ御容、時節が悪うて世が渡りにくい、身過が出来ぬのとは、冥加知らずのいふ事なり、泰半の御代に生れ合、何ひとつ不自由になき儘に、飽まで食ひ、暖に衣、身の分限をわきまへず、奢に驕り重る故、身過の出来ぬ而已ならず人の身過の害をなす、それぞれの分限を知り少も奢りがましからで己が家業を本とせば、今この御代の有難さ、なか渡世のかたからん、兎や角いふは皆分際を知らざる也、亂世の悲みを知らざる故、かゝる御治世の安樂なるを安樂なりとも思はず、其安樂なるを安樂なりとも思はざるは、長くの大病本復して本復の祝ひする人はあれど、病ざる祝ひを祝ふ人なきが如き歟、又途中にて日を暮し闇の夜に路を失ひ、如何共せんかたなき時思ひがけなく人有て、提燈を貸てくれなば、其時の嬉しさはいつまでも忘れず折節には思ひも出し、云ひも出して悦べども、日々照し給ふ天道の事は小提燈ほどにも思はず、自身一分の小提燈は悦べども廣大無邊の天恩國恩をば左程にも悦ばざるは冥加なき事に非ずや、しかのみならず己が勝手に悪きとは、降の、照の、長きの、短の、何の斯のと、役にも立ぬ寢言をいふ去としては目を覺し給へ。

其次は誰ぢや。

拙者生得短氣にて、腹立ときは逆さき見す怒り罵り、科なき諸道具を投はうり杖棒を振上たり拳に息を吹かけたり、燃立ときは火に入るを知らされ共それ短氣しつまればその後悔亦甚し、後悔も我、短氣も我、後悔する短氣ならば發さぬが能といふ人あれば、おれが發し度て發す短氣歟、生質なれば是非なしとまた短氣發る、是にも醫者の有べきき、御考給はるべし。翁の曰く、阿房に貼る藥はなけれど汝は少し脈がある、下愚と雖も道心なきこと能はず。後悔さもあるべし、去ながら短氣を生れ付など、は、付よう藥も無い一言、生質の短氣ならば今爰へ出して見せよ、出まいがな、いや爰な内廣がりの外狭り、短氣は本氣儘といふ病也、上へ向ては短氣出まい、人によつて發り人によつて發らざる短氣を出れ付なりと捨置ば病に病重ぬべし、もし隣の小兒を懐き膝へ尿かけられても、汝又短氣が發る歟、曰く、否、相人無我なる故短氣出でず、また問ふ、屋根板風に吹散て小鬚先に疵付なば、其れ如何、屋根板に心なき故、我亦腹の立事なし、然らば何ぞ無我無心にはならざるぞ、短氣者肘を張り額に青筋立て曰く、翁のをしへ入ほがなり、其無我無心は人に腹を立てさせまじきをしへならずや、我問處左にあらず、腹の立ざる教を聞、翁笑て曰く、まづ人に腹を立てさせざる修行せよ、是短氣を治す妙劑也、もし無我無心の短氣、無我無心の腹立ならば、何んほなりとも出次第出次第。

其次は誰ぢや。  
 私(わたくし)は田舎者(いなかもの)、姑(しよとめ)に憎まれて家出(いで)いたし、尼(あま)にも成(な)らぬ、いつそ死(し)んでも仕舞(しま)ふかと、取(と)つ置(お)つ、先(まづ)占(うら)んで見て下(くだ)さりませ。翁(おきな)算(さん)木(ぎ)を投(な)げて曰(い)く、船(ふね)の危(あやう)を畏(おそ)れて水(みづ)に投(な)ずる者(もの)のごとし、世(よ)惡(わる)い、今(いま)死(し)では修羅(しゆら)道(みち)へまづ逆(さか)ま、たとへ尼(あま)になつたりとて世(よ)を恨(うら)みての尼(あま)なれば是(こゝ)れもまた修羅(しゆら)の種(たね)、あゝ若(わか)いは能(よ)いがしどが無(な)い尼(あま)に成(な)るにも及(およ)ばず死(し)ぬるには猶(なほ)及(およ)ばぬ、其(そ)方(なた)の心(こゝろ)ひとつにてつゝ丸(まる)なる事(こと)ぢや是(こゝ)れによつて似(に)た咄(はな)しがある、仙(せん)壽(じゆ)村(むら)の火(くわ)車(くるま)ばとて近(きん)郷(きやう)名(な)うての姑(しよとめ)有(あ)り年(とし)は七十(しちじゆう)、齒(は)はなけれと嫁(よめ)を囓(か)事(こと)煎(せん)餅(もち)の如(ごと)くなれば鬼(おに)ば、とも異(い)名(な)せり、とうく三人(さんにん)囓(か)み出して、今(いま)の嫁(よめ)は四人(よにん)目(め)、是(こゝ)れは甚(はな)だ辛(しん)ばう強(つよ)い、利(り)發(はつ)なる女(おんな)なれども、夜(よる)晝(ひら)となくふすべ立てられ、餘(あま)りの苦(くる)しさ堪(た)へかねて、今(いま)其(こゝ)元(もと)のいふ如(ごと)く、尼(あま)に成(な)るか死(し)う歟(や)と、心(こゝろ)ひとつに据(す)かねて隣(となり)の魚(う)屋(や)に是(こゝ)れを咄(はな)す、此(こ)魚(う)屋(や)半(はん)兵(べい)衛(ゑ)は、范(はん)蠱(ぎ)もどきの智(ち)恵(ゑ)者(じや)にてぐつと呑(の)み込み、姑(しよとめ)の心(こゝろ)さへ和(わ)がば、四(よ)の五(ご)のは入(い)るまい、其(こゝ)心(こゝろ)を和(わ)る事(こと)、某(それ)が方(なた)寸(すん)にあり、其(こゝ)元(もと)の姑(しよとめ)に限(か)らぬ事(こと)、年(とし)寄(よ)の意(い)地(ぢ)の惡(わる)いは生(う)れ付(つ)きでは無(な)いやまじやと、去(さ)る御(お)いしやの御(お)咄(はな)し、此(こ)病(びやう)を治(な)す事(こと)、灸(しゆ)でも行(ゆ)き、針(はり)でも届(と)かぬ、唯(ただ)一(ひと)色(いろ)奇(き)々(々)妙(めう)々(々)の藥(くすり)喰(く)ひ有(あ)るとて、傳(でん)授(じゆ)を受けて覺(おぼ)えて居(ゐ)る、療(りやう)治(ぢ)して見る心(こゝろ)ならば藥(くすり)は己(おれ)が調(たう)合(あ)して灸(しゆ)焚(た)きの加(か)減(げん)も傳(でん)授(じゆ)せん、一(いち)日(にち)に二(に)三(さん)度(ど)死(し)飯(いひ)のとき用(もち)るてよ

し、我(われ)等(ら)醫(い)者(じや)にあらざれば藥(やく)代(だい)は現(げん)銀(ぎん)、賃(ちん)苧(ぢ)紡(つむ)か、糸(いと)を績(つむ)ぐか、其(そ)方(なた)の手(て)から拵(こしら)へて、錢(せん)持(も)つて取(と)りにござれ、扱(さ)又(また)爰(こゝ)に大(だい)事(じ)が有(あ)る、此(こ)藥(くすり)を用(もち)るうち病(びやう)人(にん)に少(すく)にても、腹(はら)立(た)てさせる事(こと)はならぬ、一寸(いち)寸(すん)でも氣(き)が立(た)てば、藥(やく)反(かへ)つて毒(どく)となる、打(う)たれうが、擲(な)うが、杖(つゑ)の下(した)から機(はた)嫌(きら)を取(と)り、淋(しみ)しけに見(み)ゆる時は酒(さけ)にて用(もち)ゆるも又(また)よしと、用(もち)るやうの秘(ひ)事(じ)口(くち)傳(でん)言(げん)ひ含(く)めて歸(かへ)しぬ、嫁(よめ)は教(おし)へに隨(したが)ひて、朝(あ)は鳥(とり)の先(まへ)におき、夜(よる)の明(あ)くる迄(まで)賃(ちん)苧(ぢ)紡(つむ)み、晝(ひら)も仕(し)業(ぎよ)のすき間(ま)には、糸(いと)を績(つむ)ぎ、夜(よる)はひとり寢(ね)残りて、夜(よる)半(はん)八(はち)つまで賃(ちん)苧(ぢ)紡(つむ)業(ぎよ)、糸(いと)を績(つむ)ぎ賃(ちん)苧(ぢ)紡(つむ)、藥(やく)味(あじ)を調(たう)へ二(に)三(さん)度(ど)宛(あて)日(ひ)毎(まい)に日(ひ)毎(まい)に用(もち)るけり、未(ま)だ二(に)廻(まわ)りにも盈(あふ)たざるに、其(こゝ)驗(けん)し、手(て)の裏(うら)を返(かへ)す如(ごと)く、日(ひ)頃(ころ)手(て)強(つよ)き鬼(おに)者(じや)人(にん)、我(わが)慢(まん)の角(つの)をころりと落(お)とし、嫁(よめ)子(こ)を可(か)愛(あい)がる而(のみ)已(や)ならず、忍(にん)辱(じゆく)柔(じゆう)和(わ)の佛(ほとけ)となり、今(いま)に佛(ほとけ)ばさまとて達(た)者(じや)で居(ゐ)るけな、是(こゝ)れは魚(う)屋(や)の方便(ほうべん)にて、旨(旨)さかなの料(りやう)理(り)して嫁(よめ)の力(ちから)を抜(ぬ)き故(ゆゑ)なり、此(こ)方(なた)に力(ちから)む心(こゝろ)なれば、先(まへ)にも力(ちから)む心(こゝろ)なし、たとへば捨(すて)小(こ)舟(ふね)が流(なが)れかゝり人(ひと)の舟(ふね)にあたりても此(こ)方(なた)が捨(すて)小(こ)舟(ふね)なれば先(まへ)の舟(ふね)は立(た)てぬ、先(まへ)の舟(ふね)の怒(いら)ざるは、此(こ)方(なた)の舟(ふね)に心(こゝろ)無(な)れば也(なり)、舟(ふね)に心(こゝろ)有(あ)るが最(さい)後(ご)、互(たがひ)に怒(いら)り罵(のの)しりて果(は)ては波(なみ)風(かぜ)荒(あ)くなり、何(なに)處(どこ)へ舟(ふね)を着(つ)かふも知(し)れぬ、我(わが)よきに人(ひと)の惡(わる)きは無(な)きものぞ、先(まへ)の心(こゝろ)和(わ)がざるは此(こ)方(なた)に力(ちから)みの有(あ)る故(ゆゑ)也(なり)、力(ちから)みを抜(ぬ)きても和(わ)がすんば、力(ちから)みの抜(ぬ)けざる故(ゆゑ)と思(おも)ひ、又(また)力(ちから)みを抜(ぬ)くべし、其(そ)上(うへ)にも和(わ)がざるは、いまだ力(ちから)みの抜(ぬ)けざる也(なり)、又(また)

カミを抜くべし、また其上にも和がすんば、カミの抜きやう足らぬと思ひ、又々カミを抜くべし、いつまでもくさきの心の和ぐまでは、此方の心のカミを抜け笑顔は打れぬ物ぞ。其次は誰ぢや。

私は望みある身、何れの神、何れの佛に、立願掛けて納受あらん御考へ下さるべし、翁の曰く心だに誠の道にかなひなば祈らすとも神やまもらん、神は守り通しなり、祈れば守る、祈らずばまもらじと神に隔つる心はなし、人の心が神を隔つる、誠の道とは正路也、其真直なる道を行かず、道ならぬ道を行き、無量のくるしみ其身をせむるは、皆己がなす災なり、何れの神に祈らんや、又神は正直の頭にやどるに聞きて、唯正直なる頭を撰みて宿るやうに思ふ人あり、然らず、一面の神國なれば神の宿り給はざる處やある、目に見耳に聞き口に味ひを知る迄も、神の宿り給ふにあらずして誰、但し人の力にて、見たり聞きたり味ひを知るとする歟、其神を神と知らず、戯れた神にするときは、視れども見えず聴けども聞えず食へども其味ひを知らざるに至る、扱又昔、枇杷を嗜む人有り、其核の大きいなるを愁ひて、清水に詣で、枇杷の核をなからしめ給へと觀世音に祈誓す、是を聞くもの愚なりける人也と笑ふ、枇杷の核の愚なる事を知つて笑ふ人も、己が日々の願ひ、皆枇杷の核なる事を知らず、先今日の命も知らず、聖の事を

願ひ其身を慎んで、災の來らぬ様にと願ひ、養生はせずして無病を願ひ、顔の醜きも恥ぢず、此戀かなへ給へなど、祈る類皆枇杷の核ならずや、朝毎に神棚に向ひ、めつたに顔をしかめ咽をかすり、富貴繁昌息災延命、家内安全惡事災難、拂ひ給へ清め給へと、厄拂ひほど云ひ並べ祈るばかりが祈るにあらず、心だに誠ならば、祈らすとも鶴は千歳、龜は萬年枇杷は枇杷の味ひ、梅は梅の味ひ、山葵は鼻を弾き山椒はひりつく、萬物一として神の宿り給はざるはなし、中にも人は萬物の靈といふ、山葵の鼻をはじき、山椒のひりつくに恥ぢて、私心私欲をはらひ

たまへ清めたまへ。神詠に皆人の直き心ぞ其まゝの神の神にて神の神なり又問ふ安産あり、難産あり、此考へ如何、翁曰く、人の人を産むを見て、人の人を産むと見る、人の人を産むは、人の人を産むに非ず、何んぞ人の力にて、人の人を産む事を得んや、止む事を得ずして云はゞ、人に因つて人の産るゝならん、客問うて曰く、是は其神の告子、彼は此佛の告子など、昔より云ひ傳ふ、此の如き事も有るや、否や、翁答へて曰く天下皆告子也、何んぞ彼れ此而已ならん、禽獸蟲魚、草木の、出生する、一ツも告子にあらざるはなし、又問ふ、告子ならば人力を盡さずしても、懷妊するや、曰く否、只居ては懷妊せず、其人力本と

告子なる事を知つて、告子の悟り開くべし、譬へば田地と種は告子也、耕すと種播くは人力なり、人力と告子と合體して五穀稔る、是即告子也、又問ふ告子なれば難産は有まじきに、難産の間々あるは如何、答ふ是皆人力の過る故なり、禽獸蟲魚に難産を聞かず、恥づべし、扱人力にまぎれ物あり、公の人力あり私の人力あり、此處見分けがたし、工夫をめぐらし用ゆべし。

其次は誰ぢや。

拙者朋友此頃金の出入りにて、晝夜心を苦しめ候此儀に付いて御占頼たし翁の曰く、錢かねばかりを寶と思ひ、其實に縛れて命を縮る人多し、命を縮むる寶ならば、寶なきこそましならめ、眞の寶といふ物は、人々所持する、性根玉なり、此玉を寶と知らざる人々は、己が勝手の手惡き事には、此玉に瑕を付け、而も其瑕をきすと知らず、錢銀に目がくれば、玉の光を失ふに至る、玉磨かざれば光なし、日々磨き、又日々磨き、明德を研ぎ出すべし、古語曰く金玉を寶とせずして、忠信以つて寶とす、又曰く爾は玉を以つて寶とす、我は食らざるを以つて寶とす。

其次は誰ぢや。

弟の義に付いて御占頼みたし、翁の曰く、御舍弟が何とめされた、拙者弟別家いたして七年餘、是迄度々世話いたし遣せども、兎角渡世に不精にて此際もまた不詰り、其上拙者が異見を用るす兄を兄とも思はぬ不所存、義絶いたす心にて、皆まで聞かずこれ兄貴、君臣、夫婦、朋友の間にこそ、義絶といふ事もある、親子兄弟の中に義絶といふは何事じやと、去る學者が呵られた、指がきたなきとて切つて捨てる歟、まづ其元の心底に、弟を我弟と思ふ故、兄を兄と思はぬなど、瘦肘を張りたがる、弟は何じや、親の不便に思召す子で無い歟、跡から出生したる歟、先へ生れたる歟、跡先の違ひはあれど皆親の子にちがひは無い、我も親の子也、弟も親の子也と、親の所へ氣を付けて、親の心で世話をせば、世話も世話に成まじきぞ、扱又世話にも仕様あらん横町の何兵衛が三百目のかねに詰りて首釣りて死たと聞けば、知るも知らぬも残念がり、三百目位の事ならば己に云ひで、己が聞いたら死なせはせまいにと、云ひもし、思ひもすれど、びちく生きて居る内に、三百目なければ今夜中に首縊つて死ますと、血の涙でいふたりとも、恥ぢしめたり異見はせうづれ、銀子貸す人は稀ならん、其元も御舍弟の世話召さるゝならば、必ず跡へんにならぬ様に、心を付けて世話めされ、度々世話をいたしたと言はるゝからは、世話の仕やうが吝いと見えた、これく、御腹立てられな、世の中は人の世話

をするか、人の世話に成る歟、二ツにひとつのものぢや、其元が不如意なら、舍弟の方なら世話をする、同じ事なら人の世話をするかたが増しなれ共、皆左様には思はぬものぢや、舊臘も去る家の主、ながくの病に困窮し、朝夕の煙絶間がちなるを見るに堪へず、米錢少々贈れる人あり、其病家の悦ぶ體宛も死人の蘇し如く、親子四人が命をつなぐ是ぞ天の賜也と、ありがた涙を流しての悦び、誠に天の賜也悦ぶ體左も有るべし、又其施す人は、天の賜にて常に安樂に暮し、其賜の餘りを以て、困窮なる人に施す、此悦びは如何ぞや、纔十日歟、廿日歟の命をつなぐ米錢を貰ひ、涙を流して有難がり、悦ぶ人にくらべては、百倍千倍悦べき筈なれど、此所を知らざるは彼所を知らざる故なり、知り給へく。

其次は誰ぢや。

夜前朋友と諍ふ事あり、化物は有る物か、無い物か、御考へ給はるべし、翁曰く、聖人は怪力亂神を語らず小人は怪力亂神を聞きたるが、さらば化物の咄しを初めん、往昔く、長押に掛けた弓が蛇と化けて、客を惱せし事もあり、腐つた茄子が臺に化けて、人にとり付きし咄もあり、又爰に、或豪家何某の妻女、病に臥事半年餘り、勞瘵といふ病にや、諸醫手を盡せども驗なく、元氣次第に衰ふ、看病人多き中に、政といふこしもとあり、晝夜病婦の側を去らず介

抱また類ひなし、飲食起臥二便の扶け、政なくては調はず、病婦將に死んとするとき、其夫に向ひて曰く、我永々の病床、子とても及ぶまじき政が介抱、願くは妾が形見と思召され、不便を加へ給はれかしと云ひ遺きて命終りぬ、斯ありて三ヶ日目より、婢政病に臥す、其症先きの病婦に粗似たり、醫師は勿論、諸寺諸山の祈願、残るかたなしといへども定業にや、今は頼みすくなく見ゆ、政が父方の伯父あり、訪ひて曰く汝の養生身に餘れり、治しがたきは天命也、有りがたく臨終せよ、若し望みあらば云ひ置くべし、政が曰く、仰せの如く有りがたき御介抱何の不足有りてか望みあらん、去りながら、只ひとつ迷ひの解けざる事のあり、主人身まかり給ひて後、三ヶ日目の夜裏へ出しに、先だち給ふ御主人、千裁に立ち給ひ、物憂げに我を招く是を見るより身毛立ち、震ひ付きしが病の本、明けの夜まだ裏へ出づれば、又前の夜の如く我を招く、其後は夢とも覺えず、現ともなく、唯幻に見え給ふ、其恐ろしさ堪へがたし、かく惱せ給ふのは何の恨み有やらん、是のみ心にかゝるなり、伯父問うて曰く、其幽靈ものは何とも言はざりしか、政が曰く、唯我をまねくのみ、又問ふ、衣服は何を着給ひしぞ、曰く病中の寝まきの儘、籬に菊のお小袖なり、伯父の曰く、汝の病本復せん、我をしへに隨ふべし、今宵亦裏へ出でよ猶前のごとく幽靈あらば、身を捨てて側へ寄り、何の恨みにかく惱せ給ふぞ

と問へ、若し答へずば我を呼べ、共に行きて實否を正さん、政教へにしたがひ、病苦を忍び裏へ出で千載を見れば例のごとく髪うつさばき、籬に菊の小袖着て、恨めしげに立給ふ、絶え入るばかりの畏さを忍び、思ひ切つて歩行み寄り、よく見れば幽霊ならず、此頃種し山茶花也、髪と見えしは後の柳、招と見えしは爰の枝、小袖の模様は此枯枝、扱は心の迷ひなりと、迷ひ晴れば心も晴れ、忽ち病平癒して、今に存命なるよし聞く、是しきの化物さへ、正體を見届ざれば、病癒えず扱又爰に筆の先きで化し口のさきで化す化物あり、我等も化物仲間なり、或は君子に化けて居る小人もあり、衣着て居る鬼もあり、長者に化けて居るすかん貧もあり、此類又世に數多なれども、正體見え透き恐るゝに足らず、扱又一種、正體の見えざる恐しき化物あり、春は山々に花を咲けて見せたり、冬は水を氷にして見せたり、菜虫は蝶に化けて花に戯ぶれ、卵は鶏と化けて時を告ぐる、振袖着た可愛らしき小娘が、いつの間にやら、腰の屈んだ齒拔婆に化け、綺麗な若衆が、夢の間に白髪を生えた親父に化け今朝迄物いふた化物が、忽ち無くなつて仕舞たり、きのふまでなかつた物が、何所からやらぬつと出て聲を上げたり、無量無邊の化物だらけ、此化物の正體見届けざれば、見る物、聞くものに化かされて、迷ひを重ぬ、さあればとて此正體容易に見らるべき物に非ず、適には此正體、見届けたと思ふ人あり、

是も亦化物なり、見届たと思ふ目が光る、誠に此化物の正體見貫んと思はゞ、先自身を見貫くべし、此自身また見易からず、慰み半分の學問、鼻歌交りの修行にては、中々正體處でなし足跡も見らるべからず、晝夜間斷なく心を盡し、月を重ね年をかさねば、豁然として貫通するに至らん歟、孟子曰く、其心を盡すものは、其性を盡すものは、其性を盡すときは、則ち天を知る。

賣卜先生糖俵終

賣卜先生糖俵

賣卜先生糠俵後編上

翁賣卜のいとま、机によつて眼り、夢魂廣漠の野に吟行す、春草所得顔に生ひ茂りたる中に、  
 麥藥の家あるをみる、主は蛙とおほしくて諸蟲あまた並居たり、亭主の好の赤かへる、歌の會  
 にやあるらんと心とまる折しも青漆の合羽着たる雨蛙ヒヨコくと飛び出で何やらガワく口  
 上のべ、案内して先に入る、主の蛙出で迎へ、名代の叮嚀兩手をつき、雨中の來臨憚り多しか  
 くのごとく小蟲ども相集り毎く會補致すといへども井の内の我々、いまだ大道を聞かず、希  
 くは教を受けん、翁今更我は賣卜なりともいはれず、席を改め見臺に向つて曰く道の道とすべき  
 は常の道にあらず、名の名とすべきは常の名にあらず、是はこれ老先生の言葉なり、いづれも  
 此常の道は如何見られ候ぞ、一人づゝ答へめされ、蛙あとじさりして曰く、常の會には問ひを  
 出し、互に答へを廻せども今日は先生在す、唯御教示を願ふ而已翁の曰く、然らば少と御手を上  
 けられい、さう堅うては咄しが出来ぬ、扱其元は不斷兩手を突いて腰を伸ばさず、唯懇懇に四  
 角四面なるを禮と思へり、禮の禮とすべきは常の禮にあらず、汝は外のみ知つて未内を知らざる

なり、姿形を禮とはいはず、禮の形によらざる事を譬へていは、親の喉に餅がつまりくるし  
 む時は、其子打ち叩いても危きを救はん、是不孝ならんか孝ならん歟、汝がごとき僻見の者は  
 親を打つは不孝なり、叩くは無禮なりとて、斃るをまたん、是孝歟不孝歟、安宅の關の金剛杖  
 も、忠といはん歟、不禮といはん歟、嫂水に溺るゝ時は手を取るも不義にあらず、禮なりと言  
 はすや、是等は外不義不孝不忠に似て内忠孝に叶ひ、禮に中る、蛙の面に水かもしらぬが、爰  
 をよく聞れよ、是は道に叶ふそれは道に背くなどと、道を挺に遣ふ人あり、是は其道とすべき  
 道にて常の道にあらず、常には萬古不易といふ、道とは何んぞ、本然の妙道舌をもつて言ふべ  
 からず、筆を以て書くべからず。

次なるは蟹と見えた直なる道を横に歩行む、一見識有つての事か蟹這ひ出でて曰く我は心のす  
 ぐならざるを恥ぢて、形の横さまなるを恥ぢず、心直くば、すがた形はさもあればあれ、孝は  
 猿が島の咄しに残り、忠は武文蟹の背に残す忠孝二つながら至し、何んぞ形の醜きを恥ぢん、  
 弓のかたちは斜なれども、弓の心は直きがごとし、翁の曰く、汝も蛙とおなじ事、目の付け所  
 が違うてある、弓の斜なるは即弓の直きなり、尺取蟲の曲れるは伸んと欲してなり、謝靈雲  
 が曲れる笠は汝がごとき我儘にはあらず、其影の曲れるを見て心を直くせんため也、瓜田の履、

季下の冠、皆其形のあしきを戒むるなり、蟹横に出でて曰く我は蓋に金を包む翁は塊を錦に包む歟、翁の曰く、金を錦につゝむには孰れ。

田螺どののくいまだ道を聞かざる歟、死を恐るゝ事、人よりも甚し、人の足音鳥の羽音、そよと吹く風の音にも門戸をさす事周章し、是死を恐れ生を貪るにあらざるや、死を恐れ生を貪り門をかため戸を閉ても、人其門戸共に取りて釜中に煮る、要心堅固なんの益ぞ、田螺の曰く、益をもとむるにてもなく、損せまじにもあらず、唯我用心ふかきは、人々の目の要心深きがごときなり、明を貪り、暗を恐るゝにはあらざれども灰が立てもちやつと閉ぎ、炭がはしつてもちやつと睡を合す事、間に髪を入るべからず、又寢入たる小兒の物おとにびくくするも、死を恐るゝといはん歟、生を貪るといはん歟、是私の入らざる所、釜中に煮らるは天なり、天を知者は命をしる、本より生を好んで生るゝにもあらず、死を悪んで死ざるにもあらず、故に富貴も欲せず、貧賤も欲せず、短も欲せず、長も欲せず、方なるも欲せず、圓なるも欲せず、翁聲かけ、これく一對いうても濟む事ぢや、いひならべし欲せず盡し、汝に於ては可なれ共、いまだ道とすべきの道を離れず、唯欲せざるをも欲せず。

次は女中の御目付職、不義のあるない吟味する、守宮とは汝よな、仰せの如く歌にもよまれ、詩にも作られ、古き書物の端にも出でて御存知の上なれば、委細は申さず宮女を守るといふ事にて、守宮とは書き侍る、翁の曰く汝を宮女に付け置けは、不義させまじき爲にあらすや、然るに汝が黒焼は、却て不義の媒するよし、翁風に傳へ聞く、此言譯有りや如何、守宮眞黒になつて曰く、夫はあとかたもなき空言なり、虚を賣つて利を貪る横道者のなす所、覺えもなき功能書、石摺にて張りし行燈夜の編笠、明りの走りぬ賣薬店買人のあるもをかしけれ此薬にも限らず、近頃は札廻しの能書にて、腎薬とさへいへば、買人多しと聞きおよぶ、是もをかしき事ならずや、其腎薬をあてにして身をほしい儘に持ち、腎虚火動の症となり、終には命をとり邊山、あだし野の露と消えて行くはかなしとやいはん、愚なりとやいはん、翁の曰く、夫は先世間の沙汰汝は人の不義あるを見出さんとする否な役なり、其役人の内にも氣々有りて、少しの不義にてもあれよかし、見出して己が手柄にせんと隅々まで覗き廻る者もあり、又甚しきは賄賂を取つて見免すもありと聞く、其賄賂取つて見ゆるすなどは、かの不義せしものと何れか科重からん、又少しの不義にてもあれよかし見出して己が手柄にせんとすみくまで覗く者は人の不義あるをよろこばん、人の不義あるを悦ぶ者は不義同前の不義ならん、扱又律氣一遍に不義はないか、もし見落はあるまいかと、隅の隅まで窺ふ者あり、己が役目に油断せぬ正直な



る様なれど、君子は取らず、さればこそ、論語に曰く、評は以て直となす者を惡むとあり、或國の明君目付役なる者に問せ給ふ、汝は人の惡あるを見出さんとする職なるか、惡しき者を見出さんより、善者を見出し申し出づべしと仰られしとて、此事を聞く者、未々の民に至るまで、其仁徳に服せざるはなしとかや。

次なるは上橋環を喰ひ下黄泉を飲むといふ、蚯蚓とは汝よな、一寸の蟲にも五歩の魂あると聞く、汝を二つに斬るときは、其二つともに動く何れのかたに魂あるや、蚯蚓答へず翁歎じて曰く、夕に道を聞く事を得ずして朝に大道に出でて死す、教へんとするも耳なし、嗚呼縁なき衆生は度しがたし、蚯蚓勢をつかし長うなり、短う成つて曰く、昔智勝佛のとき我問うて曰く、我等何を食ひて生をたもたん、佛の曰く、土を喰へと、我其土の盡んことを恐れて又問ふ、もし土盡きなば何を喰へん、佛の曰く、土盡きなば大道に出でて死すべしと、此故に今に至つて夏の土用に大道へ出でて死す、ゆるに死も私ならず、生も又私ならんや、生死既に私なし、況や生死の外なるものをや、翁の曰く私無きは則私、なんぞ私なしといはん、必ず修行倦む事なかれ、小暗でブウ〜いふは誰ぞと思ふたら蚊歟、飛行自在の身と成りて、上は貴人高位の門にも入

り、下は野臥かまほこの寢屋にも交り、竹林に遊びては、七賢の樂しみを下目に見て、餅搗したのしみ、上見ぬ鷲の衆類なれども、汝も本は此連中、水門剩水を大海とし、棒一本の身體さへふり廻しが出来かねて、七沈み八浮き嗚呼出世もなればなれものかな、蚊聲を細めて曰くさのみ羨み給ふべからず、翁世間の縁組を見ずや、提灯が釣鐘に嫁入して、結構なるものを着飾腰元數多連るを見ては、あやかりものちやの仕合のと、他の目からはうらやめども、外がはばかりで内は見えぬ、根が釣合はぬ縁組なれば、姑小始にきがね多く、一家の付合ひに氣をいため、其外出入りの者にまで、思ひの外心を遣ひ、内徒の者にも氣をかねて、薯蕷が御内儀になり、めつたにぬら〜出歩行くと陰口などを聞く時は身を裂る、こゝちならん、養子とても其通り、能い所へ養子に入り、河に不足の無い身となり、結構な事ぢやの、果報ぢやのと餘所からはおもへども、不足があるやら不足が無いやら、たのしむやら苦しむやら、水鳥の浮いて居るは樂さうに見ゆれども、足にいとなき世を渡るかな。我等も剩水に住みし時は、金魚の口が否なばかり、外になにの思ひなく、貧賤にも樂しみありき、今は出世の身なれども、富貴にも又苦しみあり、蚊遣には薫べられ拂子には追ひ散らされ、あるときは片手の聲にも命を失ふ、更れば蚊帳に隔てられ、心の儘ならぬを啼き明し、晝も適々顔出せば、あばれものよと

まるゝ、されど命のかなしさに、憎まれて世にすむかひはなけれども、蚊あいがられて死ぬよ  
りまし蚊、翁の曰く汝求むる心あるゆゑ苦しみ絶えず、古語に清貧は常にたのしみ濁富は常に  
憂ふといへり、歌にも

諂ひて富める人より諂らはで貧しき身こそ心やすけれ

翁其次は誰なるらんと、天眼鏡を以て見、うぢくするは、水蟲ども歟、體小さければ、命も  
また短からん、汝も生たる甲斐のあるや、水蟲の曰く、翁伏見街道を通りて見すや、牛もあり  
狐もあり、龜もあり蛙もあり、西行もありおやまもあり、其外人物は、貴賤老少、僧俗男女、  
禽獸蟲魚に至るまで、さまざまの土細工、形に大小あり、彩りに美悪あり、美悪大小異なれど  
も、其本は一つなり、命盡きて碎けて仕舞へば、また本の一つに歸へる、我形微なりといへど  
も、萬物のひとつなり、翁の未生已前と、我水蟲の未生已前と、二つ歟一つ歟、我命短く、翁  
の命長しといふとも、宇宙の窮りなきより見れば、毫髪を入るべけんや、翁目をむいて曰く、  
ちよこざいな水蟲ども、誰に聞いてべりくしやべる、いふものは知らず、知るものは言はず、  
嗚呼去りながら殊勝な事ぢや、かならず修行怠らざれ、水蟲再拜して曰く、希くは教へを受  
けん、翁微笑して曰く、をしむらくは、汝いまだ生死をはなれず、生死なくんば未生もあらじ

翁夢覺てあたりを見廻し、今のものは誰ぢや、不佞數代交易を業として、銅駝坊に住す、今  
故有つて卜居せんと欲す、先生の卜筮微妙なる事かくれなく、千里を遠しとせずして來る、乾  
坤兌巽吉凶如何、御考へ給るべし、翁目をすりく顔をながめ衣體を見て、歎息ついで曰く、  
愚老は不學文盲にて角な言葉は讀がくだらぬ、世間通用の丸い言葉で仰せられ、卜居とは宿  
替への事歟、交易とは商賣といふ事歟、商人の能きぬ着たるは不相應なものに、昔の物知りか  
いうて置れた、其もとの衣紋付、言葉つかひ、商人臭い所微塵もなく、商人の渡世覺束ない、  
定めて内證不如意に成り、逼塞の變宅ならん、客赤面して曰く、御賢察に違はず、四五年前よ  
り不如意になり、其不如意の尾を見せまじと氣を賦り、世間を張り、ないものも有る顔に、内  
徒の者迄化すとて、思ひの外なる費へ多く、最早はかす術盡きつ、此盆前の蓮の葉は破れかぶ  
れの穴這いり、翁の曰く、跡へんく、四五年前にも貧乏を突出して、一家朋友にも相談かけ、  
格式もさけ人も耗し、絹が着られずば紬、つむぎが着られずば、木綿、成様にして渡世せば、  
逼塞せずと濟むべきに、容の曰く、拙者とても是までに、人の身上仕舞ふを見ては、去とては不  
覺悟なり、せめて四五年以前にも、末のつまらぬ氣がつかば、家屋舖には放れまじと、人の志  
賀からさき見えて、我身の上はかへり水海、最少と前から帆をさけて、楫の取様あるべきに、

權の廻らぬ様に成る、今更後悔、翁の曰く、盛衰は世のなりひ、珍しからぬ事なれども、貧乏を突出さるゆゑ歩行が早い、貧乏を突出すとは、錢銀ばかりの事ではない、萬事に貧乏突出して、知るをしるとし、しらざるをしらざるとし、見ぬは見ぬ、聞かぬはきかぬで済んだる事を負借みの輩は、なけれども有とみせ、知らざれども知り顔して、世間の人を欺けども人また相應に値打して、虚直のあるないは見取、深々と買ひはまらぬ、さあれば何の益なきのみ歟、一生己が心を欺く、心苦しき事ならずや、よしや又欺き果せ、萬福長者と見られ、博識多能と見られたりとも、何百歳が一生ぞや

見る人も見らる、人も轉た寢の夢まほろしの浮世ならずや  
拙者所用有つて、旅立ちいたす明日の日のよしあし、御考へ給はるべし、翁の曰く、晴天なれば吉し、雨天なれば凶し、曇天半吉、もし急用ならば雨天にても立つべし、舟は危きものなれども、日和のよしあしを見て曆を見ず、此所にて考ふべし、客の曰く、拙者も仰せのごとくにて心すめども、兩親ともにごまのごにて、かり初の事にて案じられ、夫故御尋ね申すなり、殊に拙者は槌に生れし子なりとて、親達は氣遣ひしてさまぐの咒事、槌に生れし子はかならず短命なりといふ、かゝる事もある事にや、翁の曰く我是までに槌に生れしといふ人の、五十越えた

を五六人も見たり、七十ちかき人にも逢ひぬ、又槌でない日に生れし人の短命なりしもあまた見來る、之に依つて翁は信ぜず、もし又槌に生る、子必ず短命なりといは、短命なる子は必ず槌に生る、ならん、然らば持つて生る、短命なり、持つて生る、短命なり、以つて生る、短命を呪ひ位で長命は覺來ない、客の曰く我等も左は存すれども、親達が氣遣はれ、方々へ願を立て、八日と十二日は藥師の日必ず蜻と虎とを喰ふな、蛭子の日は鯛はならぬ、毘沙門の日に百足を忘れな、何んの日はこの朝詣り、幾日は其所の御百度香水でも咒でも聞き付け次第、ごまのごのあへまぜなれば、近所の衆も笑ひ、朋友中には呵るもあれど、しからば呵れ、笑は、わらへ兩親の仰せにまかせ、明日の旅立ちも有様は願詣で、翁膝を直して曰く、父母在すときは其志を見、父母歿するときは其行ひを見る、親ある人の行ひは行ひばかり見て評判はならぬ、其志を見て其孝を知るといふ、其元の志翁大に恥ぢ入り申す、扱旅へ持ちてよき守あり餘別に進上いたす、孝といふ字を懐中めされ、此一文字を忘れざれば、何國いかなる處へ行きても怪我過はあるまじきぞ。

拙者壹人の悴に離れ、わすれんとするに忘るゝまなし、如何して忘るべき御示し給るべし、翁の曰く、子故に君父を忘れ給ふな、父母の爲に妻子を忘るゝは孝子のつね、君のために父母を

忘るゝは忠臣の常なれども、太平の御代には彰れず、近くは四十七忠、君の爲に妻子を忘れ父母をも忘る、能き手本なり、遠くは戦國の書を見て知るべし、扱また孝は父母の爲に天下を忘るゝ、大舜を始とし、妻子を忘れ其身を忘れ孝子達、和漢ともに珍しからず、爰に並ぶ咄しにはあらざれども、翁が舊里に何某とて本は處で指折りの家なりしが、盛衰は習ひとて、今は漸々小女郎獨を遣ひ、朝夕の煙も細々と暮しぬ、娘あり名は豊、十二歳の時、母病みて不食す、豊寢食を忘れ晝夜母の側を離れず、其介抱大人恥し、夜は更るも忘れ脊を撫で足をさする、或夜母の曰く、我不食は持病なり、二三日経ば本復せん、夜も更けて眠たからん休めよかし、朝は又早々起きて蜜柑を一つ調へよ、蜜柑の酢少しあらば、明日は食事も進むべし、去ながらいまだ蜜柑は色つかじ、賣買にはあるまじき、如何して求め得んと辛氣けにいひつゝ、寢入りぬ、豊は跡先のふまへもなく、心覺えの蜜柑畑、十町餘も有る處へ、畏さ寒さも打ち忘れ、ほのほの明けにたどり付き、三つ四つ取つて懐にす、小屋の内より番人見付け、貢も濟まざるに、人の蜜柑に手を掛る、盗人よ處の法に行はんと、泣くも詫ぶるも聞き入れず情なく引き立て行く、畑主何某は豊が容儀の賤しからず言譯けの健氣に感じ、さまざま、勞り自親元へ送り届けぬ、其蜜柑にて食もすゝみ、日あらずして全快し母子共に今にあり、其後翁問うて曰く、汝蜜柑を盗

みし事、親の爲の盗みは、盗みも孝行なりと思ひ盗みたる賊、豊泪ぐみて曰く、其時は孝といふ事も、盗みといふ事も忘れ唯蜜柑をほしきばかりなりしと答へぬ、是等も母の爲に其身を忘れしものといはん歟。

拙者近比は唯もの忘れをいたし、忘れまじと指を縊れば、其指ともに忘るゝなり、もし何ぞの崇りにてはあるまじきか御考へ給るべし、翁の曰く蛙は蚯蚓を見て蛇有る事を忘れ、蛇は蛙を見て猪ある事を忘れ、猪は蛇を見て獵人ある事を忘れ、獵人は猪を見て山の險しきを忘れ、是等は其軀を養んとて其身を忘るゝものなり、己れが賊にもあらねば身を養んとにもあらで、日の暮るゝもわすれて流れに立ち、罪も報いも冷えも疝氣も忘れ果てて魚を釣る人もあり、人の魚釣るをうっかり見て、丁稚は使ひの口上を忘る、其使ひの口上を忘れたる丁稚を、性根なしと呵る手代も、在所の麥飯雜炊の事を忘れて、此米は味ないの古くさいの、けふも又ひんとなの鰯鱈、など、つぶやく、其つぶやくを聞いて、嗚呼何所の手代も同じ事田舎の暮しの貧しき事は忘れ果てて、青梅縞は肩がさすの、小倉の帯は腰が重い何の角のといさこさいふ、扱々物わすれする者どもかなと笑止がる旦那どのも、先祖の辛苦艱難の御蔭は忘れて、自分の嗜欲には家の衰微するも忘れ、妻子にまよひては親兄弟の事をも忘る、天恩國恩父母の恩はいふも

更なり、人に恩を着たる事は忘まじき事なるに、エテは忘れて退るものなり、忘れても苦しからぬは、人に恩を着せたる事なり、其忘れてもくるしからぬ、恩に着せたる事はいつまでも忘れず、折節は言出して恩に着せる人もあり、心が見えて淺まし、又諺に「色は思案の外なり」といふ是も忘れて苦しからぬ事なれ共、少々の不義過のある時も色は思案の外なりと道理を付け、自身にも少しは赦す人もあり、是等は忘るべきを忘れずして忘るまじきを忘る、人なり、宿替へに女房を忘れたと聞いては手を打つて笑ひ、禪を忘れたるを忘れて尻からけしたるを見ては指さしして笑ふ、其笑ふ人の中にも、一朝の怒に其身を忘る、人もあらん、かならず其身を忘給ふな、不忠不孝非義非道に陥るは皆、我身を忘れたる人にあらずや、客の曰翁先には忘るべきを説き、爰には忘るべからざるを演ぶ、萬事忘れて可ならんか、曰ふ可也、忘るべきをわすれ、忘るべからざるを忘れずしてかならん歟、いはく未可なり、天道は爲すことなくして爲さざる事なし、堯は天下を忘れて天下をたもてり、孝子は孝を忘れて孝に中り、忠臣は忠を忘れて忠に合ふ、譬へば能く書く者は書く毎に心を入れざれども規矩を離れず、よく論ふものは節毎に氣を留めざれども拍子に合ふ、魚は江湖に相忘れ人は道に相忘る。

某男子三人もつ、總領は先十人並み、是には迹を續す積り、二番目は利發者、何商賣でも仕か

ねぬやつ、只苦になるは三之助、百姓も出来ぬ鈍物、夫故出家の思ひ付き、渡世の爲には何宗が性に合ん、御考へ下さるべし、翁の曰く剃髮して佛道に入る者は、財寶を捨て、家を出て、日中一食、樹下一宿とて、同じ木の下にも重ねては寝ぬといふに、渡世のために出家させ、佛を賣つて食へなどは淺ましき親心、其元のやうな親があるゆゑ、出家のうちにも出家にあらぬ出家もあるけな、是はその出家の科ではない、汝の様な親有つて、ぐわんぜもない稚子をたらしすかし出家ほど有がたいものはない、黽蹶も握らず、歩行荷持する事も入らず、結構なるものを着飾り、長老様の和尚様のと、玉のこしに乗つて敬る、親には生れ勝るなど、すゝめこまれ、泪ながら剃髮して、小僧の内は世間も知らず、何心なう暮せ共、陰裏のぬるでも色づく時は色付き、そろく美目のよしあしが目に留り、小歌三絃が耳に掛り、酒の面白い味を覺え初ては、もはやまつ香の香が鼻につき、佛の顔も三度づゝの勸行に飽き果て、門を出れば極樂ちやと、寺を火宅の様におもひ、後には親をも恨むるに至る、取わけ幼少から尼にするは、餘所の目からも氣の毒なものぢや、發心の出家にさへ墮落するもありと聞く、身過ぎばかりの事ならば出家にせずとも心易き相應の家職あらん、子が生れば乳が添ふ、鈍な者は鈍なり、片輪な者は片輪なり、喰分はあるものぞ、去ながら父教へされば子愚なり、教ふれば鼠も酒を買に行く

扱鼠に付いて思ひ出したる咄しがある、昔益徳寺の正損とて尊き和尚有り、或日齋の戻りに海邊を過り生海鼠の波に漂泊を見て歎じて曰く、嗚呼寢たか悟た歟、尻か頭か偶々受がたき生を受ながら、目なければ佛像も拜まず、耳なければ御法も聞かず、口妙號を唱ふる事能はず、漁夫來つて突んとすれども逃んとする智慧もなく、姐に乗つてもはね廻る力なし、藁に縛られて一生を終ん危いかな、現世なほ斯のごとし、況や未來覺束なしと回向して歸りぬ、其夜生海鼠和尚の枕に立つて歎じて曰く、嗚呼寢てか悟めてか、僧か、俗か、たまく出がたき火宅を出ながら、目あるゆゑ五つの色にまよひ、耳あるゆゑ三筋の聲に迷ひ、口飲酒妄語を戒むる事能はず、講中來つてのまんとすれども退れんとする智慧もなく、乗ものに乗つても自前に拂ふ力なし、借錢に縛られて一生を苦しめん、小拂ひ猶かくのごとし、況や實際覺束なし、危いかなくと言ひ捨て、歸んとす、和尚衣にすがりて曰く、請願くは教へを受けん、生海鼠するするべつたり坐り、我天地をもつて一字とすれば勸化奉加の世話も入らず、上に本寺なく、下に末寺なく、中に旦那なければ納豆の仕込に氣を入らず、和尚我に耳目なきを憐れども、我耳目なきゆゑ講中のねすり言を聞かず旦那の苦い顔も見ず、口なければ齋米の吟味もしらず、富貴に心なければ、大黒を勸請せず、ころくと丸寢して寒暑の憂ひを知らざれば、おほりに

氣がねする事なく、在所の姪を呼寄ざれば疑受る覺えなし、現世すら如くの如し況や煎海鼠に於てをやと組に水流すごとく疊かけく、いふ聲ばかり寢耳に残り、小疊になつて消えにけり、扱先刻からの長ものがたり、皆其元へ異見の爲なり、かやうなる御出家、今もありといふにはあらず、翁が例の悪口必ず他言御無用く。

先生けふは賣りが買ひか一寸御考へたのみたし、翁居直り、誰ぞとおもふたら錢屋金兵衛此間もいふ通り、不實賣買は壽命の毒、足下親からの商賣といふではなし、殊に親もあり、妻子もある身、もし手合が違つて負けて仕舞ふか、氣でも打て煩へば、其もと其元なれども、跡の難儀、翁は交易の道を知らざればいふは近比慮外ながら先不實商ひといふ名が悪い、茲へ出合はぬ事かしらねど、孔子は盗泉の水を飲まず、曾子は勝母の里に入らず、是皆名のあしきを惡み給へばなり、賣りての仕合買ひての幸こそ交易の本意ならめ、賣人に徳を得れば買人に損あり、買人徳を得れば賣人損あり近ういへば勝負事同前の賣買、汝勝たば人負ん、人勝たば汝負ん、汝負なば汝の家内流浪すべし、人まけば人の家内流浪せん、家内の流浪も慮らず人の流浪も顧みざるはこれ不仁の至りなり、不實商内とは最悪口、不仁あきなひというて可ならん、是は翁が例の悪口言ひ過しは御免あれ、客の曰く、拙者は御存知の小膽ゆゑ米には掛らず、金の相

場は纒つゝ慰みがてら致せども仰の如く壽命の毒、相場事にかゝるものは、胸をいためたり血く吐いたり、心痛とやらで死んだもあり、それ程にまで身を入れて立身すればよけれ共、立身するは稀にして多くは皆潰れて仕舞ふ、翁のいはく貨悖つて入る者はまた悖つて出づといふ、偶々立身仕たりとも、仕舞ふも又早からん、夫は時の運ともいへ、茲にひとつ問ふ事あり、命が尊いものなるか、足一本が尊いもの歟、客顔をながめて曰く、翁何事を仰せらるゝぞ、手足も大事の代呂物なれども命に競べらるべきか、又問ふ足一本給らば陶朱倚頓がごとく富さんと、いはゞ賣るべきか、曰く、唐日本にかくれなき富を得るとも足なくて何の樂み、翁曰く命に競べては値打の低い足でさへ、唐日本にかくれなき、陶朱倚頓が富にも替へぬ、然るに手足にくらべては、遙に尊い大せつなる命をば、纒十戸前か廿戸前の富に替ふるは、いかなる事ぞ、かかる人世間に多し、賣買下手といはんか、上手といはんか、素人目には見えぬ。

動くなくおのれこそはチクラが沖にかくれ住むまつくろ黒なくろ鬼とは偽り、誠は四條河原に徘徊する乞食で有ふがな、コレはく見通し様でござりますか、私も腹からの乞食でもござりませぬ、少しの心得違ひより、かやうな浅間しき形に成りましてござります、翁曰く片輪歟或は孤獨などは是非なく乞食となりませぬ汝五體不具にもあらず、何業でも仕かねまじき

かつぶくにて、非人仲間へ陥るとは、嗚呼天なる歟時なるか、乞食かぶり振つて曰く、天にもあらず、時にもあらず、皆私がなす所なり、乞食にはなるまじき、非人とはいはれまじと、人らしき心有つては乞食にはならせぬ、翁の曰く如何様乞食にも大抵ではならぬと聞く、深き傳授も有りや如何、乞食身上市りして曰く、格別ふかき秘事口傳もおはしませぬ、唯友を撰ぶにあり、善友に交りては中々非人にはならぬものなり、悪しき友を友として、酒も飲習ひ嘘もつきならひ、窮屈な事を嫌ひ、夜遊びを好き、小博奕も打覚え第一親の言付をきかぬ様に、伯父叔母の異見を用るす乞食にならねばならぬ様に身をもてば、終には乞食となるものなり、奉公人も同じ手段、最初はあしき友に交り、まづ新地俵の字の味を覚え、影日向を第一にして、小宿にては買喰仕習ひ三絃もチツクリかちり習ひ次第に塗に塗が付き、上達するに従つて主人番頭の目を抜き覚え、請人に預けられても、恥を恥としらざれば、直さんとする心なく、宿の伯母までむごうだまし、後にはイ所さへ、何にもなしのてんつるてん、是でも乞食にならずんば、天賦時かと疑ふべし、翁小童を呼んで曰く、米でも錢でも遣つて歸せ、誠に水は方圓の器ものにしたがひ、人は善惡の友による、彼等も友によらずんば、乞食迄にはなるまじきたとへ氣質は人並にあらず共、麻の中なる蓬を見よ能人に交つて人の人たる道をしらば、非人と

は言はれまじ必ず餘所の事では無い、乞食遠きにあらず、人のふり見て我振なほせ、子の曰く  
 三人行ふときは必ず我師あり、其善き者を選んで之に従ひ、其善からざる者は之を改む。  
 拙者普請を致すに付き御占ひ頼みたし、一昨年までは親共の代、其時も只今も人数替りなけれ  
 ども、諸道具も漸々にふえ、何角に付て狭くもあり、勝手もあしく、建て直す積りなり、翁の  
 曰く鬼門ふさがりの事なる歟、是は世間なみに除けたがよい、夫は兎もあれまづ三年父の道を  
 改めざるを孝と言ふべしとは、子の曰く見えたり、是まで親の仕來りし事の内に善き事は  
 いふに及ばず、もし不勝手なる事有るとても改めざるを孝といふ、殊に親の代から夫なりで濟  
 んだる家、堪忍せば堪忍ならぬ事はあるまい、縦令五間三間廣うなつても欲には限りのないも  
 のにて、幾間あつても今一間足らぬ、客の曰く此思ひ付き今更の事にあらず、親共は昔かた義  
 の普請ざらひ、夫故云ひ出しは致さねども、四五年此かたの心工み、翁顔をながめて曰く、然  
 らば汝我代に成つたら爰を斯うせん彼所をも斯くすべしと心の底に工面ありしか、夫は近比親  
 の死を待ちかねしといふ言分、其氣ならば親の手馴し諸道具も賣り散し、自分の好に仕替る氣  
 か、去とては冥加しらす、扱又能人は格別じや、我朋友何某先年病みし時、我訪うて曰く足下  
 の病輕症なれども再三の事なれば侮られず、もし御老母に先立たば歎きをかけん、不孝にあ

らずや、御老母を見送るまでは大事の身なりと、養生の事くり返しいひし時、其病人不豫の色  
 見ゆ、扱は我多言なるを厭ふかと首尾あじく歸りぬ、其後日を経て問うて曰く、足下いつぞや  
 不豫の色ありしは如何なる故ぞ、彼何某の曰く、老母を見送るまでは大事の身なりと仰せられ  
 しが氣に障りぬ、親に先立つは不孝なり、歎きを掛るは否なれども、親を見送る事はいつまで  
 も猶否なり、逆さま事ともいへ、不孝ともいへ、老母を見送らんよりは、我身を見送らるゝが  
 ましなり、此已後かゝる後挨拶必ず遠慮あれかしと打ち込まれ、赤面せし事ありき、汝とは雲  
 泥の違なり、汝も能い人に交りて人の人たる道を聞れい、相應に暮し當分不自由に無い人は、  
 學問せいで済んだ事のやうに思へども、己が好きな事か、嫌ひな事歟、災難に逢ふか困窮するか、  
 何んぞ事にあつた時、學問の力無くては欲に迷ひて邪路に陥る、扱又其元は道具好と見え申  
 す、諸道具も過ぎたるは猶及ばざるがごとし、掛物なども唯一幅なれば盆も正月も祭にも其一  
 幅にて不自由なる事なし、三幅か五幅持とはや不自由になり、ざつとした法事の掛物が一幅ほ  
 しいの、庚申待のがないの、戎講のが足らぬのと不自由だらけ、花生なども同じ事、膳椀重箱  
 の類も其通り、員重れば却つて不自由な是も修行して道を知れば有つても不自由になし、無く  
 ても又不自由になし、扱此間或人手筆筒を求めしとて予に見せて曰く、是はある大家の拂ひも



のにて、今新に調へば五十兩も出づべきを、我等下直にて求めしなり、かりそめの手道具さへ此の如き結構づくめ、金具許に十金も掛りしよし、是ほどに奢らずば、大身体は潰されまい、分散めされしも断りなりと語りぬ、予が曰く人の過を見つゝ其又道具を求めらるゝ其元は分散の下稽古でもめさるゝかと例の悪口いうて笑ひぬ。

賣卜先生棟俵後編 下

翁童子を呼んで此次は誰ぞ我等年よつて堪忍情なく、内徒の者を呵るを聞きて隣人のいはるゝには、其元の堪忍情なく家内むつまじからざるは、年のよつたばかりでない、學問の無き故ぢや學問せよと有るに付き手の筋を見て貰ひに参つた、我等がやうな只の親父も學問の出来る手筋ありや、御考へ給はるべし、翁の曰く學もんせうと思ふ志しさへ出来たらば、外を尋ねるまでもない近い所に能い師がある、我身の上を定木に召れ、人我親を敬うて下さるが悦ばしくば、我又人の親を敬へ、人

の深せつなるが嬉しくば、人を深せつにし、上たる人にしかれて心よからずば、下たる人を呵らぬやうにし、己れが欲せざる所を人に施す事なけれ、内徒の者の思ふ様に廻らぬは、痒い所へ手の届かぬやうなものぢや、自身の體を自身の手でかくにさへおもふやうには廻らぬものを、人が痒い所をかくやうには行かぬ筈ぢや、人々腹は立いでも濟事ぢや、腹立てまいとおもへども折節は腹立て怒り罵り跡にては立まじき腹立て、人にも腹を立させしと悔めどもまたしては腹をたてる、大酒は毒なりといふ事は人も言ひ自身にも覚え、大酒はせまいとおもへども折節は飲み過ぎ薬の針のと騒ぎ、人にも呵られ自身も懲りて、もはや一生大酒はせまいとあとにては悔めども、またしては飲み過ぎ、又しては飲み過ぎ、我心さへ我思ふやうには行ぬものを、ましてや人が思ふやうに行べきか、まづチンブカンはいらぬ、かんにんの四字から修行めされ、堪忍情のないといふは我儘にて、堪忍のならぬといふ事はないものぞ、春寒いと秋風いは堪忍のならぬものに、むかしからいうてあれど是とも堪忍するときはする、扱又本人にも合點させず皺をよせたり白髪にしたり、目をかすめたり齒を抜いたり、ちようさいほうにしたられても、堪忍せねばならぬ事にはどんな親父も堪忍するぢやによつて堪忍のならぬ事は無ものぢや、扱今も言ひしごとく我心さへ我思ふやうに行くまいかの。其我心の全體を吟味するがま

づ學問の第一也、工夫してまたく御出で  
 私は田舎の百姓、悴を奉公に遣し度く、かねて知るべの方を頼み置き、唯今連れて登る所  
 幸の見通様、何商賣が相應すべき御考へ給はるべし、翁の曰く商賣の相應、不相應は、我等に  
 聞きては結局邪魔に成る事があるものぢや、是はまづ頼み置きし、知るべの方へ落着いてとつ  
 くりと相談の上極るがよかるべし、歳は十一か二か、奉公の口は何ほもあるぞ、扱て親父との  
 四五年も奉公させ、ままと用に立つ時分に呼び戻す智恵付といふやうな事ではないか、其の手  
 も間々有ると聞いたが、是は甚だよからぬ事ぢや、たとへ主人と相對の上にもせよ、京の能い  
 事を見習うて歸んでは田舎の間には合ぬのみ歟、氣ばかりが高うなり着物や食物にまで不足を  
 いひ後にはもてあますものぢやけな、兎角百姓は百姓、舟乗は舟のり、田舎に住む者はやつ  
 ぱり田舎仕立てがよいけな、親父の曰く私共は穢田畑十反足らずの百姓にて、三人の悴を  
 持つ、是を三ツに分けて譲れば三人ながら一生身を粉にはたかざればはつたれぬ身分、  
 夫を不便に存するから、せめて壹人は奉公致させ、末の出世を願ふばかり、中々榮耀ではご  
 ざりませぬ、翁の曰く燒野の雉子夜の鶴、子を思はざるものはなし、去ながら可愛さも裏へ廻  
 れば姑息といふ愛に成、かならず甘い毒を喰せまいぞ、とり分奉公する子には、親の甘きがつ

ひ毒ぢや、苦い藥を用ひるが能い、むかし妙惠上人の庭の草を鹿の來て喰ひしを、上人見給ひ  
 アレ打よ叩よと、聲あらく下知をなし、自身にも杖ふりあげ情なく追給ふ、弟子衆驚き、常に  
 替りし師の振舞ものにくるはせ給ふかといひあへり、上人聞し召れ人に剛させまじき爲なり、  
 人なれて里へ出なば、終には人に命を取れん、不便さになく打せしなりと仰せられしとかや、  
 其元も子が不便ならば、熱い灸をするたが能い、扱息子よ今親父の言はれし事を覺えてゐるか、  
 在所に居ては黽蹶の泥まぶれ、味ないものを食ひ、よごれたる物を着て一生辛苦心勞をせねば  
 ならぬ、親は夫を不便におもひ、奉公をさせるのぢや、必ず親の心を忘れまいぞ、扱夫にござ  
 る手代衆も能い序ぢや爰へ出て御聞きあれ、面白く咄しがある、サアくづつと寄つて聞き給  
 へ、さる手代二三人、遊所にて遊女藝子に戯れて曰く、此京中の遊女藝子東西南北算へて見れ  
 ば夥しき數ならん、其内に請出されて片付くは百人に纒か四五人あるかなし、その残りの色  
 達は何になるぞ、蝶に成つて飛び去るといふ沙汰もきかず、蟬に成りしとて脱空も見ず、古物  
 店や干賣見せにも手の抜たおやまちやの、足の折れた藝子ぢやのと出てあるをも終に見ぬ、何  
 處へ消えて仕舞やらと不審立てれば遊女の曰く仰せの通り遊女の數も多からんが去りながら京  
 中に勤めてござる御手代衆の敷に競べば百ぶんのひとつもあるまじ、其夥しき御手代衆の中

にも首尾よく宿這入りなされる、おかたは百人の内に十人が十五人廿人には足らぬけな、其残りのかたぐは、何になつて仕舞ふやら、仙人にても成りなされるか、髭も剃らず髪も結はず、木の葉衣と云ひさうな物を着て、河原に寝てござるお客を見たといふ人もありでつかい仙人のやうな形に成つて歩行てござるお方をば、私も折節見もしたが、皆々仙人に成れもせまい、何處ぞに這入る穴でも有歟、不審なるはこなたより、あなた方の御身の上末はどうなる事ぢやらと藝子は三味せん引立てれば、三人の手代共少しは酔ひが醒めたやら、こそく逃けて歸りけり、いかさま遊女のいひしごとく、此夥しき手代の内首尾能く宿へ這入るは稀にして、多くはしくちつて仕舞ふと見えたり、我身を忘れし者共かな、其我身を忘る、本はといへば、親の心を忘る、ゆるなり、親の心を忘るる故、不奉公して流浪したり、金など遣うて欠落したり、親の心を苦しむる、手をもつて殺さねども親の命を縮むる不幸此の如き人々はたとへ利發に有うが算筆に勝れうが、廣世界にイ處は有まじきぞ、扱また親の心を忘れざる人は不奉公して流浪せば、親に苦勞を掛るとおもひ、陰日なたなく大事に勤め、喧嘩口論して、人に痕でも付るか身に怪我でもある時は親の心を痛めると思ひ、随分物毎に堪忍して負けて居る様に身を持ち病めば親の案じるとおもひ、不養生せず、浮雲い所へゆかず、唯何事も親の心にまかするゆゑ、

少く鈍でも不器用でも主人にも見捨られず、朋輩にも憎まれず、身も治り出世もする、翁が懇意中の手代なる者、廿五歳のとき、半年も立ざる内に其主人の夫婦共に病死す、跡は三歳の男子ばかり、此手代是を守立て相續せんと心を碎き、主人の一家一門へ此趣を願ひ、扱また己が舊里へ行き、親兄弟にいとまを乞ひ、歎きて曰く、我等四五年の内には宿へも這入り、両親も安堵させまし兄弟の心便りにもなるべしと樂みに思ひし處、存じよらぬ不幸に逢ひ主人御夫婦に離れ、跡とりは幼稚なり、甚だ家の危き場所、我及ばずながら後見して、跡相續を希ふなり、然れば宿這入りの事は勿論、此後舊里へ御見舞申す事も稀なるべし、此儀御許容下さるべしと涙を流しての願ひ、此時親の心に成り、忠義を感じて悦ぶまい歟、譽めまいか、其後此人大酒せず、飽食せず賣用にて急なる時も矢橋を渡らず、馬に乗らず、常に曰く主人生長するまでは我身ながら大事の身なりと、養生堅固に勤めしなり、是を聞き親の心安堵せざらんや悦ばざらんや、是等は親の安堵するやうに身を持ち、親の悦ぶ様に行ふ故、忠も立ち孝もたち我身も立つ此所翫味すべし

此人夏は丹波布を着、冬は木綿の外身につけず、萬事實素にして家業油断なかりしゆる家益益繁昌して、今も猶あり

是なるは拙者竹馬の朋友にて、本より愚痴にはなき人なれ共、此夏愛子を先立てより此かた、其子の事のみくよく／＼おもひ、あのごとく憔悴に及ぶ、何とぞよき御考へはあるまじきや、翁の曰く、其元は我子の死んだを死ぬまじきもの、死んだやうに不思議に思ふ歟、客の曰く仰せの如く日比病身者ならば其咎共思ひ、あきらむべきが、無病なる生れ付にて、痘瘡麻疹も輕う仕上り、其後益々達者にて、風ひとつひかざりしに中暑とやらいふ病をうけ、ふと目を見つめて空しくなる是が不思議にあるまいか、翁の曰く死んだばかりを不思議におもひ、産れたは不思議に無い歟、生きて動くは不思議にあらずや、汝に限らず人は唯、鼻や蝙蝠などの晝は大山を見る事あたはずして、夜は蛋をとり、蚊を取ると聞いては、不思議なりとおもへ共、自身の目にさまざまの色を見分るをば、不思議にはおもはず、辣椒の辛はいかなる故ぞ、砂糖の甘いは何故ぞと、不思議がれ共其味を覺ゆる自身の舌を不思議なりとおもはず、何ひとつ不思議にあらざる事なれ共不思議なりと思はざるゆゑ、死んだばかりを不思議に思ひ、彼是と心を痛める、産れたをも不思議におもはず、死んだとてさほど憔悴するには及ばじ、朋友の曰く翁の仰せらるゝ通り死も不思議、生もふしぎ、福もふしぎ禍も不思議、ひとつ／＼押してゆくに何一ツ不思議にあらざるはなけれども、空すべりして不思議と思はず、まづ自身の視聽言動

を初め、何が故に視、何がゆゑに聞き何が故に言ひ、何がゆゑに動く、何が故に斯くの如くさまさまの事を思ふぞと、ひとつ／＼不思議を立て、不思議一遍になつて起居も忘れ、寢食も忘るゝばかり、力を入れて工夫せば、どこぞのはしでは其不思議の底ぬけて、水たまらねば月も宿らずといふ場所に至るべき歟、翁の曰く、是もひとつの工夫なり、さりながら疲力にては何かあらん、扱また憔悴との、其元も死んだ子の年ばかり算へずとも、何にても不思議にないものあるならば、尋ね出して持つてござれ。

某は此あたりの藪醫にて、醫道は本より師家あれば聞くに及ばず渡世の事に付き御考へ頼みたし、療治も凡そ口に糊する程の事はあれ共、外の家業と違ひ、家居衣體を張りこまざれば賣れが鈍くはり込めばまた造用に負け、詰る所は杉原の反古と辛勞とが利になるばかり、如何せば安樂ならん、昨年のやうな麻疹が年毎に二三度づゝも流行すれば能けれ共、偶々／＼の事なる故、去年の儲けは却つて今年の疹癖になり、按摩とりに至るまで格式が上り迷惑ならん、風邪と麻疹の勢ひに、是まで裏屋で濟んで来たも俄に表へ出かくるやら、小家なりしも急に大きな處へ移り要心桶を杉形に積み、格子こまよせを自前に張り込み無僕なりしも供をつれ一僕は二人供にし、二人もつれしはかごに乗つて押すも有り、夫に付いては古借錢も濟さねば合點せず、

疊まつて有し妻子の仕着せも逢ふた時肩脱いで袴へ其外疊の表替へ、襖の張替へ、何の角のと物入多く、財悖つて出て仕舞ひ残りし物は格式の上つたと買物得意の殖えたばかり、甚難澁翁の曰く、夫は御醫者のみに限らず奢りには馴れよき物なり、ある所に水つきの田地多く有りて水年には植付の出来ぬ村有り、夫故定免になし下され十年の内三年満作なれば賑ひ二年なれば困窮す古き人に聞合すに、四五十年も其通り、然るに四五十年前迄満作七年つゞきし事あり、一村の賑ひいふべからず、扱其翌年一秋不作なりしに、一村甚困窮せしと聞及ぶ、是をいかんといふに其所の人の曰く、我等が在所には傘木履も家々にはなかりし村なり、七年満作續きし内に、日傘草履下駄のない家もなく、かさね草履蛇の目傘位は朝腹の茶の子にもさしかけ、髪飾から事の廻り、だんくんと奢りが付き、困窮するも不思議ならず、百姓は質朴なるものなれ共、奢りには馴れ安き物なりとかたりぬ、商家も年々延る身體は危し、ある年は餘り或年は足らざる家こそ却つて長久なるものなりといひし人有り、是も心得に成るべき事なり、藪醫の曰く、餘所の渡世は聞きに參らぬ、我問ふ所の答へ如何、翁の曰く、渡世のために療治せざれば療治をして渡世にせられよ、難きを先にして得る事を後にせば、さのみ奢りにはなれまじきぞ。

翁童子を呼んで曰く暫く人の絶間なるべし、汝も休め、我は見残した夢見んと、又凡にもたれて眼る、蝸牛出て問うて曰く、我左右の角に國ありて常に争ふといふ事古書に見えたり如何なる義ぞと問ふ人あれ共、作者其心を知らざればいまだ答へず如何こたへ侍らん、翁の曰く是は人身の微少なる事を悟さん爲なり、汝も井の中れん中なれば、大海は知るまじ、世界のかぎりなき川々、晝夜をすて流れ入れども増事を知らず、早つゞけ共減る事を見ず、これにて大海の大海たるを知るべし、扱又上見れば程なし、天地四方の大なるは又々計るべからず其計るべからざる中に此大海の有るは、纒なる潦水のごとし、又下見れば程なし、其潦水の中に國々のあるは、大倉の稗米にも譬へ、粟散邊土ともいふ、又蒼海の一粟ともいへり、この粟一粒の中に唐もあり天然もあり日本もあり、まづ日本にていふ時は六十餘州其六十餘州の中の壹ヶ國に又一郡有り、一郡の内の一莊有り、一莊の中に又一村有り、其一村の内にも貴賤あり、貧富あり大もあり小もありて、それ々の家を構へ某は何の何某、拙者は何屋何兵衛など、我慢の角を振立て、互に利を争ふ事、汝が角に國有て争ふに譬へたり、我より又汝を見れば、僅小指にも足らざる家を我もの顔に角の目だつはかなかりける有さまかな、蝸牛角を引こめて曰く、我昔是を聞く、道を知るものは小をも寡とせず、大をも多しとせず、得るも喜びとせず、失ふも

憂とせず、生も福とせず、死も禍とせず、翁手をあけ、もう能いはマア〜休め  
 翁蛭蝸を見問うて曰く、蟬は飲んで食はず、蠶は食つて飲まず汝食ふ歟飲む歟、未其沙汰を聞  
 かず、何を食うて楽しみとするや、蛭蝸の曰く、我聞く常に厚味に飽く人は厚味に馴れて厚味  
 を厚味としらず、たま〜厚味なきに逢へば樂します、常に飽食に馴るゝ人は、飽食を飽食と  
 覺えずして飽食をたのしむ、たま〜厚味ある時は又甚だ樂しむ、是によつて見る時は、貧し  
 かに樂しみ多き歟、翁の曰く然らず、道を知らざる人は貧しければ苦しみ、富んでも又苦し  
 む、道を知るときは富んでも樂しみ、貧んでもまた樂しむ、翁道を知つてたのしむとはあらね  
 共、常にへらす口をいうて笑ふ先金銀を持たざれば盜賊の恐れなくかねの無心言ひ掛られても  
 有るものを無い顔して貸さずんば底氣味あしき所あらん、無きを無しというて仕舞へば、底ぎ  
 み悪るき事もなし、寺社の奉加帳なども、銀持衆の五兩三兩付れたをば不足に思ひ、あの身代  
 にて五兩三兩は何事ぢや、せめてレコ位は付けそうなものなりと譏る人もあれど、我等が百錢  
 二百錢付けたをば納得して誰れも譏らず、千貫目持ちが俄に五百貫目も損をせば、石で手を詰  
 めたやうに氣を痛めん、持たぬものゝ目から見ては、残つて五百貫目のかね持たれば、結構な  
 る身體、氣をうつ事はあるまじき事なれ共、持たが病か心を苦しめ胸をいたむる、翁は終に持

つて見ざれば、此苦しみかつてなし家屋敷をもたざれば、貧替へ根繼ぎの世話もいらす、借屋  
 住みの忝さは町内に小事が出来ても知らぬがち、捨子の時も氣を揉まず、倒れ者が有つても苦  
 にならず、諸道具も數無ければ、宿替へをするに世話すなし小借屋の事なれば、夏は暑にこまれ  
 ども是も下見れば程なし、又一段我等より小さい所に住む人來てかゝる家に住んでこそと羨み  
 し事あれば、暑さも又堪忍安し、扱方々々に店や掛屋敷を持ちし人の耗す口を聞けば、赤紙の  
 付けた狀が來れば、もし出火にてはあるまいかと、見ぬ先に胸が踊り船の怪我ではあるまいか  
 と、聞かぬ内に心遣ひ、大きな所は大きな風、何の斯のと心勞多し、誰がためにかく心勞する  
 ぞといふに、我等夫婦に子一人纒三人の口過ぎせんとて大勢の人を抱へ人形遣ひの人形に遣は  
 るゝごとく、年中此人に遣はる此の如くして願以此功德何が徳ぞ死ぬるとき、次の間でひそ〜  
 言ふ者の多いのと、葬禮が賑かなるばかり、人數多有りたりとて、病む時取り減いでは煩はれ  
 ぬ、山海の珍味をならべても、食ふ所は口に適ふに過ぎずとは、昔の人の耕す口我また錢なし  
 の悲しさは、初茄子とて、價の高い未味の無い所を喰ふ事ならぬと、淺瓜のはしりとて、苦  
 い内を賞翫せざるは不自由なれども、最少まつて値の安いほんの味の付いた時、食ふまでと  
 思へば是とても苦にならず、苦にならぬ事を苦にして、苦をするは、苦をする事の好が苦をす

る、是も又耗ず口  
 上壇に新なる筵をもうけ、數多の婦に侍れ、桑の葉を食ふ者あり、翁歎じて曰く、虎は文有るを以て射られ、蠶は糸あるを以て養はる、漆は漆あるを以て其身を削られ、樗は不材なるを以て其身完し、材あるものは其材にたふれ、天年を終ざる事のはかなさよ、蠶頭を上げて曰く、材不材は天なり、欲する事無くして然り、欲して然るものならば、誰か君とならざらん、誰か奴婢となるべきや、誰か富貴を欲せざらん、誰か貧賤を欲すべき且我母の胎内を出しより人の提携抱負に生ひたつ、是欲して然るものならんや、生長の今に至りて、晝夜の撫育、親子を養ふがごとし、且暮の祿を賜はるは、又君のごとく臣のごとし、翁の曰く、女は己れを悦ぶ者の爲に容り、士は己れを知る者の爲に死するといふ、汝此語に昵る歟、何んぞ功名遂けて身退かざる、蠶佛然として曰く、我微臣なりといへども何んぞ豫讓が語を事とせん、彼れ范中行氏に事し時は范中行氏我に遇ふに衆人を以てす、故に我之に報するに衆人を以てすと言ひて仇を報いす其後智伯に事し時は智伯我にあふに國士を以て、故に我之に報するに國士を以てすと云ひて、身に漆さし、眉を去り、癩と成る、乞食に化け非人敵討ちの所作事、彼が忠義は現銀商ひ算用詰めの仕打也、芝居好きは譽めもやすらん、實の武士には無い事、又范蠡

が身退きしも、勾踐の人となり、苦をともしして、樂しみをともにせざる氣質を知つて身退く、是等も一季半季の渡り奉公、譜代の臣には無き事なり、我等小身なりといへども、代々祿を賜りて、父母妻子安穩に暮す事、誠に命の親なりと申すも中々恐れあり、父母の頭のぎり、から妻子の足の爪先まで、君の恩澤染み込みぬ、數代高祿を頂戴すれば馬に乗るも道具振らずもあまた供廻り召連れるも皆君の賜也衣食住は本より武具馬具を初とし、紙一枚筆かたし、鶏犬を畜ふまで、君の賜にあらざるはなし、代々産るゝも葬りも、皆君の恩澤なれば、諫めて用ひ給はぬとて、退く身の有るべきや、三度諫めて身退くなど、は、毛唐人はいざ知らず、神國の武士には無い事、  
 翁蜜蜂の問しけに飛かふを見て問うて曰く百花を探り得て蜜となし、辛苦して誰が爲に甜からしむる、蜜蜂ふり返つて曰く、天地萬物を生じて、誰が爲にいふ事あらんや、我も一箇の小天地、なんぞ誰が爲と答ふべき、人又小天地にあらざるや、然るに翁は耕す事を知らず、妻は織る事を知らず、一物も産み出さずして、人の辛苦を費すのみ也奈良茶一飯にても、何ヶ國の人の辛苦ぞ、まづ米は何ヶ國の人の辛苦にて出来し物ぞ、薪は何ヶ國の山より出ていかなる人の辛苦なるぞ、鹽は何ヶ國の浦人の辛苦にや有りけん、言ひもて行けば、朝夕に何ヶ國の人の辛苦を

費す事ぞや、翁赤面して曰く、恥づらくは我れ一物も産み出す事無うして飽くまで食ひ、暖に衣て逸居す、是禽獸に近しといはん歟、蜂の曰く翁さのみ憂ふる事なけれ、四民の外に遊べ共賣卜を以て業とせずや、耒耜を取らずといへども、銘々の家業に怠らずんば、即ち是耕すなり、算筆にて耕すもあり、鋤鉏にて耕すも有り、皆耕すなり、もし其耕すに怠るときは五穀稔らず困窮す、常體の人困窮すれば、思はず父母への孝もかけ、一家中朋友へも心の外なる無禮も出来る、他人にも氣の毒ながら不届になる事もあるものぢや、其又甚しき者は孟子の所謂、放、辟、邪、侈、爲さすといふことなきに至る、兎に角家業に怠らざれ、もし又家業に怠らず私無くての困窮ならば、是ぞ天なり、なんぞ心を苦しめん、翁も我も小天地、人をもつて天にかたざれ、人を以て天に負けざれ、翁の曰く汝が言甚よし去りながら、言ふ事は易く、行ふ事は難きものなり、人の艱難を憂ふるを見ては、は何ぞ憂へとするに足んやと云ひ、人の困窮を恤ふるを見ては、是なんぞ恤へとするに足んやと言ひて一拳有りける人も自身もし其艱難にあふ歟、困窮するに至つては、眉をひそめ、色を喪いうらたゆるものなり、汝も我もしやべりなり、憤ますんばあるべからず、論語に曰ふ如く、言を訥くして行ひの敏からん事を欲すべし、又曰ふ、古の者の言を出さざるは射の速ばざるを恥ぢてなり。

虚空に聲あつて翁くと呼ぶ、誰なるらんと見返れば、漆樹片邊に立ちて曰く、翁先に漆樹に漆あるを以て、天年を終へざるに譬ふるはなんぞや、漆樹に漆あるは、人に人の心有るがごとし、漆樹にして漆なく、人にして人の心なくんば、如何性は善なりと、自慢めざる、人の中にも體は人のかたちにて、心は禽獸なるあり、すがた物こしは女らしくて、心に角の生ひたるあり、漆樹の漆に恥ぢざるや、翁の曰く、人に人の心なきは、人に人の心無きにはあらず、人其心を失へばなり、譬へば其家にもあらずして、己れが得手くの技藝に凝り家業を忘るゝものゝごとし、好きこそ物の上手になり、終には親の名跡を捨て其藝に陥り藝に身を助けられ、世を渡る人もあり、是皆其本を失へばなり、漆の曰く、其本を失ひ、技藝に沈み、色に溺るゝ、なんど、是非情には無き事なり、有情もあまり情が過ぐれば、技藝に沈み色に溺るゝ、中にも恐ろしき物の天井は色なり、武士も町人も、老いたるも、若きも、僧も尼も、現世未來を取り失ふものは只色なり、京大阪江戸などの息子や手代のしくじりを聞くに、百人が九十九人半までは皆色也、恐れても恐るべく、憤みても憤むべきは色ならずや、非情にも又連理の枝あり、相生の松あり、竹に女竹男竹あれども、終に心中して死んだといふ咄しも聞かず、欠落したる沙汰もなし、それゆゑ小松が成長しても、竹の子が脊丈が延びても親々の氣苦勞なし、人八百屋お七の



芝居を見ては、泪を流し、親にも見替へ身にも替へ、男を思ふ貞節、家に火を付けてなりとも逢ひたい見たいと慕ふ心根、去りてはしほらしい、近年の色事し、有りがたい忝ないと思ふして譽めそやす、我等非情の目から見ては、取り所もないいたづらもの、娘故に難儀する、親の苦勞は何とも思はず、義理あるかたへは嫁入らずして、内證にて男を持ち、其男に逢ひたいとて、家に火を付けるとは言語に絶した大悪人世間の娘の風上にも置れぬ女、是には無理な道理を付け、悪人とはいはずして、貸したかねの催促したり、嫁にほしいと望む者をば、戀の邪魔する悪人ぢやの、敵役ぢやのと、機敷からも場からも憎む、をかしき人の心ならずや、去る先生客に誘はれ、初めて芝居を見られし時、ある人誰の役者を歟上手と御覽せられしと問ひしに、小川吉太郎といふ悪人方こそ上手なりしと答へられしも、誠に先生は先生なりとありがたく思ひき、たとへ野の末山の奥どんな世帯も苦にせまいと、一口淨瑠璃語るを聞ては涎を流し、是等誠の戀知りかな、親には勸當請るとも、思ふ男と二人連、欠落して女夫になり、仕馴れぬ辛苦も厭はぬとは、可愛らしき心ぢやと、跡先見ずに譽るはどちや、第一不義なり不幸なり、是でも色か戀知り歟と、齒に布着せず問ひ詰められ、言ひ黒めん言葉なく、翁漆に負けて閉口。

雙龍出で、曰く、翁翁をか教へんとす、我教へをまたずして土を潜り、學ばずして水上を行き習はざれ共少しは飛ぶ、人また教へを待たずして乳を吸ひ、學ばずして泣く、習はざれども笑ふ、惻隱是非の心あるも、教へを待つて求めたるものなる歟、先生何をか教へんとす、翁の曰くなら程汝が言のごとく教へを待たずして泣き、學ばざれ共笑ふ事人皆然り然りと雖、其然る本を知らざれば泣くまじき事に泣き、笑ふまじき事に笑ふ、惻隱是非の心も習はずして人皆是あり、然るといへども其本を失はざる人又すくなし、磨けども磷がす溼るれども縮まずとは、聖賢の事に於て、小人はたゞ朱に交れば赤くなる、或僧我に語つて曰く予本獵人にて有りしが、幼少にて初めて小鳥を打ちし時其鳥の苦しむを見て、流石惻隱の心あれば、心に快からず、爲まじき事をせし事よと悔しかりしが、後々は馴れて何共なかりしなり、其後また初めて獸を打ちし時其苦しむを見、其聲を聞いて惻隱の心なからんや、甚だ心に快よからず殺生は是ぎりともで思ひしが、是も馴れては何共思はず、後には却つて狐や狸は心に足らず、熊猪を打たざれば、殺生せしとは思はざりき、兎かく凡夫は物に馴れ安く危きものなり、是を思へば盜賊などに成るものも、惻隱羞惡の心あれば、初は心に恥ぢもしたり、心に快よき事もあらじ、馴れば何とも無きやうになり、後々は小盗みなどは心に足らず、終には切りどり強盗にもなると見

えたり、我等も道をきかずして前のすがたで居るならば、いかばかりの悪人になりもやすらんと、身慄ひして懺悔咄し、誠に此僧のいひしごとく、凡夫はものに馴れ安く危うきものなり、糸の色くく染るを見て悲しむし人もあり、人の性は善なれ共教へなくして可ならんや、下和が璞も琢磨の後夜光となる生知安行の聖人さへ、十有五にして學に志し、七十にして心の欲するところに従へども矩を踏えずと曰はずや。汝僅の才智に誇り、自是として教へを待たずして足りといふ、是を儒家には自暴というて除けものにし、佛家には是を我見というて付き合はぬ、且汝我が力人に越え、身に藝術あるに誇りおのれに如く者なしと思へり、是所謂井の内連中、汝が自慢の藝術に柳生關口の印可を添へ汝が自負の勇力に亦百人の力を増すとも翁が目には井の端の小兒危しく、蟻腹立て曰く、我に百人の力を如へば、藝術はたのますとも、誰にか天窓をあけさすべき、何ものにか勝さるべけん、翁笑うて曰く、刀山を抜き術風に乗る事を得たりとも、おのれにかつ事能はずしては危しく、其おのれに克つ事は、學問の力にあらすして何ぞ、汝がごとき己にかつ力無くして、強きを頼み、藝にほこる輩は死なすといへども僥倖にして免れたる中間なり、扱また術千人にもすぐれ、力人に越えたるものは、世界に強いものなしと思はん、是則井の内連中、何ほど藝に達しても、何程力が強うても、齡といふ強

いものに出合ひては、手足の力も弱り腰もかみ歯も抜け目も耳も疎くなる、此とき其術いづれの所にかある、力いづれの所に歟ある、扱また一統こはいものあり、汝土を潜り水上を歩行み、飛行の術有りといふ共、一度雀鷄に出合ひなば其術共に取つてゆかん、此ときに至り、日頃の我は何處にあるぞ、常に此所を忘れざれ。  
永き日はながき油断に暮の鐘、翁夢覺め茫然として曰く、むかし莊周夢に胡蝶となる、栩栩然として胡蝶なり、莊子夢に胡蝶となる歟、胡蝶の夢莊子となるか、莊子も夢、胡蝶も夢、翁もまた夢なる歟、夢の内に夢なる事を知らずして夢に遊ぶ、覺めて初めて夢なる事を知る、斯くいふも又夢なるか、夢の内なれば夢なる事を知らずして夢に遊ぶ歟、覺めて又夢なる事を初めて知らんか、過ぎにし事を夢と云はば、けふも又明日の夢、今も後の夢ならん、夢も夢、覺むるも夢、死も夢、生も夢、横槌も夢、豎臼も夢。  
夢くくと口にはいへど悟めやらで  
夢にゆめ見てあそぶ夢助

費ト先生糠俵後編終

費ト先生糠俵後編

孝行になるの傳授

先生嘸々、御疲れなされましょ、晝までは追々の觀相人、唯今御出けの御邪魔のほどは、恐入候得ども、人のなきを幸に御伺ひ申度候、私儀は御存知の身分にて、とかくにかの繼母殿がむづかしく、舊年もすでに、大破談にも及ぶべきを、先生の御意見にて、いろく心相をあらためく、ならぬかんにん、いたしますれど、もう此たびは仕方なく、事のやぶれに至りまするが、かやうな時にも、心相にて破れぬ相にもなられます歟

翁の曰其元<sup>おきな</sup>に先達<sup>いはい</sup>ても申す如く、ならぬかんにんいたさるれば、すぐに孝子の相となる、孝あれば天<sup>てん</sup>幸<sup>さい</sup>を下<sup>くだ</sup>して、さやうの破れは出来ざれども、其元はなる所までの、かんにんにて、ならぬ處のかんにんするの心相がなきゆゑに、亦々破れる相と成る、ならぬかんにんを、つよくせられよ、客の曰<sup>きやく</sup>扱<sup>あつか</sup>ふははなさけなき、是までの苦勞、しんほう數年にて、ならぬかんにんに、かんにんをかさね、重ねたればこそ、今日迄は、火の手も見せず、此上のかんにんは、ま、母に、いちりせめころされて、死で仕まふより外に仕やうはござりませぬ、翁の曰其せめころさ

れ、死んで仕まふがよいかくごちや、貴様にかぎらず、世の中は誰もかれも、皆せめころされて死んで仕舞ふのぢや、酒色好は、酒色のために、せめころされて、死んでしまひ、貧乏人は、びんばふのために、せめころされて、死んで仕舞ふ、金持は金のために、一生をせめさいなまれて死んで仕舞ふ是等はみななく、道ならぬ事ながらにも死する也、ましていはんや、道の道たる、死をなすこそ、幸ひなれ、僧は法のために死し家來は主の爲に死し、妻は夫のため

に死し、弟は兄のために死す、ましていはんや、義理のある、親のために死するこそ、子たる道の幸ひにして、是にましたる、人の果報も、手がらもない、孝子に我身なしといへば、貴様も何んのかのといふ、我身があるで、やかましい、我身を我と殺して仕舞ふ心相に、ならしやつたら、浮む瀬の、長命富貴の相ともならう、或人の物がたりにむかしくの事なりけん、南都猿澤のほとりに、市之進となん、いふものありて、夫婦内福に暮せしが、女子一人出生して名をばおともと、つけ侍りしが、此おともが五つ<sup>いつ</sup>の時に、母はむなしく過去りうせぬ、父市之進、後妻をむかへて、此後つれに一人の男子と、又一人の女子と、出生して侍りしが、父もおともが、九つの春世をむなしくも辭し行しかば、あはれおともは、世に便なき身とはなりて、人も是をふびんとこそは、思ひ侍るに、母はま、しき心にて、此おともをば、大に惡み、

無理のあるじやう、なさげなく、我が生し二人の子供には、あつく着せて、おともには、冬も綿のいらざる衣をあたへ、夏はあつき布をまとはせ、或時は食事をあたへず、日々の、てうちやく、聞くも中々世におそろしき、ふるまひなるに、少しも、おともは、是をうらみず、母は母の道ならねども、お友は子たるの道をつくし、身を捨て能くつかへ、二人のおとどひに實心あつく、其愛する事、又はかりなし、二人のおとどひも、母のあしきに、ならはずして、姉がよきをみならひてや、姉を大切、いとをしがる事神妙なり、母は是にて益々おともをにくみねたみ、或夏のゆふかたに、熱湯のごとき、湯を湧し、湯氣にさへも、目もくらむべきを、盥に入れて、おともにもむかひ、汝早くも、此湯のさめぬうちに、行水せよと、鬼の罪人を地獄の釜へせめいる、如くなるに、おともは、おどろき、魂消えて、かなしく侍れど、心をすゑて、なか母のことばにそむかず、我命も、これかぎりなりと覺悟して、かしこまり奉ると、すでに湯にむかひし折ふしに弟が、今年十一歳なりけるが、大なる桶に、水を入れて、持來り、此盥へ速に打あけて、姉様より、我先にいらんと、飛込しに、母もおどろき、いだしあけしが、身の皮やぶれ、肉たれて、二ヶ月ばかり床に休みぬ、母は猶く、おともをにくみ、或時に、あつき酒を、茶碗に入れて、何角一ぶくの薬を加へ、おともは是を早く呑むべし、此薬をのめば、

美面よく成る薬と、突きつくるに、おともは詮方なく、あやしきものとは知りながら、押いただきて、呑まんとするを、妹此とき九歳なりしか、姉が茶碗を、ひとつとりて、みめよくなるの薬なれば、我呑まんと、口をつけしを母はおどろき、其茶碗をつき飛して、我實の子に呑せざりき、かゝる類ひ、度々なれど、さらに、おともは、母を恨みず、然るに其夏、繼母大病にてすでにあやうく、侍りしを、おともは、是を大になけき、猿澤のほとりなる、觀世音へ、日々詣で、母が病氣のゆるる事のみ、願ひ侍りて、よし又母が命數にて、命のつくる、期もあらば、我命をとり給ひて、母をたすけ給はれ候らへと、相なけきていのりしが、孝心通じ、終に母も、全快に至りしを、悦ぶ事かぎりなし、今年八月十五夜の、月見の宵に、おとも母に申けるは、私より觀世音へ、月見團子を、持參りて備へ奉り、當夏より、大願申奉り侍りて、母の全快し給ひし、御禮に詣うて申度候と、うかひしかば、母のいはく、それは扱々神妙にて、此母が、病氣全快の、御禮に參り給ふこそ、嬉しく侍れ、はやく團子を、備へて給ふべし、汝歸り道にて、フト過て、猿澤の池杯へ、落はまりて、死し杯し給ふなよ、自然また池にはまりて、死しなば、母はよろこびて、誠の孝行成るべしと、にくさけなる言の葉も、おともは露も耳にとゞめず、備へものを取揃へて、觀世音へ參り、いと懇に御禮をのべ、また母の長

命を、深く祈念し侍りて、歸り道に、猿澤の池を、眺むれば、いとゞさびしく、あはれなる、秋の夜の、空すみ渡る月影のかゞみのごとく、池水に、かゞやき、えいじうつるを見て、おもはずしらず、涙をばはら／＼と、ながし侍りて、おもへば思へば、かなしくも、我が四つの子か、五つの子のころならん、我が生みの母様の、月見の夜半に、我をいだいて、此所に來り給ひて、あれを拜めよ、是をみよ、上にも、のゝさま、下にも、のゝさま、空にも月よ、池にも月よと、我を愛したはむれて、のたまひし言の葉の、幼き耳に残りしが、今池水にうつる月に過にし母の、おもかけも、そこ／＼に見ゆる心地の、致し侍りて、かなしく候、また父上は、毎年まいとし、月見の夜は、提重やうの、物をと、のへ、我をいざなひ、來り給ひて、女の子ははれ渡る此もちづきを、拜し侍れば、能き子をば、持侍ると、深く愛して、年毎に、かけずも、つれて來り給ふも、はや七とせの秋を経て、父をとへ共、跡もなく、母はもとより幼くて、わかれ侍りて、覺えねども、今宵の月こそ、形身にて、なき父母の御姿も、今まのあたりに、みゆるがごとき、心地し侍ると、涙の雨に袖をしほりて

「はれわたる月にあはれのますかゞみ

父母のすがたのうつる池水、

と詠じて、思へば／＼、世に我ほど、かなしき身こそなき、生みの母には、幼くてわかれ侍り、父には九歳の時に別れ、まゝしき今の母様は、寝ても覺ても我をにくみ給ひて、度々の御毒害、あやうきの數々を、二人の兄弟に助けられ、すでに今宵も、なさけなき、池に落ちて死んだならば、母はよろこび、孝行なりと、世に心なき御言葉、是を思へば所詮が生てかひなき、身の行する、毒害などに、あたり死して、まゝしき母の、悪名を出し、世に知らさんよりは、父母の形身の月やどる、此池水に、身をなけて、うせはてなば、お友こそ、狂氣亂心なりと、世の人の、思ひ給ひて、母のあしき名出ざれば、是ぞ寸志の孝ともならん、さは申せども、かなしきは、生の母は、我を抱いて、此處に來り給うて、はやく成人せん事をねがひ、父は毎年此所へいざなひ來り給うて、我を愛し、よき子のあらん事を、樂しみ給ひし、此處にて、今身をなけて、うせはべるは、如何なる事の因縁ぞや、南無大慈大悲の觀世音、私空しく死し行て、實の父母に極樂にて、あはしめたまへ、又跡に居給ふまゝしき母の、悪名たゞす、随分長命し給ふやう、二人のおとどひの、無事息災にて成人し、末廣／＼と、榮ゆるやうに、守らせ給へ、只あひたきは、弟といもうとぞよ、影になり日向になりて、我を愛し、助けしぞや、死する命は、露ちり程も、惜しからねども、弟や妹に、別るゝ事のかなしきぞや、かやうの事と、知る

ならば、得と二人の、顔も見て、是までの、深切の、一禮も申しのべ、暇をも、心ながらも  
いたすべきに、おもはぬ今のわかれぞや、いやしい此身は、うせるとも、其方二人に、心はつ  
きそひ、随分無事に榮え給ふを、守るぞや、いとつかしき、二人ぞやと、池水に立むかひ  
「我ながら我と名残りの水かきみ  
見るにつけてもおもふはらから

「池水に捨る此身はすまずとも  
まゝしき母の名をばにごすな

とよみ終りて、すぐに池へ、飛こまんとせし、貳つの袖を、姉さまちてととむるに、頭を  
めぐらし是をみれば、弟と妹なるに、驚きながらも、うれしくも、二人の童を抱きしめ、どう  
して、二人ながら、爰へは来て給はりしぞや、あひたかりしぞ、よろこばしやといだし  
めく、かなしき中にも、いたはれば、二人の童も、なげきかなしみ、あねさま、おまへは、  
死ぬるのかや、いづく迄も、此二人は姉さまに随ひて行くほどに、池へはまりたまふならば、  
二人もしたがひ身をすつべし、妹も私も、宵寝して侍りしに、夢の中に觀音様が來り給うて、  
二人ながら、早く行て姉を助よや、姉は今猿澤の池へしづむぞ、早く行けよ、助けよとのたま

ふに、おどろきさめて、私のはだしにて、かけ出したれば、兄様姉さまを、助けに行かうと、  
なきやる故に、早うおじやと、手をひきて、はしりしが、あの子が道で、三度ころびしを、お  
こして來りし故にかくおそくなりて、候らひしぞや、姉さまの、死たまふならば、此二人が先  
へしづむべしと、飛びこまんとする童をひきとめ、抱きしめ、扱もく其様に、此まあ姉を、  
大切に思つて給はる志し、何んと御禮を申可や、乍去二人とも、かしこいく、二人ぢやから  
ようもく、姉がいふ事、聞分けて給はれかし、此姉は、どうでも、かうでも生て居がたき、  
譯なるぞや、其方二人は、長命して御母さまへ、孝行いたし過ぎ給ひし、御父君へ、御追善を  
あつきたいし、又此姉が、實の母様の御とむらひをも、いたしたまはり、此なき姉が、跡をも  
とふてたまへかし、随分く、けがせぬやう、けいご事を精出し、姉にかはりて、父母の、  
御名をもあけて、たまはれよや、是のみ頼み申せしぞやと、今は絶入打なけ、は、二人の童も  
聲をあけ、消えいるばかりになけしが、立上りていづくまでも、姉様に随ひて行くべしと、又  
池に飛入らん勢ひなるに、お友は是を引とめ、兄弟三人あらそひし、うしろの方に、聲を  
放つて、倒る、人の音あり、三人ともに、是をみれば、繼母なるにおどろけば、母は涙にか  
きくれながら、聲をあけ、いかなる過去の、因縁にや、子は三人とも、菩薩なるに、母は鬼に

も、蛇にもまされる、悪心の、今更何といふべきぞや、過し夫への申譯も、姉が實の母や、其方にも、何とて面の、あはさるべき、先ほどよりの三人が様子を、見聞けば、見きくほど、我悪業の、我と我が、我が身の呵責身にせまり、生てかひなき、大悪人、お友は是を、ゆるし給ふ共、天道何とてゆるし給ふべき、二人の子共を、頼ぞや、二人の童は、只姉に、よろづをまかせ、能くつかへよ、草葉の蔭より、身にそひて、姉が榮えを守るべしと、言と共に、池水に飛落なんと、する母を、三人共に一代の力を入れて引きとめ、おともはかなしく、聲ふるはし、母さま是非にとまり給へ、わらはも命を、捨て侍らず、四人共に、むつまじく、幾ながらへて、楽しくも世をのどかにぞ、暮すべしと、誠あらはれ、申せしかば、母はよろこび、かぎりなく、汝死なすば、母もながらへ、今迄の非をあらためて、深くも汝に詫侍ると、涙とともに、眞實のおもてに見えて、いつはりなきに、二人の童も大に悦び、母と姉とを、伏拜み、世にうれしくも、有がたしと、悦ぶかほの神妙に、母も姉もたえかねて、大地に倒れて、伏まろび、よろこび涙に、袖をひたしぬ、母はやうく起上り三人の子は格別よ、鬼蛇に、まさりし母の身の今善心となりし事は皆大慈大悲の御恵と大に悦んで觀世音を拜み侍り、奉りし一首に、

「人ならぬ身の猿澤もくもりなき

子のゑに闇のはれし月影

と詠じ、誓ひを立て、非をあらため、善に化して、此後は親子四人のむつまじきこと、世の人これをうらやまぬはなし、おともが孝心、二人の童が、佛の誠、母が悪をすみやかにあらため、大善人と、なりしの徳、なにとて、空しく、天道是をなしたまはず、次第に美名四方にきこえ侍りしが、或やんごとなき雲井尊とき御方のおともが孝を、したひ給ひて、終に是をまねき仰へたまひて、子孫尊とき、身とぞ榮えぬ、二人の童も、世にまれなりし、富貴の身となり、母も目出度、世をやすらかに、上なき果報の、身とはなりぬとの物語り、何と尊ふとき、咄しにあらすや、貴様も何んのかのと、いはふより、唯今あらため、此席ですぐに、お友に、ならはしやれ、舜何ん人ぞ、我なんん人ぞ、心相さへ、よくなれば、今の繼母の鬼蛇の相も、忽大慈悲の相となる、心相さへ、あらたむれば、凶も吉、悪も善、貧相も福相、苦も樂となり、短命相も、壽相となる、禍福門なし、自らまねく所と、いふてあるも、唯心相のひとつなり、舜をしたへば、舜の心相、堯をしたへば、堯の相貌、桀紂をよろこべば、桀紂の相となること、忽なれば、今よりあらため、ムチャ、クチャしたる、我心をなけ捨て、おともが心を心として、ならぬかんにん、致されなば忽孝の相と轉じ、天此徳をたすけ給うて、いかなる母も、道に至り

給ふべし、母の母たらざるは、母の母たらざるにあらず、汝が子の、子たるの心相に、あらざる故也と、よしあしともに、己が心相に、立歸りて、人をためすに、我身を正し、行不得ものある時は、かへつて我身に、もとめなば、孝行の相發すべし、孝行の相と、さへなれば、たとひ、どんでも、ぶきようでも、貧ほうでも、文盲でも、百行の源にて、萬善の長者と榮え、子孫目出度、大福相とならるべしと、翁が、さとしに、此をとこ大に感涙數行にして、誠に私にんの場をとくと承知いたしましたして、孝子おともの、心相に、切度つゝしみ、至りましたと、

「よしあしの人にはあらで我にあり

形直うて影もまがらす

此歌かねて、耳に聞きましたが、只今御影で、はじめて心に、しつかりと聞きました、翁眼鏡をとりて曰、ア、尊ぶときかな、心相、奇なるかな、故人の訓言、汝忽家内和合し、子孫永昌、福壽發達に、至るべきの、相貌をきさせりと、悦で休ぬ。

孝行になるの傳授 終

福相になるの傳授

客來りて曰先生さきに安樂傳授をあらはし、又其後に金もうかるの傳授を述べ、次に開運出世の傳授を書きて人をさとす、我も此三部の書を得て朝夕讀といへども、御存知の微運なれば、銀ももうけず、銀なきゆゑに、安樂には猶ならぬ、爰をおもへば世に又となき貧相也、かゝる微運貧相も、上運福相となるの傳授秘密もあらば、なにとぞ隱徳とおほしめして傳授したまへ。

翁の曰人の貧富の境界は、我人相のよしあしにより、其人相の善悪は我心相のよし悪に順ふもの也、故に貧相を福相に至すの傳授、いとやすき事なり、能々心をさめて聞れよ、むかしむかし或所に貧相を福相と轉じ、富貴となすの傳授といふ看板を出し、此傳授料百金也と書して行かふ人に見せしかば、誰も彼も是をみて此傳授を願ひ望めども、百金に迷惑し行人もあらざりにしに、其所にて家がりの町人福尾溜助といふ男、彼家に行きて百兩の金子を出し、貧相を

福相になるの傳授



轉じ、福相になるの傳授し給へと希ふ。  
 主の翁異人にて、白髪に鶴しやうを着くし、溜助に問て曰、扱其元には、いまだ若年なるに、よくきどくにも來り給ふた、速に傳授を致してもよけれど、それではかへりてお爲にならぬあひだ、今日より身心ともに、おだやかに清淨にして、七日が間相慎み來り給へといふ。  
 溜助尤とよろこび、家に歸りて、よく七日相慎、八日目の朝早天に、翁が家にいたりて案内を乞へば、美面いやしからぬ女兩人出て、客の間へ通し、唯いま主は他行にて、程なく歸り給ふなり、暫く御まち給はるべしとて、四方山の咄も、いとしとやかに、おくゆか敷も思ひ侍るに、又次の襖をあけて、それは端近にさふらへば、此間へ入らせ給へよよ、禮儀正しく手をつきて、あいさついたす婦人を見れば、其美麗なる事魂をけし、おもはゆけに會釋すれば、彼婦人せひに是へ入らせ給へと、手をとりにて席にすゝめ、女三人取かこひて申には、我方の主人は老人とまをし、殊に至て惡堅くろしき氣質にて、私共が朝夕心をのばし侍るの時なし、けふ幸に主人の留守に君來り給ふぞ、世にひるいなきよろこびなりとて、美酒美肴を出して、ねんごろにうちとけ、さまざまの物語りに、溜助は本心をうしなひ、醜酩に及し頃、主の翁歸り來れりといふ音に、婦人は酒肴たかくし持てにけ失たり、溜助は肝をけし酔もさめて、手あ

らひ口すゝぎて、心をあらため、翁にあひて福相に至るの傳授を希ふ。  
 翁の曰、今汝が相貌を見るに、酒色に染て心相を汚す、酒色の情を發する時は、貧相に、つちかふて短命の相を出し、福相を滅するの大禁物毒藥也、今あらためて七日物忌致し來れ、今日傳授なりがたしと、大に怒りて奥に入れれば、溜助夢のさめたる如く、おどろき恐れて宿に歸り、七日の物忌可憐にて、八日目の未明に、翁が庵にいたれば、下男立出て今朝は主少々持病の痛痛にて只今針治致し侍る、是へ來りて暫く御待給はるべしと、奥の書院へ通し、茶多葉粉出して男は去りぬ、溜助一人待ひまに、フト床の一軸をみれば、瑞圖が山水の見事なるに、こなたの額を見れば、子昂が馬の自畫讚なり、襖は永徳古法眼、床のかたはらに、ほこりまぶれに捨ありし大ふくの巻物を、ひろけてみれば、宋より明までの、名家の書畫の數々仰山なり、かたへの屏風は、かたしは行成、かたしは佐理卿の眞筆也、欄に立て垢つきし、張ませの小屏風は、顔魯公米元章、歐陽詢や懷素が草書の見事なるに、魂を飛し障子をあけて庭を見れば、其物好み格別にて、五百兩や千金にても、世には得がたき石燈籠や、手水鉢、飛石、樹木に吐息をつぎ、此様子にては茶器や道具の所持の數々、名物奇品廣大ならん、いかなれば、此翁かかる福相果報ぞや、我も今日福相の傳を得て、此主の如き境界を得んと、大にうらやみ侍りし

折ふし下男來りて、只今あるじ御目にかゝり可申候。是へ來り給へと、男が案内につれ、一間一間行けば行ほど、けつかうにて、善つくし美つくし侍るを大にうらやみ、終に主が居間に至りて平伏し、今日こそ御傳授のたまへかしと申述べば。

翁大にしかつて曰、汝心身ともに清淨に致し來れと申侍るに、大に心をけがし欲心を生じ、人をうらやむ人相あり、物をもてあそぶ時は、其心ざしをうしなふといひて、皆貧相にこえをして、福相にいたるの大毒藥なれば、今日傳授致度ても、其毒藥にて出來がたし、早く歸りて今あらためて七日の間、深く心身ともに清淨にいたし、重ては福相をけす毒藥を所持いたし來るまじといかりけるに、溜助も仕方なく、又々七日の物忌を懇に致て後翁が方へ至り案内を希へば、老女出て申には、今朝より來給ふを翁大に待給ひし也、はやくく此縁側を眞直に通り給へといふ。

溜助悦びて、今日こそ傳授速なりと、縁側をあゆみしが、唐犬一疋かけ來りて溜助が裙を引きはふを、ふりはなして行に、又かけ來りて裙に喰ひつかんとするを、溜助いかり腹を立て、扇を以てさんぐに打、追走らしめて主が居間に至り、傳授を希へば、翁莞爾笑うて曰、汝いまだ怒氣短慮の相ありて、心誠に靜ならず、すべて短慮は貧相をまし助けて、福相に至るを消す大毒藥なり、此毒藥を所持する間は、我いかやうに福相を轉じ度おもへども、此毒藥が貧相をまし、福相を滅して、我ちからも及ばぬなれば、早々歸りて今日、とくと心身ともにをさめ、清淨になし來れよと座を立て奥に入れば、溜助今はちからなく、又々七日物忌つよく堅固にして翁が家に行きて、溜助參上と申せば侍、出て是をとりつぎ、翁唯今少々用事にかゝれり、暫まちて居候へとて、半時までど、おとつれなく、一時までど何の沙汰なく、二時三時小一日まで共、更に主對面致されば、今は根氣もつき果て、既に其ま、歸らんとおもふ折ふし翁出て對面し、今日は是非福相に轉じいたし可申と存之外、福相には大禁物の下根辛抱薄きといふ、毒藥を所持めされたり、諺にも運氣は根氣にあり、辛抱が寶、かんにんが銀なりと、いふにあらずや、然るに汝辛抱薄く根氣なきは、是貧相を助けて大に福相を消すの毒藥にて、此毒藥のある間は、どうしても福相には轉じがたし、早く歸りて今又七日相慎みて、後に來れよと襖立きり入れれば、溜助はた、惘然とあきれはて、宿に歸りて、又々七日深く心を清淨にいたし、身を慎み、八日目の鶏明に、衣服あらため、禮服着し、翁が家にすゝみ行に、翁はやく門前に出て是をむかへ、早くも能く來り給ふ、汝が人相今日こそ、實に無欲無心にて、放心短慮の邪念なく、よく物事を辛抱するのかにん満て、福相となるの血色明潤なれば、我亦こ

れを明らかに告んと、自ら案内して、奥のおくたる大奥の閑室幽亭にとまなひ、溜助を座さしむ。溜助慎んで一禮をのべ、頭をあけて此處の様子を見るに、異香紛々とみちて玉をつらね、錦緋をのべ、其けつかう人間界とおもはれず、實に爰こそ仙境なりと、猶慎で一心に、福相に至るの傳授を願ふの外、餘念他念のあらざりしかば、翁よろこびて曰、ア、得たるかな汝、今日は毫厘も餘念放心なく、實に信心堅固なり、是すぐに福相に至るのはじめ也、今こそ汝に貧相をめつし、大福相に至り、家長久に子孫繁榮の傳授すべし、餘人は格別一子たりとも、相傳すべからずといふ、かたき神文誓紙をとりて、また一問奥へいざなひ、慎んで傳授せよ、さらば福相にいたらしめんと、いふ言に、溜助毫厘の餘念なく、一心不亂に有がたく、頓首平伏す、翁は閉目金聲にて、得よや得よや、今こそ傳授残りなしと、錦の几帳を引あぐるに、溜助信心膽にめいじ、首をあけて是を見れば世に温順にて、柔和笑顔ならびなく、胸ひろく腹満て左りの手には團扇を持って、右の手には童を撫で、はりふくれたる大袋に、もたれて座せし、布袋和尚の福壽満々たるの、世に大なる木像なるに、溜助おもはず、横手をうち、アラ有がたやありがたや、唱ふれば佛も我もなかりけり、南無阿彌だ佛くと、古徳は詠じ、廓然大公物來りて順應すと、儒には申し、金剛經には、應無所住而生其心と聞といへど、發明せしは即今

唯今、餘念なければ、布袋は我也我は我なし、布袋の外には我といふもの毫厘も本来無一物にて、生死貴賤の境もなく、天地同體同性にて、苦なし貧なし、災なき皆性善の大福相を、酒色邪見に欲よこしま、短慮奢に辛抱なきの、放心迷の貧乏神にさそはれて、貧相に至るといへども、ほんのう、すなはち、ほだいに、貧相其ま、すぐに福相、我は布袋に、布袋は我蝶は莊子に、莊子は蝶、柳はみどり花はくれなる、あらおもしろの腹のけしきや、言句にはかれぬ以心傳心不立文字端的無二の御示教にて生死苦樂の境を離れ、貧富解脫の眞の福相、とくと御傳授致しました。

翁眼をむき出して曰、おろかなるかな汝が見識、其一法を知りて萬法をしらず、道は近きにあり、然るに汝遠きを求めて其あしもの肝要を失ふ、知る事は三尺の童も知るといへども、行ふ事は八十の老翁も行ひがたし、今汝が見たる所の見識も、是皆すぐに貧相なり、是等を以て、何んぞ福相の傳授とせん、目くらみにする術もなく、つんほに聞はず法もなしと、翁はいかりて座を立て入らんとするを。

溜助おどろき引とめて曰、成ほど翁のたまふ如く、我實に高遠に心を馳せて、其近きを知らず、其源を見らるといへども、流に益あるの道理を得ず、是を得ざるは誠に誠に未貧相をま

ぬかれざる也、先生深く慈悲をたれて、福相にいたらしめたまへ。  
 翁顔色をやはらけて曰、汝汝がまだ至らざるを知るは、其至るの道なり、汝未だ貧相をまぬかれざるをしるは、是其貧相をまぬがるゝに至るの道なり、よつて我今こそ、底意なく大福相にいたるの道を説ん、其福相に成るの傳授は、則此布袋の像なり、先福相に至るの第一は、此布袋のごとく常に、柔和にんにくにて、明ても暮ても、笑顔よきなり、親にむかふてにこにこすれば、孝子なり、主にむかふて柔和なれば家内和合繁榮し、兄弟朋友に、にうわなれば悦でむつまじ、商ひするにも、たがやすにも、細工するにも唯柔和にて、にこくすれば、笑ふ門にぞ福來り榮ふる也、或人の句に

「月は秋人は笑顔と定めけり  
 此發句の如く、唯定め度は人の常の笑顔なり、笑顔ぞすぐに福分にて、あしき事は笑顔にては出来ぬ物也、喧嘩口論短氣短慮は笑顔で出来ず、りんき、やきもち損と貧乏は笑顔で出来ず、邪見強欲病氣と、死するは笑顔で出来ず、其外悪事の數多けれど、笑顔で出来るものはなければ、ひとへに笑顔をよくしたまへ、去ながら色と酒と遊興と、へつらひは、笑顔でおつる邪路もあれば、此一方のみ用心すべし、扱又此布袋のごとく萬事に胸をひろく致し、大に腹を大く

して、誠を満たしめ、何事にも如才なく、有のまゝに胸も腹も打出して、かくさゞれば、常に安樂にて此上もなき福相也、右の手に持たまふ團扇こそ、人欲の塵を拂ひ、常に心をすゞしからしむ、左りの手に撫る童子は無我無心にて、色にも欲にもかゝはらず、萬の事に執着せず、朝夕怠り、ぶせうせず、走りまはりて、速なるを願うて也、又何をするにも此布袋の如くドツサリと、腰や尻をすゆるが福相也、子は孝行に尻をすゑ、妻は貞なるみさを正敷に尻をすゑ、弟は悌たる道に尻をすゑ、親は子を慈愛するの誠らしきに尻をすゑ、君は臣をあはれみ、深きに尻をすゑ、夫は身持正敷して、妻を愛するに尻をすゑ、朋友は信に尻をすゑ、士農工商其職分に脇目なく、ドツサリと尻をすゑて、己がみちくをはけむ時は、貧相忽にうせはて、世にも目出度大福相にいたるなり、然りといへども、此道中く安く至れる事にあらず、顔色をよくし、にふわにするも、胸を廣くするも、腹を大いにするも、腹に誠をみたまも、人欲を拂ひすつるも、無我無心にいたるも己が位に素してドツサリと、尻をすゆるも世にむづかしく成しがたき大事なり、其成しがたきをなすの爰に祕密口傳あり、其祕事口傳といふは、則此布袋の常にはなしたまはざる袋なり、其袋が成しがたきをなし、出来がたきを出かすの福相の眞の傳授なりといふの傳授が口傳にて、元來袋といふ譯は汝知れりやいかといふ、溜助答

て、我袋といふ義理をしらず、翁曰汝知るまじ、是を知るものは、端的に忽福相に至り榮ゆる也、溜助百拜して是を傳授したまへ、翁の曰、世に袋といふ譚を知るもの至てまれなり、是を實知して身に行へば、貧相忽福相となる事速かなり、今こそ汝に傳授いたさん、袋といふ事は福は勞なり、福は勞にありといふ事にて、福を得んとおもはゞ、辛抱苦勞をつみかさねる事なり、古への天子は民のために勞し給へば、四海安き福分あり、諸侯國の爲に勞し勤めたまへば國萬代の福分あり、士庶人己々が家業職分に勞して怠らざれば家身榮うの福分あり、子親のために勞し孝あれば萬善の福相となり、家來君の爲に勞し忠あれば家祿相増の福相となる、妻夫の爲に勞し貞あれば美名世にあらはるの福相となる、兄は弟のために勞しあはれみ、弟は兄のために勞し大切にすれば、兄弟和合の福相となる、朋友互に勞して誠を以て善にす、む時は、ともに繁榮の道に至るの福相となる、主人勞して家來を善に導く時は、家正敷の福相となる、親勞して子を教ふれば子孫長久の福相となる、夫勞して身持正しく妻をさとせば、家全きの福相となる、朝の寝むたきも勞して早く起ればすぐに福相、夜の寝むたきも勞しておそいねて職分すればすぐに福相、酒の呑たきも、色のむさほり度も、切度勞して相愼めばすぐに福相、欲のなし度も腹のたつも物にたいくつ、せのつきるも屹度勞し、辛抱かにんすればすぐに

其ま、大福相、身勝手のしたきもいひたき事もりんき、やきもちの、やきたきも、人のそしり度も、勞しくるしんで、屹度相愼めば、安樂世界の福相となり、けいこ事學びごとの、しとむなきも勞して修行怠らざれば、上達上手の福相となり、病人のたえがたきも勞して養生よくすれば、無事長命の福相となり、貧窮の身の難儀なるも勞して、晝夜家業をはげめば福相となり、身體の持にくきも、勞して質素けんやくを守れば、すぐに福相となる、大舜が父母につかへ、くるしんで勞がつもりて、四海を保ち給ふの大福となり、太公望が八十年の勞がつもりて、周をひらくの大福となり、韓信が股をくゞりしかんにの勞がつもりて、大元帥の大福となり、漢の高祖や越王勾踐が辛抱つよき勞がつもりて、大業をなす大福となる、其外和漢に苦勞をかさね、辛抱かにんの勞をつみて、大福相と成りし人々かぞへがたし、よつて福をなさんとねがふものは偏に勞しつとむる事也、故に福は勞にありといふ事にての袋勞なり、布袋和尚は常に福は勞にありといふ事をさとりて、かにんの口しかとしめて、此福勞を満しめ給ふがゆゑに、則福神也、笑顔をするも安きにあらす、勞してつとめ爰に至り給ふなり、胸をひろくし腹に誠を満たしめたまふも安きにあらす、勞しつとめて爰に至り給ふ、人欲をはらひ捨無我無心の童を愛し給ふも安きにあらす、勞しつとめて爰にいたり給ふなり、萬の事に放心なく其位に

素して、何事にもドツサリと尻腰をする給ふも安き事にあらず、勞し學びて爰に至り給うて、萬古不易の大安樂富貴無量壽廣大にて、腹に金玉滿堂の大福和尚は、勞なりの勞を滿たして福にいたり、福は勤めて勞にありと、寢てもさめても、立ても居ても、此福勞にもたれかゝりて、少しも餘念なきがゆるなる、此大切の傳授をば、汝が信心堅固なるにめで、傳ふるぞかし、福は勞なり勞し勤めて福相に至るべしといふかとおもへば翁も見えず、布袋も見えず我はもとより、猶見得ざるにおもはずしらす横手をうち、我勞をつみかさねたるかひありて、今こそ眞の大福相にいたりしぞや、誠に福は勞にありと、悦ぶ夢も明け方の目さめ、あふいで空をみれば、鳶飛で天に至り、うつむき伏してみれば、魚は淵にをどりしとの、むかしばなし、誠に世に福相の祕傳祕術、人相の極祕なれば是をよくく翫味致さば、間に髪を入れず、直人心福相成佛心外無別相と示しけるに、客感涙膽に徹し、今こそ貧相を解脱して眞の福相となれりと歡喜して去りぬ。

福相になるの傳授 終

長命になるの傳授 卷の上

或人來りて曰、翁、前にはかねもうかるの傳授をあらはし、それより安樂になる傳授、又孝行になるの傳授、夫婦和合するの傳授、福相になるの傳授、開運出世するの傳授をし給ふをみて、一々御尤に存候が、わたくしは殊の外なる長命すきにて候へば、何とぞく長命になる傳授がさづかり申たく、わざく參り候なり。

翁のいはく、長命になる傳授も、品々ござるが、まづ其もとの望まるゝ、長命はいかやうなるが所望でござる。

或人のいはく、私が望まする長命は、第一たくさんに、かねを持って不自由なし、命はなるだけ一年にても長いが好みでござります。

翁の曰、そのかねを持って、長命がいたしたくば、早速によき傳授がござる、その傳授といふはむかしの人の道歌に。

長命になるの傳授

「朝起や身を働きて灰をするねぶたがらずに家業精出せ  
 此歌誠に、貴様の注文の、長命の傳授なり、其わけは、とかくに身をはたらくが、長命なり、  
 又第一の傳授は、此ねぶたがらずに、朝おきをするが、壽命ものびるかねもふゆるの傳授なり、  
 ゆるに貝原先生も、人にしめして申されしは、世の人の盛になるも、衰ふるも、その家の主た  
 るもの、朝はやくおきると朝おそくおきるとの、二つにてよく知るなり、朝はやくおきる家  
 は、かならずさかえ、朝おそく起る家は、かならず衰微するもの也とかや、此示しまことに、  
 手近く深切なり、愚老が年來みあたり傳ふるに、すべて朝はやくおき出ではたらくに、貧も  
 短命もなきものなり、又朝おそくおきる人は、其朝の忘るのみにあらず、其一代を忘るゆるに  
 皆貧なり、短命也、故人の語にも富人は不忘ともあれば、まづかねを持長命のいたし度と申傳  
 授は、こゝにあるべし、ある人の前句に

次第く、おとろへにけり、とありしに

重盛の外は平家の朝寝すき

と附たりしをかしき、まことに此道理にて、朝ねは壽も福もうしなふなり、むかしあるをと  
 こ、大黒天へ參籠し、富貴長命を丹精しいのりければ、或夜の夢に、大黒天あらはれ出てのた

まふには、汝長命福分がえたくば、我をねがひたのまんより、朝起大菩薩をいのるべし、か  
 ならず福壽を即時に得るべし、と告給ふと見しが、夢はさめたり、此男すみやかに手あらひ口  
 をすゞぎ、大黒天をふしをがみ、扱夢中に神のわれをたのまんよりは、朝起大菩薩を祈るべし、  
 たちまちに壽福ありとのたまふ、朝起大菩薩はいづくに居給ふ佛にや、何方に向ひたづぬべし  
 と、さまざま工夫をこらし、丹精いたせしうちに、おもはず悟り得て、横手をうち、扱もく  
 ありがたや、今こそ朝起大菩薩の本體を拜み得たり、實に此佛を信心し、此ほとけと合一なれ  
 ば、忽ちすぐに長命も出来、福分も出来るなりと、手の舞足のふみ所をわすれ、大によろこび  
 侍りしかば、家内の銘々來りていかなることぞとたづねければ、此をとこ申には汝らも眞實に長  
 命福分を得んとおもは、ひとへに朝起大ほさつを祈るべし、たちまちに壽福を得るなり、そ  
 のわけをいは

世の人毎日く一時づ、朝はやくおきれば、世の人とは現在に、一日に一時づの長命を得  
 るにあらずや、扱また一時づ、朝寝をすれば、毎日く一時づの死人におなじ、二時づ  
 の朝寝をすれば、二時づの天壽ならずや、又毎日一時づ、はやく起て、家業をなせば、一時  
 づのたちまち福分を得るにあらずや、又二時づ、朝起してはたらけば、忽に二時づの福分

長命になるの傳授

を得るなり、扱此日々一時づの朝起を、一ケ年三百六十日にてみれば、四百廿日にいたるなり、わづか一ケ年の間にて、六十日は世の人と多く長命するなり、又此六十日はたらくは、別に食事も、別に衣服も、別に家居も、何もかもいらす、無造用にて六十日かせぐは、たちまちに大福を得るにあらずや、此一時づの一ケ年に出る六十日が、十ケ年にては六百日の長命福徳、又人間一代六十年とみれば、世の人とは三千六百日餘長命なり、これ長命のみならず、此三千六百日には、一錢の雜費もなく、物入もなくしてはたらけば、働く程の福分わき出るなり、又此うらにて、毎日一、一時づ、朝寢して、一時づ、死んで居る人は、一ケ年に六十日の貧天なり、十ケ年にては、六百日の貧天なり、人間一代六十年にては、三千六百日の貧天にいたり、死人に似たり、此一時づ、朝寢をする人と、又一時づ、朝起してはたらく者と、損徳とも打あはせみれば、人間一代六十年にては、七千二百日の損徳となり、長命となり、短命となり、福壽貧天のちがひに到るなれば、人はたゞ一念わづかの心得が、善惡壽夭貧福のちがひに到るなれば、古歌に

よしの川その源をたづねればむぐらの栗秋の下つゆ

このわづかの一時がつもりくつて一日となり、其一日がつもりくつてもつて久年をなすなれば

禹王は寸陰ををしみ給ひ、晉の陶侃は分陰ををしみしとかや

のちといふその怠りにひかされて今日を空しく暮らすはかなさ  
 此怠らず、油断せず、かせぐ打出の小槌からこそ、萬の福分は出ると、大黒天はしめし給ひ、又福は勞にありと、毎日朝起して身を勞するの、かんにんの袋にこそ、壽命を目出たく納るなり、と大黒天の教なり、此大黒天の、御本地佛こそ、朝起大菩薩なりとこそ、靈夢をさとりえたり、と示されけるに、家内みなく、此ことわりを會得して、我一と朝起大菩薩を信じ、朝起して家職をはげみかせぎしかば、皆々長命富貴に到りしとかや、此咄おもしろきことにて、現在一日に一時づ、はやく目をひらけば、一日にて一時の長命ならずや、又一日に一時づ、かせぎはたらけば、一時づ、の福分に非らずや、貴様の長命福分をねがふの傳授には、此朝おき大ほさつの御利やぐが、何よりもつて專一なるべし、くれぐれ是を信仰あるべし。

次は誰ぞこれへく

ハイ私は、幼年にて母にわかれ、今は老父のみでござりますが、一昨年より老父大病で、既に當春は、あやうく大切でござりましたを、醫師はもとより、神佛を祈りましたる御めぐみにや必死をふしぎにまぬかれましたが、亦此ころは兎かく父の顔色あしく、疲れがみえまして、日



夜の心勞申言葉もござりませぬ、何とぞ、翁は、長命になる傳授ありと聞きましたるより、急いでわざ／＼参りました、ひとへに老父が長命いたし給ふの、御傳授なされくださりませ、翁、大に賞美ていはく、扱も／＼ありがたや、孝子には、我身なしと、貴様もみれば、最はや／＼五十歳の餘の人なれば、まづは我が息災無事の間に、年より給ひし父が送りたし、是が順道ぢや、ひよつと我身のうへに、いかなる不幸などがあつてはなど、心にもおもひ、口にも言ふが、農工商の人の常なるに、只いづくまでも、老父を長命させ度より外に、前後の頓着なきは、よくも／＼孝心なるぞ、出かされたり、貴様が、其孝心がすぐに、老父の壽をながくいたし、子孫長久の傳授ぞや。

心だに誠の道にかなひなば祈らすとも神や守らん  
 人は只此誠さへあれば、萬の心願成就せずといふことなし、ましていはんや、我親の長命するの願ひなれば、なぞ神佛の利益非らずといふことなし、是につけても、翁が此座の人々へ、申聞せたき咄しの候は、則今の事に候か、其大略を一寸つまんで、語ります、此京の東、清水門前五町目、紙屑をかふて世を渡ります、大和屋善兵衛と申人の養子、榮次郎は、文化甲子の年九月二日、十三歳にて、養父善兵衛、世を過行しかば、母と共に、父が病中の遺言にまかせ、

家財残らず賣はらひ、宿料をはじめ、買かりの不足等をすましければ、跡にのこりて、四百銅の錢を持て、紙屑をかひあるきて、苦勞の中にも、我妹の二歳なるをいつくしみ、母の病氣なる節は、ねんごろに乳などもらひ歩き、妹をいつくしむ、實情ふかく、又母が右二歳の妹を、大阪なる縁者へあづけ、母は外へかせぎに出んと申すを、榮次郎大になけきとめ、母病身なるうへに、他に出ての、勞をいとひ、又母の心をやしなふて申けるは、いかなる貧苦にても、親子一所に住てこそ、過にし父も悦び給はん、又父が追善佛事いたすとも、親子兄弟はなれずなすこそ、父もうれしく思ひ給ふべしと達て母をとめ、我身は晝夜をわかつたず、家業に出精いだし、母への孝心、妹への慈愛、まことに幼稚者のなす所にあらず、元來榮次郎は、二歳の時に、浪華順慶町の邊なる、某より、養子に來りし者なれば、其かたよりも榮次郎をとりよせ、母へは相應のことをなし遣さんと申來りける、又榮次郎が住ける近所の富家よりも、榮次郎を養子にもらひたしと、度々申參る方ありといへども、榮次郎少しも心をうごかさず、天地の間に、親といふは、死し父と、今の母の外に親はなし、親はもたず、いかなる富貴の家に至りて、身の安からんよりは、此身はいかやうに辛苦しても、母と妹と一所にくらして父の追善に一文餅一つあけても、佛事いたすが樂みなりと申けるとかや、かゝる義氣にてかせ

ぐ故に、其日其日の煙りはほそぐ立候へども、母とかく病身と申、又妹も折々の不快に、物入等もありて、何事も心にまかせぬといへども、心正直けつぱくにて、紙屑を買、持歸りて自然目方など買し時より、多きことなどある節は、速に其買先へ行て、扱私是不調法いたしました、昨日こなた様にて、御もらひ申ました、紙屑が夜前かへりて掛て見ましたれば、何程目かたがおもうござりますゆゑ、今此くらひ鳥目を持て参り候、と断を申て、それだけの料を持参りし事も、折々ありしとぞ、またかゝる困窮の内にも聊づゝの錢をつみ置、我は夜分寢すにござり草鞋をつくり、又ある日は、一食にてもくらしたり、又ある日は五文の餅二つ三つにて過したりなどいたして、亡父の一周忌迄に石碑を建、それより後は母子共、凡日々墓所へ詣うてぬ日はなしとかや、此孝心なんぞ空しからんや、徳孤ならず、必隣ありと、五條の邊り大黒町となんいへる所に住ける、入江氏の父子とも、是を大にあはれみ、又五條不明門に住する近江屋某の親子も、此孝子を感じ、いとねんごろに、力となり、助け給ふよりして、翁かかたへもつれ來り給ひし也、隠たるより見はるゝはなし、誠なるより明らかなるはなしと、此榮次郎が義氣孝心天に通じ、十九歳の時、去る文化七年十月廿七日に恐れ多くも御役所へ榮次郎をめされて、白銀十枚

ありがたくも被爲下置候は、世にありがたくもくく、堯代舜恩の御慈悲、廣大の御冥加申も中々恐れ入り奉ることござります、此義は申さずとも、目のあたりの儀で各々方御承知の事でござれども、かゝる有難御仁恵は折々思ひ奉るが、民の良樂身の守りでござります、又は榮次郎ごとき孝子も、怠り安きは世の常なれば愚老が、時々此咄をいたしますも、第一に榮次郎が大にく、慎み良薬ともなります事でござります、右の榮次郎が母はいたつて病身でござりましたが、此榮次郎が孝心にて、今は大にく、息災無事に候よし也、爰をおもへば父母長命の傳授は外にはござらぬ、只眞實に大切に誠をつくし、よく父母に孝心をつくすより外には正法奇どくなしにてござります、いやくそれは餘りく知れた事ぢやと、申人もござらなかなれど、その知れた事、其誰れもよくぞんじた事が出来ぬものなり、知れぬものでござります。「父母によく事ふれば天地の神も恵みの深とぞきく」「我親の長命祈るまことこそ我も長命子孫長久」「無二膏や萬能膏のきどくより親孝行は何につけても

長命になるの傳授 卷の上終

長命になるの傳授

長命になるの傳授 下の巻

次はたれぞ。

ハイ私なりと自慢らしくすゝみ出たる女は、美目かたちはをかしけれども、衣服のはなやか匂ひ袋に鼻を突ぬき、紅おしろいにて面をかぶりたるかとうたがはるゝ、異相の女房、問て曰、私も何とぞ、長命が望にて、よけいは、いらねども、わづか千年か万年許りはいたしたうござりますが、其長命も年つもるにつけ、しわがより、腰がかみ、婆々になりては、おもしろからず、千萬年も此うつくしい今の通りの色女にて、此愛らしき私が、今の姿を少しもかへずに、長命いたしまするの御傳授なされ給はれと、ストント座したる其尻富士の山ほどありけるに。

翁おもはず、笑うて曰、其元は、其元が身を、實によき美目かたちとおもひ給ふか。

女房のいはく、何もさほどのきりやうともぞんじませねど、天道が正直にて、世の人々がみな

私を、唐土の楊貴妃に似たと申されますから、此楊貴妃のすがたをかへずに、千萬年も人に戀したはれつゝ、長命がいたしたうござります。

翁腹をかへなからも、歎息して曰、誠に、女童かな、此楊貴妃も、赤子におとれりといふ。

女大に聞とがめて曰、此先生いかなれば、美女に對して無禮なるぞや、肝腎の傳授はなさずに、女童の赤子におとる杯との悪言、いかなることぞや、我に遺恨ありての事か、但しまたよき老年をなしながら、我艶色に心迷ひての、うた言なる歎、女童といふ由來をきかん。

翁ますく笑うて曰、まづ、楊貴妃怒りをしほしゆるし給へよ、我汝にかたる咄しあり、唐土に、夫婦の者ありしが、夫は篤實ものなれど、みめあしく年卅歳なれども四十餘にも老てみゆる不男なり、又女房は、美目相應にて、年廿歳なれども、十七八歳とみゆる花美ものなり、故に此妻常に、夫を尻に敷、己が貌かたちを高慢して、朝夕に夫にむかひ、亭主のやうな仕合ものはない、我が如き若くみゆる美女を、妻にもつとは、扱もく仕合ものなり、又我は、亭主のやうな年老て見ゆる夫を持ち、世界の中の不仕合ものなりと、不足のみ申けるに、此夫も日々迷惑いたしけるが、此男或日深山へ参りしに、一人の鶴髪たる仙人にあふ、此仙人申ける

長命になるの傳授

は、汝は正直篤行のものなるに、今に日々妻がために氣を屈しはべるぞきのどくなる、故に、我汝に此三粒の丸薬をあたふべし、此薬一粒を吞ば、忽年十歳わかくなるのみならず、容貌も古今無雙の艶男、大色男となるなれば、汝速に一粒用ふべしといふ、此男世にうれしく大に謝し、速に一粒をふくすれば、年廿歳の大美男となりて宿に歸り來たれば、女房ひと目見て、仰天し、夫はいかなればか、る美男となり、かく年まで若やぎ給ふといふ、夫のいはく扱々汝は仕合なるもの也、かゝる若く見ゆるよき男を夫に持とは果報也、又我はかゝる年行し、妻をもつとは不仕合なりと笑ふ、妻がいはいかなれば、かゝる男粧とはなり給ひしぞ、夫のいはく我此三粒の仙薬をもらひ得たり此一粒を吞ば忽ち十歳づゝ若くなりて、其上にかゝるよき男粧となりし也、一粒吞て此姿となりぬ、今跡に二粒あり、是は我又今十歳立し時に、是を吞ば又廿年の艶男となるなり、又其後十歳年立ば、又一粒を用ふれば、いつもかはらぬ、又廿歳の美男粧となるべし、其時には、汝は四十歳の老婆となりて、いつも廿歳の夫をもつとは、扱もく世に果報もの仕合もの也と申ければ、妻大に赤面して申けるは、何卒その一粒の薬を我にもあたへ、吞し給へといふ、夫あきれて曰、汝は今年廿歳也、然るに此一粒を用ひば、十歳の女房となるべし、十歳となりてはいかで我世帯のなるべきや、無用くと申けれども、妻我

慢ものにて、此夫が持し二粒の丸薬をうばひとり吞まんとする、夫は驚き、是を二粒とも吞てたまるべきやと、もぎ取らんと争ふうちに、妻二粒とも口に入しに、夫なほくおどろき吐出させんとするひやうしに、此薬二粒とも妻が咽に通りけるや、いな、忽ち夫の膝のうへに乗て、ホギヤア／＼と申たりとかや、此をかしき唐土の咄より出て、女の前後わからぬ、愚痴もうまい、我慢しつと、りんき、やきもち、短氣、やぶさか、奢、高ぶり、色におほれ、欲にふけり、利をむさほり、邪見不仁の理非わからぬを、童にたとへて女童と申なり、此咄しの女許りがホギヤア／＼に非らず、世の人皆々此通にて、格氣、短氣にて、跡さきも見えぬ愚痴のホギヤア／＼もあり、又色や欲におほれて我を知らぬ愚痴無智のホギヤア／＼もあり、酒や美食や、奢客に、己が身を知らぬ、無智のホギヤア／＼もあり、學問はありながらも、只高慢を發し、身を修ることを知らぬ、無智不覺のホギヤア／＼の類ひ、世にあけてかぞへがたし、是れぞこの楊貴妃どの、貴さまも我身で我身の知れぬホギヤア／＼でござると申ても、それがわからぬホギヤア／＼ぢや、よいかげんに馬鹿つくされよ、顔かたちが道外がたのみならず、眞實貴様は腹のうちまでがちやり頭ぢや

女膝を立なほして曰、此親仁何とて我をあなどり、めつたむしやうに、ホギヤア／＼づくし、

聞にくし、既に聖人も、大人は、赤子の心をうしなはずととき給ひしを、汝知らずや、その赤子は、ホギヤア／＼にてはあらずや。  
 翁ます／＼笑うて曰、大人は、赤子の心をうしなはずとの給ふは人の性は皆善にして、誰しも生れ出し時は、只天よりうけし性のまゝなり、此性のまゝにてあれば、本體の明常にあきらかにして、よく五常を保て、外物に放心せず、故に、大人は常に此天よりうけし性善の赤子の心をうしなひ給はざるなり、しかるに、世の人生れ出るやいな、見るに迷ひ、聞に迷ひ、其ふるゝものにまよひ、馴て其本性の徳をうしなひ、放心し身をうしなふなり、故に一休和尚も。  
 生れ子の次第／＼に智恵づきて佛に遠く成ぞかなしきとよみ給ひしとかや、人みな生れ出し時は、佛性のみにて、一毫の私心のあらざれども、只次第に智恵づくより、鏡にさびの出来るごとく、いつか迷ひの生ずるなり、然れども元はあきらかなる鏡にて、其くもりは跡よりつきし者なれば、本來は無一物、何の處塵埃をひかん、只時として昧ことあれど、元來我本體の性に迷ひ、生れし時は其生れ子が我本性、壯人なるに至りては壯人なるが我本性、老ては老たるが性のまゝなるに、ア、汝は年よる事千萬年に及んでも、今の楊貴妃のすがたにて、長命いたしたしと願ふは、小人故、赤子の心をうしなうて、其本性にもとり、天命にさからふことを知ら

ぬホギヤア／＼なり、君子其位に素して行ふとありて、人はその位に素し、其分に素し、其身の程／＼を知るを以て人とするなり、汝も、其位に素し、己が己と己が身に立かへり、己が身を己によく／＼實知せられよ。

女忽懷中鏡とり出し、ためつながめつ我顔を見ていはく、われと我身に我と立かへり、見れば見る程、我ながらも古今美目よき楊貴妃なりといふ。

翁眉をひそめ、歎じて曰、汝が申所おろかにあらず、世上の人皆々以て、我をあしきとおもはぬが、人間世なり、むかし或雲上がたの坊官に、猿坊官と名得たる人あり、其容貌誠によく猿に似たりしかば、世の人かくは名づけしとなり、此坊官ある日、去御宮の御殿へまかりて、女關へひかへありける時に、ある門跡がたの坊官跡より來りて是も女關にひかえしが、此坊官の顔も誠に猿にそのまゝよく似てありしかば、先に座せし猿坊官の申けるは、扱其元の御すがたよくも我に似申候、以後は御むつまじく交り給へと申されければ、跡より來たりし坊官あつく禮をかへして、扱も／＼君にむかへば、我姿を鏡にうつす如しと笑うて、兩人一度に手を拍、猿が我が、我が君か君が猿か、君が我がと、いとむつまじく語りあひしかば、詰合せし家中の人々はをみてをかしさにたえがたきまゝに、あるじの御君に申上しかば、此御宮きかせ

給ひ、此兩人の坊官に御賜はりものおほく有しかば、兩坊官時の面目世にありがたく謝し奉りて歸りぬ、此御宮の家老、此兩人にも賜はりし、君が御心を尋しかば、御宮の給ふにはすべて世の人、みな我身の事を、我身にては知らず、知れぬよりして、皆我をよきものとのみおもふなるに、此坊官兩人とも、よくもく、我と我身の猿に似たりしを、實知せるこそ、世に神妙なり、故に物遣し侍るとの給ひしをきよて、家中の銘々恐れ人、銘々我身不相應の奢りをやめ、我分に不相應なる大言驕慢をやめ、我心に不相應のかしこけなる顔をやめ皆々その身のほどくを知り、其位に素して、外をねがはざるの安心を得しとかや、此道理にて只々見えがたきは我身の上なり、今汝が其身にかへりみれば、ヤツバリ楊貴妃と申も尤にて、人間世界誰にても、皆我を楊貴妃とおもふ心の迷ひより、我身のあしきを知らず、其あしきを知らぬ故に、我と我に誰も迷うて、我をうしなふものぞ、世の中みなく汝と同じ、かく申翁も、我を我と身びいきするのまよひをのがれず、人間萬事皆々我を楊貴妃とおもふ心のさらぬ也と天を仰いで一人歎じぬ

女の曰、翁無益の言葉をやめて、我今の艶なる此すがたを、いくつになりてもかへすして長命するの傳授をなせよ。

翁の曰、汝今朝來りて今午時に過る也、汝が今朝の身と、今の身とは一つ歟二つ歟別歟同じ歟

女の曰、別といはゞ、千差萬別、一といはゞ古今一體。

翁のいはく、汝汝が眼を見しや否や。

女の曰、眼、眼を見ず、指、指をささず

翁もくして靜座す。

女横手を打ていはく、我天地とひとしき長命を傳授し、古今變滅なき艶なる状態を崩さずと、己に克て禮を作し去る。

長命になるの傳授 終

松翁道話 第一編、卷の上

天明元年丑の夏比、或國の太守様へ、御出入の町人が、鯉を献上したれば、其鯉を大きな器物に入れ、御座の間の縁先へ御取寄なされて、御覽の上鯉をたいて見よと仰られたれば、近習衆が鯉の背を扇でちよつとたくくと、忽ちばち／＼とはねる拍子に側あたりへ水が散々にこぼれた、殿様莞爾と御笑ひなされて、皆能合點が往たかと御尋なされても、各々はつといふたばかりで何の事やら合點が行かぬ、夫で殿様仰らるゝは先づ、斯見た所では此器物は一國の姿よ、中の鯉は一國の主にして、水は一國の民百姓じや、よつて一國の主が我まゝに身うごきすると他國へ水がこぼるゝ、憤し／＼ねばならぬ、國の主ふつゝしみなる時は、他國へまでも恥をこぼさねばならぬと仰せられた、是甚だ有難い御示しぢや、一軒の内でも旦那殿が不行跡なと世間へ恥をふるまふ、恥ばかりぢやない金銀財寶までこぼさにやならぬ大事の事ぢや、學問といふは外の事ではない、爰の事ぢや、朝から晩まで天地の移り行有様、皆教にあらざるもの

はない、きのふの過を知りて今日あらため行ふを、即道に進む人といふ、吉凶善惡共に教にあらざるものはないのでござります。

和州久米寺の因縁は通力自在の仙人が、布さらす女の脛の白いを見て通を失ひ落たといふ事、此様な恥さらしな事までを因縁として久米寺といふを御建立なされた、是何の爲ぞ末世代のもへの御教化ぢや、どの様な智識方でも戦々競々の憤しみを忘るゝと通力を失ふ、況や今日の銘々共日々新にの吟味がないと通力は失ひ通しぢや、御内儀様の顔の白いが氣に入ると親子様方が龜末になる、是等よつ程通を失ふたのぢや、夫から家がつぶれる、末世末代の恥さらしイヤ／＼こちらはめつたに通を失うては居やせぬと思つてござらうけれど、油断はならぬ、久米の仙人ぢやとて、どこぞに脛の白い女があらば通力を失ひたいものぢやかと、うろ／＼さがして來たでも有まいけれど、ついフラ／＼と出來心、あぶないものぢや、兎角物には取られやすい心ぢや、ぢやによつてどなたも本心を御知りなされてござらうじませ、本心がイヤなら此やうにうごきはたらくは何の所業ぞ、御工夫なされてござらうじませ。

一休和尚因縁物語にむかし川が牛へ陥たゆゑ、今又牛が川へはまると仰られたれば、或人難じて、川が牛へ陥とはどうしたものでござりますと問たれば、一休和尚、こなたは知るまいが、

前かた其川の水を牛が呑ましたわいの、夫で川が牛へ陥たといふに違ひはござらぬと仰られた  
 面白い事ぢや、是が是因縁果報の通れぬ事を能合點せよと御示しなされたものぢや  
 むかし虚空が人を呑だゆる、其報いで又人が虚空を呑といふ様なもので、其虚空を呑だ人が又  
 虚空を吹出すと其吹出された虚空が、又人を吹出し、せんぐり同じ様な事してゐる、即今此様  
 に、ものいふたり見たりしてゐるが、いつの間にやら虚空へ這入て、消て仕舞ふかと思へば、  
 又虚空から出て、見たり、聞たり、してゐる、どちらが本真ぢや知れるものぢやない、夫で色  
 即是空の、空即是色といふてある、此やうにもいふてゐるが色、いふて仕舞ふた跡は虚空  
 で空、空かと思へば又ものいふ、能した細工ぢや所詮人になり詰にもならず、虚空に成詰に  
 もならぬ、さうして見れば何とつまらぬものは此體じや、虚空が本真か、此體が本真かどち  
 らが本真のものぢや、ちつと吟味してごらうじませ、先死だ先きの虚空の詮議より、今夜寢た  
 時の體はどこにあるぞ、どこへやら失うて仕舞ふた、其失ふた體も尋る心もすつべらほんど、  
 丸で虚空に呑れたか、消て仕舞ふたか、權兵衛八兵衛もどこへやら消て仕舞ふた、どうも是ば  
 つかりはせう事がない、夫でも夢見るはようしたものにとふてござるが、夫はまだ本真に呑れ  
 なんだのぢや、虚空に何ぞ差支が有てしばらく其用に遣はれてゐるのぢやけれども、やつぱり

虚空の中へ、這入てゐるに違ひはない、其證據にや其夢を實事と思ひ汗水に成てかなしんだり、  
 悦んだりしてゐる、其用が済んで仕舞ふと丸で虚空ぢや、覺やせぬ、是ばつかりは、どの様に意  
 地張ても叶はぬ、けれども目が明とサアしてやつた、我からだ取返したやうに思つてゐる、其  
 思つてゐるぐるめに、此虚空の御力に頂らにや生てゐる事がならぬ、鼻と口とから往來をなさ  
 りやこそ、此やうに見たり聞たりうごき働く此自由自在は誰がするのぢや、是は誰が手車、お  
 長殿の天車手車賣の親仁の辭世に

くるくるとめぐりくつて今こゝに立置卒都婆コリヤ誰がのぢや、天の車が一周すると世界中が  
 うごく、大きな天車ぢや、夫もしらずに、いやに自由が出来るとてあつかましい、おれが體ぢ  
 や、おれがものぢや、おれが家ぢやと、うそはづかしいもなう能言はれた事ぢや、其やうな寢  
 とほけたものゝ目を、覺してやらんと一休和尚七月精靈祭に  
 山城の瓜やなすびを、其まゝに手向となれや、加茂河の水、何と大きな精靈祭ぢやないか、  
 今年出来た瓜も精靈、加茂河の水も精靈、桃や柿や有りの實も精靈、死だ亡者も精靈、  
 生て居るものも精靈、祭る人も精靈、此精靈達が打寄て、無心無念の御對面、扱々難有  
 やと思ふたばかり、たゞ一體の精靈祭、即是を一心法界の説法ともいふ、法界則一心な



るゆゑ、一心則法界、草木國土悉皆成佛、といふものぢや、何と面白い道理を、こしらへたものぢやないか、此道理の合點の行ぬと人は、毎年毎年西方十萬億土から、はるく御出なさる様に思つて、御馳走申はよいけれど、此暑い時分に節季かけて、御客様が御出なされて、採々いそがしいと思へど、せねば氣がすまず、すれば世話して十五日の暮合の御歸りを早う御見立申たら、身のいひわけも濟やうに思つてゐる、すつきり川が牛へはまつてゐるのぢや、虚空と此骸と堀切してゐるゆゑ、ねつかから合點が行ぬ、聾に上るりかたつて聞かすやうなものでとんとわからぬ。

屋根へ上りたれば下りねばならず、井戸の内へ這入たれば上らねばならぬ、今日の道ちや大きに違ふたやうに思へど、皆無心境界の働が見えぬ、夫ゆゑ少々銀でももうけると此體の中へ這入様に思ひ、又損すると、體がかけて取れるやうに思ふ、日々あゆんで一步もあゆまず、日々喰うて一粒も喰はず、是は誰が事ぢや、無いもせぬ生死を、ほぢくり出して、難儀してゐるものへの目覺しぢや、夫でもやつぱり我すきな所にへばり付ふとするゆゑ、算用が間違つて色々様様の事が出来る、此算用違ひの種を吟味してごらうじませ、種がなうてめつたに間違ひは出るものぢやない。

此春在邊へ參ました節の噺に麥に黒穂といふ物が出る、麥と同じ様な顔してゐるけれど、麥の出来揃ふ時分には、まつ黒に成てくさつて仕舞ふ、何の役に立ぬものぢや、同じ麥がどうして此様に黒穂になるぞといへば、去年刈込時にいまだ熱せぬ青麥がまじりて有を一緒に取込だものぢや、其麥を蒔時まじりて有たが黒穂になるぢや、ぢやによつて種は大體吟味せにやならぬものぢや、今日我思ふ事の自由にならぬはきのふ蒔た種が青麥がまじりて有たゆゑ、すつきり黒穂に成てくさつて仕舞ふ、今朝からあなた方もどの様な種を御蒔なさつたぞ、もし青麥なら引ぬいて御仕舞なされ、黒穂に成てからは役に立ぬぞ、ちつと骨折て吟味さへすりやよいものが出来る、よいものにせうと悪いものにせうと種次第ぢや、本心を御會得なさつた御方々の内にも、もう是でよいと思つて青麥を取込で御さる御方々はないか、黒穂に成てからは役に立ぬ、序に是も御清落なさつて下さりませ。

近在百姓衆ちやが能心得た人があるものぢや、子供が三人ある、總領は百姓を仕込み、弟二人は近在へ丁稚奉公に遣る、中息子は大工の所へ奉公にやり、末子は米屋へ奉公にやる、丈夫なものぢや、何ほしくぢつても氣遣ひげがない、體に覺えた事は賣事もならず、急に質に置事もならぬ、夫でせう事なしに身業が出来る、やぶ入に兄弟寄合ても農工商あるゆゑ相談が出来

やすい、是等は種を吟味するのぢや、黒穂にせぬ積りぢや、又奉公するにも子供の時から大家にうか／＼暮したものは、どうも仕様のないものぢや、よい事はつかり見習ふて、ちつと智恵付く時分に手代に成て子供／＼の灰吹た、き、御公家様の落胤の様な心持に成て氣はつかり高ぶり、自身は其様にも思はぬけれど、いつの間にもや高い所へ上りてゐる、天神橋の真中まで行て見ると、大屋の上にあがりてゐると同じ高さぢや、けれど夫程には思はぬ、よつほど足もとに氣を付ぬと、思ひの外高い所へあがりてゐるものぢや、さうなると落し穴へ踏かぶる下地ぢや、其踏かぶり所といふは、先鍋焼貝焼すつほん汁、美しいというろり鬢の女中が、にたく／＼笑ふと咽がかはき、どうぞ仕様はない事か山寺の御小僧は豆腐は喰ひたし錢はなし、百兩の突留に、あゆみをはこぶ垢の身の、金相場米市と、段々立身出世して、終に身なけ首く、り満眞と落し穴へ踏かぶつて仕舞ふた、きのどくなものぢや、よつて大家に御勤めなされる、衆は大體此身に立歸る事を御稽古なさらぬと満足には勤り難い。

又大阪東堀に或富家の息子殿、十三歳の時分から京都の先生の方へ月々十五日づゝ預け、下男のかはりに、めし炊たり、水を汲たり、庭廻りさうぢしたり、一ヶ月を京と大阪と、十五日づゝの勤ぢや、夫でなければ大家の旦那に成て家は持れぬ、事長者知らねば終に我ま、が出て、

家をつぶして仕舞ふ、是等は親御の難有い思召ぢや。

河内の金岡新田に源七様といふ人がある、其下百姓の五兵衛様といふて、夫婦共かせぎの百姓子供が二人ある、其子供を奉公に出すに、親方を聞合てござる、随分喰物の悪い仕着の悪い、むごう使ふてくれる親方へ奉公に出して悦んでござる、盆正月の敷入前には、子供の御主人へ行て、こなたの御勝手に敷入をさしなまつて下さりませ、親方がいつ比にやらうといはしやると、又弟の奉公をしてゐる御主人へ行て、あなた様の御勝手に大事なくば、いつ比に敷入をおさしなまつて、下さりませぬかと尋て、もし其日差支があれば兄の親方へ行、日を延て兄弟一所に敷入する日を待てる、扱兄弟一所に敷入すれば、無事な顔見て悦び馳走にきらずめしを焚、其めしは米貳分に、きらず八分ぐらゐにして、自身も喰へぬものこしらへ、兄弟の子供にすゑ、汁は赤味噌の眞黒な汁に、ちんからりか、鹽物ならば鹽のからいを焼物にして、さあ／＼祝うて下されと自身も一所にすはり、うまさうに喰うて見せる、二人の子供は一向喰へぬものなれど、是非なく少づゝ喰て仕舞ひ、扱是から氏神様へ御禮に參る序に、一家中同行衆の禮も、仕舞ふて来る、其留主中に菜をたんと入れ、きらず雜する焚て置と、女房にいひ付出て行、其御内儀様が近所へ行て泣てござる、けふは子供が敷入いたしました、一年一度の敷入に、かあ

いさうに、きらずめしに、ごときみそ汁、どこでやら喰はれもせぬ、ごときをもらうて来て、夫を焚て喰はすのぢや、先程子供がめし喰間はよう見てるませなんだ、裏へ出てみました、あの様なむどく心な人もめつたにないものぢや、夫に戻てから喰ふほどに糶炊焚て置けというて置れましたと、近所のばか、達が泣くらべぢや、扱御仁様が子供をつれ戻り、さあく腹がへつためしを喰ませうと膳にすわれば菜ばかりの糶するぢや、兄弟ながら其糶炊を喰て仕舞ひ、弟が兄さん今夜泊らんすか、いや、今夜は去ぬ、そんならわしもいぬると、一夜さも泊らずにけて去ぬ、跡で涙をこぼしてござる、其糶つたきらずめしも、糶するも米を入れて焚直し乞食にやつて仕舞やれ、在所の乞食へ能喰ぬものこしらへて、子供に喰はすのぢや、きつい吟味の仕様ぢや、此くらるに種も吟味せにや人蔭て人は出来ぬ、夫で此子供が、喰物の悪い仕着の悪い、人づかひのむごい、親方を大切にして勤てるる皆黒穂にならぬ仕様ぢや。

松翁道話 第一編、巻の中

豆蔭て豆は出来るけれど、人蔭て人は、どうやら心もとない、どうぞ人になれば、ようござります、弘法大師も心もとながつて一人多き人の中にも人ぞなき、人になれ人、人になせ人。一切の物の種は、コリヤ種にするのぢやといふと、跡へ廻して大切にして、よいのを残す様にするぢやないか、夫に人はあちらこちらで、よいものを先へ遣うて仕舞ひ、悪い種を跡へ残す様にする、小言が出来る筈ぢや、下卑たとへなれど、香の物を菜にするといふても、尾端の所から喰ふ様にすると、是非跡へよい所が残る、又妻子眷屬ぢやとて怨敵ぢやない、是程の事は天地へ御禮我身の冥加ぢや、夫を遠慮なしに、喰物でも着物でも、よい物から先へしてやるゆゑ、へたくそや、づるけた所ばかり、跡へ残りて喰ひてがない、冥加しらすと云ふものぢや、むかし天智天皇様は、寒夜に民の辛苦を御歎きなされて、御衣を御ぬぎなされたといふ事ぢや、天子様ぢやとて、寒いも暑いも同じ事ぢやけれども、其御仁徳が世界に行渡りて天下太平、五

穀成就、萬民快樂の姿と變じた、何と有難い事ぢやないか、家の旦那殿が無慈悲になると、家内不繁昌、子孫斷絶の姿をあらはす、恐しいものぢや、其道理も大概辨へながら、遠慮會釋もなく、よいものから、すつかく遣ひへらし、へたくそや、かぶたの何にもならぬ所を、残してやるゆゑ、跡が行かぬ、身上ももてぬ管ぢや、さあく跡の行ぬ様に、してやるぞく、どうよくなものぢや、悪い種は六根不具の、ものばかり出来る難儀な事ぢやぞへ、夫にまだどうよくな事がある、折角うつくしう出来上た佛様を、鬼めがしわくたにして、地獄の釜こけにしをる、是ほど膾炙な事はない、いかに我が好きぢやとて可愛さうに、乳呑子の中から芝居へつれて行術無がりて泣くものを、ゆづつたり、乳をねぢ込だりして、無理無體に見ならはすのぢや、其様にして癖付したものをぢやによつて、四ツ五ツばかりになると、芝居事許しらぬ、兄弟ゐる中でも、大口いふたり、あほ口いふたり、にくて口いふたり、うそいふたり、けんくわしたり、横着ばかり上手で、手習嫌ひの、わやく太郎、町内もてあまし代物ぢや、又女の子はあたまと顔となぶりものにして、着物きかへる事を女子の仕事の様に覺えて居をる、ちよつと寄合ても、芝居のはなしより外は、何にもしらぬ、糸つむいだり、布織る事は男の仕事の様に覺えてゐる、皆芝居で學問したものでゆゑ、我氣に好た事して、楽しみくらすを、人の道と心得

世帯するすべはしらす、我氣に入らぬと、幾度嫁入仕直しても、恥とも思はぬ寢息代呂物難儀なものぢや、皆當歳子の時から、仕込だものゆゑ、急に直さうといふ事はならぬ。

夫なら芝居は、狂言綺語の戯を以て、善道へ導くため、世界の助となればこそ、御上より御免なされてある、善人は一旦、どの様に難儀しても、終には明り立て運を開き、悪人は一旦勢ひ強けれど、どうでも仕舞に首がない、あれが悪人は段々立身し、善人は次第く亡ぶ芝居なら、誰が見に行ものはない、貧窮の内より忠義を盡し恩愛切なる所より、義を守り、誠の道を磨くゆゑ、面白いのぢや、何にもしらぬ、山家の遠奥の三介お鍋までも、孝行忠義の正しい道理を、能合點さすためぢや、皆勸善懲惡の御すゝめぢや、其入用の所は見ずに、わつけもない男と女と、はなししたり、逢たがるものに逢はれなんだり、本妻嫌うて女郎狂ひする、極道息子が、女郎へ忠義立て、我女房賣て、其身の代で請出してやつたり、皆不詰りな事ばつかりを悦んで見て居る、其賣られて行女房が、我子を殘して行をかなしび、愁歎するを同じ様にしやくりあけて目をはらし、兄嫁の死だ時さへ泣なんだものが、知りもせぬ他人の事に、すゝりあけて癪おこらし、らつちもない所ばつかりを稽古して戻つたものぢや、芝居はそこを、見せるのぢやない、此やうな不詰りな事すると、此通りに難儀するぞと、人の腹中を、まるはだ

かにして、見せてござるを、すつきりこちの見やうが悪いゆゑ、御家様は女形の髪形地、身ぶりをならひ、旦那殿は立役の身ぶりものまねで、親類の寄合にも本がこしらへもので、稽古したものでちやによつて、眞實な所は一ツもない、其薄情な心を以て、家内を治めうとするゆゑ、不實だらけ、追付町内入かはりノ、永うはやらぬはずぢや  
 或所に大工殿がある、其弟子を仕込ましやる、殿しいものぢや、晝は仕事先一日働き、暮に戻れば水を汲み風呂を焚き、夜食を仕舞ふと四ツ過まで夜業さす、朝もとうから起て、めし焚たり掃除仕舞ふて仕事に行、内の息子殿は、けふは頭痛がするといふては休み、腹がいたむといふては休み、近所の醫者殿に見せる、醫者殿もマア其様なものぢやといふてござる、夫で大きな顔して、火壁に當つたり寝ころんだり、のらくら遊んでも退屈な、錢もふけのかはりに、近所へ遊びに行、酒呑たり、上るり語たり、だん／＼とのらが癖付、毎日／＼作病ぢや、親御達は病身ものぢやといふて、案じてござる、彌得手にさして、コリヤうまいものぢやと、錢遣ふ事ばつかりを仕事にしてゐる、黒穂の成か、りぢや、醫者殿も氣の毒、どつこも悪うないものに、毎日／＼見舞ふて薬を吞すが、何の藝もない事ぢや、どうでも其大工殿と、縁者でも有たやう、家つぶさしてはならぬと思ひ、御亭主に御咄しぢや、扱世にはどう慾な人も有ものぢや、

我子を庭へぶち付たり、石になけ付たり、石でた、き廻し、顔も體も疵だらけにする人がある、そりやどこの人でござります、イヤ外でもない貴様の事ぢや、弟子はあの通りに仕込んでやらしやれば、此度はきつと棟梁になるに違ひはない、可愛さうに息子殿も、仕込でやらしやれいの、あの様に疵だらけにして、此度世間へ顔出しもならぬ様に、してやるとは、あんまり廻慾といふものぢやと、いはれたれば、大工殿が始て目が覺めた、是が愛慾の、とんほう返りしたものでちや、可愛／＼息子は獄道になる、算用づくで、遣ふ弟子は、棟梁になる、愛のとんほう慾のとんほう、顛倒の衆生、犬や猫が、子を産で、かあいがりてねぶり廻し、あんまりかはいが、あまつて喰うて仕舞をる様なもので、かはい／＼の、とんほう返りぢや、いと様の、ほん様のと、總／＼がかはいがり、氣隨氣ま、の肝癪持にして、人のする程の事が、氣に入らぬ氣の方の、勞瘵のと、名を付て、喰うて仕舞ふ、又算用づくで、かはいがりて仕舞は、藝子や役者に賣て、喰うて仕舞ふもある、皆顛倒の衆生というて、逆様になつて、あるいてゐる、大體くるしいものぢやない、どなたも足をあけて手であるいてござらうじませ、目くれ耳くれ鼻くられて、目鼻口から血が出て  
 「目は見え、耳は聞えず鼻つまり人のいふ事は、何も聞えず「難儀なものぢや、若い時二度は

ない、随分若い時に精出して、仕込でやつたがよい、年の寄るは取歸しはならぬ、親御様の年の寄ほど、息子殿が達者に成て、後には親御様を取てなけたり、ふんだりして一向手にあはぬ、家屋しき諸道具もなけらし、雁金文七の、濡髪長五郎のといふ様な、男達に成て其様な息子を持た親達は、夜の目もあはず、氣苦勞である、親の身に成て、ごらうぢませ、どのやうなものであらうぞ、けふは馬に乗て引る、か、首ばつかりの見せ物にはならぬか、どこぞに身なけ首くりの沙汰があると、聞度々のあるじくるしむ、どのやうなものであらうぞ、仕合で命があれば、濱納やの御隠居鐵拐仙人のやうな、なりして、何ぞくだんく、扱此を食といふものは、たゞ遊んで喰ひたいばかり、仕事と名が付と、しとむながら、何ぞ一色頼んでごらうぢませ、大抵思に著せるものぢやない、骨をしみるものは、皆ごじきの下地ぢや「親の手には、あまりものぞと、いふ人は、あまりもの喰ふ、乞食とぞなる、黒穂に成て仕舞ふた「奢たり遊んだりした、仕返しに、難儀な年の、尻が来るなり、「物喰ふて遊びくらしした、其かはり、するはくはずに、かけまはるなり、「何といふてかけ廻るぞ、はつちくく、くだんく皆生た説法、生た講釋、若い時から、うまい物喰うて、遊びたがると、此様なものに、なりませと云ふ説法ぢや、残念な物ぢやないか、たまくと人と生て、助かるべき道のあるに、其道を行す、外道

へ行つて難儀するとは、よつほど物ずきな事ぢや。

誹法雜行といふは、皆此外道をかせく人の事ぢや、誹法雜行といふと、宗旨體ばつかりの様に思つてゐる、祖師方は、其やうなちいさいのぢやない、人の道に背たは、皆誹法雜行ぢや。朝から晩まで、神道儒道佛道、明らかなものぢや、道は近きであり、然るを遠きに求む、天地は書物萬物は文字、能氣を付て讀で御らうぢませ、一切教にあらざるものはない、イヤわしは學問せぬの、手習せなんだのと辭儀する事はない、眼前の諸式諸道具、喰物から、着物から、皆御助けの上の御教化ぢや、道は上下に明らかなり、書物の中へ這入て居るを書林といふ、此身はずつぷり、教の中へ浸りて居ながら、見違ふのは、こちらの不調法ぢや、ねだりに行所はない、上町から船場へ行にも、道によらねばならぬ、道のない所は橋がある、橋のない所は、橋のある所まで、廻りて行にやならぬ、橋へ廻るが而倒なとて、川を渡れば、水に溺る、何ほ面倒でも、橋へ廻らにやならぬ、橋が直に道ぢや、則教ぢや、橋の御冥加、善い事聞も橋、悪い所へ行も、橋のかけてがある、橋のない所は船橋、萬事萬端請取渡し、椀から口までの間、物喰ふ橋、火をはさむに火箸、婚禮も、橋かけがなければ、渡られぬ、踏かぶらぬ様に、吟味して渡る物ぢや、腹中に無分別を出すも、橋かけて出す、本心を知るも、橋けてやる、正直な

と橋かけ、横着なと橋かけ、賣物買物、安いと橋かけ、高いと橋かけ、物が安いと、しらぬ人まで橋かけてあるく、又物が高いとあそこは高い、止めをせいと橋かけて廻る正直なものぢや、又細い橋など渡る時には、榮耀は出ぬ、こはい所では我なしぢや、けれども此細い橋や、細道の所では、めんよう互に氣を急ものぢや、向うから、荷物などかたけて来る、ちつと待てやればよいのに、餘の所ではぶらぶらする癖に、斯いふ時に入合さうとするゆゑ、羽織の裾など引かけて、善人忽ち變生悪人、わづかな事から地獄こしらへて、くるしむ、大體仕難い事ぢやなけれど、仕付た事ゆゑ、心安うこしらへて、くるしむ、何の役にたぬ事ぢや、こつちから橋かけると、向うから渡りて来る、皆此方の陰ほうしを相手にして、けんくわする様なものぢや、庭鳥に鏡見せると、羽を逆立て怒る、猫がふき入た鏡戸へ己が影のうつるを、相手にして、毛を立、爪をたて、いかる有様、一切の事が、皆此方の影ほうし、憎いもかあいも、ほしいも、をしいも、影ほうし、一世の中は白黒赤く移り行、かみひとつは、もとの身にして、「此もとの身とは何ぞ」とば我大切なものを失ふた、其時は方々をさがしたけれど見えぬ、ほつと草臥其儘にして置たが、或時ふつと、思ひもよらぬ所から出た、其時ほんに、わしがこゝに入て置たといふと思ひ出したが、此思ひ出したは、我が思ひ出したか、失物が思ひ出したか、又我

が覺えてゐたか、失物が覺えてゐたか、又失物の出た時に、うれしやと思ふたが、此ヤレ嬉しやは、我に有たか、失物に有たか、我に有なら、失物の出ぬ時は、ヤレ嬉しやはない、又失物に有といふなら、失物は覺え通しぢやが、ヤレ嬉しやはないはずぢや、サア此ヤレうれしやは何ものぞ御工夫。

萬法と供たらざるは何ものぞ、きのふの酒にけふの、ほたもち、きのふは酒を飲み、けふはほたもち喰ふものを、友とはせぬが、どうして此味を知り分けたぞ、此味を知りわけたものと、御近付に御なりなると、商内しても、何しても、給銀なしの手代を幾人遣ふとま、ぢや我無我無心で眺むれば、森羅萬象、一切萬物、有情非情に至るまで、うごき働き、我を助る給銀なしの手代殿、何と道理のよいものぢやないか、随分代呂物吟味して、少し安うしてやると買た人が、精出して觸あるく、壹文貳文の商内も、三百目五百目の商内も、同じ様に、ていねいに、如才なしの我なしにしてやると、世界中が世話やいて、あそこへ行て買はしやれ、買に行かぬと、しんきがり、腹立て世話をする、皆物喰はぬ給銀なしの手代殿が働てるゆゑ、天地を動し、鬼神を感せしむること、神明佛陀の、妙感にかなひ、得意先が身になり、家内が身になり、盗人の世話入らず、心安い事で、甚だ理詰のよいものぢや、どなたもなされてごら

うじませ、何にもむづかしい事ぢやない、いろはにほへと、ならうような物ぢや、あんまり心安い事のゑ、皆こはがつて辭儀してござる、成程心安い結構な事でござります、けれど私は、親共が嫌ひでござります、イヤ親方が好れませぬの、イヤ一向宗でござりますのと、色々のいひわけして、にけてござる、其代り何ぞかはつた事といふと、見たがる、此度白鳥を、見せ物にする、馬に翼のはえたを見せるといふと、コリヤ珍らしいと一番がけに飛で行、其時には親の事も一向宗もいふてはるぬ、皆腹中に、かはつた事を好む虫があるゆる變を好むといふものぢや、又見せ物の門を通る時、顔に袖をあて、行御方がある、なぜ其様になされますといへば、イヤ私は錢が無いゆゑ、かんばんも見ぬやうにいたしますといふて、顔を隠してござる人があゝる、此やうな正直な人もあるものぢや、是と同じ様な事が大分あるものぢや、本心のはなしすると、いやがつて顔を隠して、にけていぬ御方があるものぢや、是等は生得に虫が嫌ふものぢや、此やうなは無理にすゝめると、御病氣が起るやめにするがよい、酒の嫌ひな人に、酒ばなしすると、胸悪がるやうなもので、本心は嗅もいやと、いふが有ものぢや、是はどうも仕様がない。

松翁道話 第一編、巻の下

人の家での本心はどこぞ。大黒柱ぢや。是を大極柱といふて。神道では高天が原に。神とまゝりましゝて。善事ばかり。集る所ぢや。

「すぐなれば。重荷かけても。折れぬなり。世渡る人の。息杖ぞかし。此息杖が。ちつとでもいがむと。直に折れる大極柱が息を杖にして。つゝばつてゐるものぢや。人では旦那殿が。大黒柱御家様が外大黒柱。息子殿は。小大黒柱。夫から段々手代衆。丁稚衆。女子衆と。所々の建柱ぢや。旦那殿の大黒柱に少し。いがみが来ると惣々の柱が残らざるひが来る。又大黒柱に蟲が入ると屋根裏まで廻る。旦那殿が遊所ぐるひすると手代殿が小宿こしらへて。女房ぜんさく。丁稚殿が紗綾の帯と。段々虫が廻る。こはいものぢや。

此大黒柱の損じたを。どうしたら直るぞと大工衆に相談して御らうじませ。一向家を。建直さにやならぬといふ。スリヤ大體造作なものぢやない。随分いがまぬやう。御用心なされませ。夫の大黒柱がいがむと。女房の外大黒から。直すやうにせにやならぬ。女房の外大黒が。いがみかゝると。夫から直してやると。家内和合して。家が治る。それも急に直さうとすると。惣



ぐにくるひが来る。大體是には工合のある事ぢやない。鍛冶屋で鐵を湯に沸すに。消炭の和らかな火でなければ。堅い鐵は。湯にならぬ。又眞鍮赤銅のといふ和らかなものは堅炭でなければ湯にならぬ。一切の事世話焼が能なければものにならぬ。聖人神佛其外の祖師方が瘦こけて御世話なさる。砥石で又物磨やうなもので。砥石がおりと。いつの間じや。又物に刃が付てあるけれど。なまくら物は。何ほ磨でも。見えばかりで役にたゝぬ。又鍋尻こそける炭かき庖丁の中にも。吟味すると。折によいものがある物ぢや。むかしの太公望は東海の濱邊に漁人で有つたを。文王の御徳で。磨上げて見たれば。天下第一の名作物に成た。炭かきの中にも。どの様なものが。有まいものでもない。大舜は片田舎の田畝の中より出給ふといふ事ぢや。此御方を引上げて。御相談なさるは。何の爲なれば。世界中のいがみを直すのぢや。鏽を落してもらうのぢや。又此御方の目から。世界を見れば。やゝ子が髮剃持て。遊んでゐる様なもので。あぶない事の天上ぢや。どの様な事か出来うも知れぬと。ひやくし思ひ通しぢや。其心ならこそ。あの御世話が出来た物ぢや。中々伊達や。名聞で出来る仕事ぢやない。此やうな御方々が。世に出て御世話なさりやこそ。何にもしらぬ。今日の銘々共。腹ふくらし。上股打て寝起するも。コリヤどこからして下さるのぢや。ちつと考ても見たがよい。つひに情らしい事して

人の爲になつた事もなければ。人を救ふた覺もない。まだ世界の害となり人を損ふた事は多い。さういふ代呂物が今日を安閑とくらしてゐるはどうしたものだ。あんまり。結構過るゆる。返つて不足ばかりいふてゐる。其筈じや。何をみても。何を聞てもものゝ道理が。わからぬゆる。難儀なものぢや。聖人の神佛のといふと。人に尊敬せられ。結構なものと。ばつかり思ふてゐる。あなた様方は。大體御苦勞なものぢやない。どうぞ天下太平五穀成就萬民飢す。凍すうろたへぬ様にしてやりたいと。思召て夜の目もあはず。此事ばつかり。御苦勞ぢや。勿體ない事なれど。天子様でも將軍様でも御大名様でも。御役人様でも此事ばつかり。皆天下國家の爲に。御苦勞遊ばさるのぢや。又此御召のない。御方様方は。かはり立て。外の人に勤めて御もらひなさる。スリヤ大體大切な事ぢやない。孟子曰。大體に従ふを大人と云ふ。小體に従ふを小人と云ふ。此大體に従ふとは。天地の爲に御苦勞なさるゆる。大人と云ふ。則今日の神様佛様ぢや。去によつて。諸人有難がつて尊敬する。又小體に従ふとは。我ひとり前の喰飲の私事に心をくだいてゐる。中々世界の事所か。壁隣の事でも構やせぬ。大體氣強い者ぢやない。ぢやに依て我まゝ氣まゝは。世界の騒動のはじまりぢや。夫を不便に思し召て。人には人の道ある事を教て御さるけれど。其道に寄る事が嫌ひぢや。なぜなれば我まゝが出来ぬゆるぢや。

其我まゝは。何程結構なものぢやと思へば。やうく此五尺の體だけを。氣隨我まゝにするのぢや。夫で道によると。どうやら窮屈な様に思ふてゐる。夫が大きな間違ひぢや。此道によらぬものほど窮屈な。不自由なものはない。其樂しみとする所は。どのやうな事ぞ。ちよつと密合ても。世間ばなしか。芝居ばなしか。或は喰飲の咄しか。損得の事か。自慢するか。人をそしめる事か。色慾のはなしか。人をうらむか。一旦下りては酒呑むか。博奕か。けんかするか。我身勝手ばかりいふて。腹立るか。大體是ほどの事許しらぬ。不自由なものぢや。是等は人の恥とする所なれど。仕付た癖なればなんとも思はず。是が人の道の様に思ひ詰てる。すつきり。此様な無益な事に暇を費し。手足を費し。うからうくらすゆゑ。けふの仕事が明日になり。今月の仕事が出来になり。今年が来年に成り。此世の事が来世に成り。せんぐりにおくれて行ゆる。手廻しも。悪くなり。貧乏もする筈ぢや。けれども此外といふては。何にもしらぬ。是非もない事ぢや。夫故物事退屈して。さびしがり。随分出来のよい時が。瞽女座頭呼んで。親類打寄。酒など呑むか。或は上るりかたり頼んで。同じ友達招き合。小首傾むけ。泣いたり。笑ふたり。仕廻は大方あらそひぢや。錢の入事はつかり。夫で何をいふも。金の事金の事と寝言までいふてゐる。何と楽しみの。すくない。不自由な物ぢやないか。能思ひ廻し

て見れば。我身ながら。不便千萬なものぢやぞへ。天王寺の。沈香屋見世に狗が看板に出てゐる。菓子を見せると悦んでわん／＼泣いたり。おがんだり。尾をふつたり。色々の狂言する。錢見せてはよろこばぬ。たゞ。菓子がほしいばかり。鈴々共に儉約ばなしや。本心のはなしすると。氣がつまつて。面白くない。抹香くさいといふて寄付ぬ。又芝居ばなしや。おごりばなしで。酒呑んだり。自慢したり。よい物着て。ボン／＼／＼をどり廻ると。よだれ流して御きけんぢや。錢より菓子を悦ぶ方ぢや。どうでも喰ひには付安い。家相續は。氣詰りな。やつぱりつぶして。仕廻ふ方が。御すきぢや。よつほど大病じや。立煩ひは。本復が出来憎い物ぢや。どうして。此やうな病人が出来たものぞ。御考なされて御らうじませ。本心と私心とのはなし「本心は萬物を。能造化するゆゑ。世界の主ぢや。其弟子に私心といふがある。永々本心の弟子と成つて。大體自由も出来るくらゐに成た。夫で私も。萬物を能造化いたしますが。ちつと造化して見せませうかい。本心が否々汝愚痴にして。自身智恵ありと。思ふてゐる。大きな了簡違ひ。かならず。其心を發す事なけれ。といましむ。なれども私心が。本心の命を背き。萬物を造化する。先始に人間を造化して見たれば。天窓が大きうて。體の小さい。目大きにして耳の小さい。鼻は獅々舞鼻で。口はとがり。手が大きうて臂細く。足小さうし

て。膝大きく背骨有りて腹なく。言ふにいはれぬ不器用なものを出来した。私心もあきれて。コリヤどうぢや。本心の教の通り。少も違はぬ様に。造化したが。どうして此やうな。變物が出来たぞ。本心曰。汝我教を請るといへども。其教を請たる所に過不及あり。夫ゆるに。斯の如き、不具成ものを造化する。是汝が自業自得にして造化の私にあらずといふた。斯いふ事が何ほもある事ぢや。随分よい事ぢやと思ふても。我一存でする事は。大きに嘖違ひ。出来る物ぢや。我こそ本心會得したと思ひ。めつたに世間を欺語あるき。世界を變物にする事がある。實に勿體ない事ぢや。片輪にしては取返しならぬ。大事の事ぢや。どなたも能心得て居て。おくれなされ。此様に生てるるは。天命で生てるるゆゑ。自由が出来る。此自由を我才覺ですると思ふゆゑ。我まゝをする。此我まゝを天命と。混亂にするゆゑ。色々様々の化ものが出来る。家を治るも身を修るも。此道理でもつともらしい所もあれど。又我まゝ、非道な所もある。其天命に背た所が。變物と成。憂ひ災難困窮飢渴と。形の上にはあらはる。皆私心の造化した所ぢや。眞實に我を離れぬ仕業は。役に立ぬといふ事を能御究めなされませ。此片輪もの、次手に前方京都西洞院四條上る町。かまきり山の町内へ丑の十月十日の夜。三才ばかりな子を捨て。其捨て子は。瘡贅。盲の痿ぢや。何と珍しい片輪ものを捨て。御上へ申上たれば。町内へ御預

け。もらひ人のあるまで。養育してとらせ。ハイく畏りました。町内難儀ぢや。此やうなもの。誰がもらひに来るものでと。思ふてゐたが。ふしぎなものぢや。貴人が出て来た。西岡樫木村の。百姓十兵衛年頃五十ばかりの人が貴に来た。町内悦び。どうした事で。あの様なものをもらふて下さると尋たれば。其事でござります。私は五十年已前。此御町内へ捨られました。捨てて御ざります。則其時御町内が親分に成て。只今の所へ。御やりなすつて下さりましたゆゑ。今日此通りの。男でござります。其時御町内が。御世話なすつて下されずば。定めて犬に喰れてがな。仕廻ませう。夫ゆる私が産の親と申は。乍憚御町内の。あなた方でござります。只今では二親も見送り子供もござります。御影で今日暮しかねもいたしませねば。其子には。乳母取て育ますれば。何にも苦勞な事はござりませぬ。責て此程の。御恩送りましたう存ますと。いふことぢや。夫で其趣を申上たれば。御上にも神妙なりと。御悦び遊ばされ。直様もらうて歸られました。何とふしぎな因縁もあるものぢや。又此やうな正直な人もすくないものぢや。正直は正直といふ説法。瘡贅で盲目のなえは。六根不具といふ。さんけの説法。皆天地の御直説法ぢや。若其やうな片輪ものに成て御らうじませ。夫も天命なれば。是非もなければ。大抵難儀なものぢやない。今日此やうにとこに一つ申分のない體に生れたは。

有難い事ぢや。二親の御影此身の仕合大抵御禮申さにやならぬはづじや。夫を何とも思はずに居るゆゑ。皆手細工の瘡腫目くらに成て暮します。かなしい事ぢや「憎て口役に立ぬ口松よい事しらぬ」「瘡どの身の爲になる異見は聞えぬ聲」「薬師様へ願かけて御慈悲有ても。我と我手に聞ぬ聲はどうもならぬ」「悪い事は見ならふて。よい事の見えぬ盲目仕事嫌ひの遊びすき。何にも出来ぬ。身はなえぢや。此捨子にほつとこまりものぢや。もらひ人がなうて。うろくして居たを先生がもらひに出て。御養育下され御社中様方の御介抱で。やうく今日此くらまで。なされて下さつたけれど。また片意地はやみませぬ。

よい事をいふ口と手とそろはざる。人はまことの片輪ものなり「身の爲になる事。いふてくれぬ人があると。成程左様ぢや御尤。あなたならこそ。能おつしやつて下さつたと。口にはいへど耳へは這入らぬ金でこ」「役にたゝぬ事や。人の腹立る事は。いふけれど。よい事は一言もいふ事はならぬ。おし殿。人の非ばかり咎めて。腹立るけれど。我事は。ねつから見えぬあき目くら「商賣不精で仕事嫌ひのらくふなく骨なしの中風やみ。西洞院の捨子から見ては。よつほど代呂物が落ちてある。よその事かと思へばやつぱりわたしが事ぢや。どなたも身に立歸りて。考てごらうじませ。斯いふ大病を身に持ながら。其事は棚へほり上げて置いて。立身出世子孫

長久。ア、是何の謔言ぞや。若片輪の子孫が。残りて見たがよい。大體難儀ぢやない。殺生の第一ぢや。

立身出世したくば。足もとから勤めて行のぢや若い御方々。外には何にも用はない。主人大事親大事立身出世ひとり出来る我まゝ。氣まゝの。おごりが止みさへすりや。子孫長久疑なし。又立身出世も女房子にして見せるのなら。よしにしたがよい。一家親類の難儀は。見捨て少々鼻に手を當て。たゞ女房子には。活計さすを大きな事と思ひ。自慢する是を鬼窟裏の活計といふて。濱納屋の乞食が。正月元朝の禮者を見てあの衆達は。此寒い雪降に勤めねばならぬ。難儀なものぢや。夫から見れば。こちとらは三ヶ日の食物は。もらひ溜てあり。何の苦もない。正月すると。乞食唄が悦べば。男乞食が大きな顔して。ソレ其榮耀は誰が。云はすのぢや。所詮金銀財寶女房子の爲に腐らして仕廻ふ此身を。とてもなら世の爲人の爲に腐らして仕舞ふが。立身出世の天上ぢや。そりやなぜなれば。主人や親の御苦勞で。世界の物を取込だ。其算用はどうなると。大概算盤持にも及ばぬ事ぢや。「堵庵先生の辭世に。

「君へ忠。親に孝行頼みます。内と外との。かはりあるまで「かりの浮世に。かりの狂言。どうで一度は消て行身ぢや。とてもこの事に本道の勤を御頼み申ます。盗人の長命は刑罪をまつよ

り外に用はない。如何成是大地一遍火坑何因是免火の中へほり込れてどうして助かるといふのぢや。「ぐすくしてゐると。焼て仕廻ふ。サア助かり様はどうぢやな。時々刻々に。年が寄る。取返しはならぬ。其中での助り様御工夫。」

此相州鎌倉の洪水に。我子を流して。兄の子を抱て居た。女の死骸が有た。其様な火急な所でもうろたえぬ義婦の行跡。御上にも御感心遊ばされたといふ事ぢや。火に入ても不焼水に入ても溺れぬ。結構なものを。銘々所持して居ながらわづかなものに替て仕廻ふはあつたら事ぢや。よいもの着せて。うまいもの喰したとて。格別利口になるものでもない。此種の失せぬやう。子達のある御方々。どうぞ前訓を日に一枚づゝなりと讀まして。下さりませ。天地が御よろこびなさると。則其日の御祈禱。其御子。息災延命ぢや。皆君子の苗ぢやあつたらものぢや。どなたも損はぬ様になさつて下さりませ。御頼み申上ます。

爲によい事いふ人はいやで。毒をあてがふ人がすき。皆毒物にあてられて。ハアスウ〜目前に苦しんでゐるが。何ほもあるぞ。片輪にしてからは。取返しがならぬ。嫌がるものを。無理に芝居へつれて行事もない。段々賣買は高くなる。渡世は次第に仕憎ふなる。どうして此やうに成たのぢや。皆我まゝ氣まゝに。おごり遊んだ筒尾。則罰の當たのぢや。娘子が藪入に戻つ

たらきらず飯や。雑粥でせんたくすると。どの様な姑御へでも御孝行が出来る。御主人が大切に成て。何ほ程其身に徳の付事ぢや知れぬ。「よい事をいふてもらふて。賃取りて。そしてせぬのは。扱もどうよく。」

「むかしから。聖人神佛の御世話は。何のためぞ。どうぞ片輪ものに。しとむないのぢや。賃ばつかり取りて。せずに居るゆゑ。先生方もあたまかいて。扱もどうよくと。いふてござるぞ。西洞院の捨子。よその事ぢやない。身に立歸りて御らうじませ。大きに利益のある事ぢや。」

松翁道話 第二編 卷の上

むかし親賣ふ〜といふて。賣あるくものがある。誰かひとり買ふといふものがない。ないはずぢや。皆銘々親達を持退屈して。こちらの親父様もモウ極樂まるりさしやる時分ぢやがといふくらゐで。誰かひとり買さうな人はない。時にまた世には物好きな人もあるものぢや。宿這入して間もない更世帯。さし向ひの御夫婦が相談してござる。何とマア笑止な事ぢや。賣るゝ親御達は不仕合か。息子どのが不孝なか。但子供衆もない人か。何でもいといとぢや。我等は幼

少で親達に離れ。一向親の味しらす。産の御恩を報ずる事もないものぢやが。何と人の親でも我親にして。朝夕つかへ。心一ぱい御介抱申したら。すこしは産の親達へ御恩送りにもならうかい。どうでも年寄のあるうちには。めつたに家がつぶれぬといへば。家の祈禱にもなる事ぢや。其御老人方を買ふて御介抱してみやうかと。相談究た所へ。親賣ふくといふて来た。さいはひぢや。是親買ませう。ドレみせさしやれぬか。ハイ代呂物は内にござります。父親が六十八母親が六十三。随分達者で代呂物は能ござります。直段はなにほどするぞ。ハイ御夫婦で代金百兩ぢや。ヤアそれは高いものぢやのう。我等宿這入して間のないものぢや。ちつとまけさつしやれ。イヤく現銀かけ直なし一兩も負りませぬといふを。だんく直切て八十兩まで付た。デモまけぬ。そんなら先代呂物を見せさつしやれ。ハイ左やうならば明日どこそまで御出なさつて下され。私が迎ひに出ませうと約束して歸る。扱翌日金こしらへ夫婦つれ立約束の所まで往たれば。きのふの人が待てる。サア御出なさりませと。同道して直に彼の住家へ往てみれば。門がまへ女關付。是はけしからぬ事とおもひながら。直に座敷へ通りてみれば。扱結構なさしきぢや。御茶のたばこの持はこぶ菓子盆には。山のやうに。菓子を積て。色々と御馳走ぢや。暫くすると。御老人御夫婦が出て御挨拶ぢや。我々をかふて下さるはこなた衆か。いか

い御世話でござる。随分可愛がつて下され。たのみます。我く夫婦年寄で。あと相續する子どももなく。難儀におもひます所。能買て下さつた。かたじけなうござる。さいはひ田地も少々あり。有銀も百貫目ばかりある。此家屋しきはいふに不及。是をゆづるべき眞實の養子がしたさに。賣に出しましたを。よう買て下さつたのふ。かう親子となるからは。今日から。みなこなた衆のものぢやほどに。よいやうにして下されといふて。悦んでござる。びつくりしたが何とうまい物な。親のおんしりたいたいとおもふ。眞實心から天道様より。御授り下さる榮花の身狸狸のうたひに「我親に孝あるにより次第く富貴の身となりて候。有がたいことぢやぞへ。あなたがたはどうぢやな。親に孝あるによるかな。世間に何ほもあるぞい。百兩所か一錢も半文も出さずに親御さまの跡を。大きな顔して。ぬつくりと丸どりぢや。其御禮には強い顔して白眼だり。不返事で買ふてる。勿體ないとぢやぞい。此席には其やうな御方はあるまい。つひに一日親を安心させた覺えもなうて。我子には孝行させて、かゝらふとは。あんまりあつかましいわい。種もまかすにおいてモウ大こんが出来る時分ぢやがといふて。精出して掘てみるやうなものぢや。出来る時分は出来る時分ぢやけれど。種が蒔すにある。土ばかりでは。出来はせぬ。まんざら種を蒔ぬでもない。すねたりして置たゆゑ。息子が目むいたり白眼だりす

る。わるい種を蒔て置た。俄に蒔直しもならず。のちには息子どのが。金箱にかぶり付たり。家をゆすぶつたりして。微塵にぶちくだいてしまふ。あれほどの。種はまきはせぬと。おもふけれど。段々日合のかゝつてある事はしらすに。はら立る。とうふく家やしき諸道具まで。天道様に引たくられてしまひ。夫から何にならしれぬこはいものぢや。其始は親御様にすねたり不返事したとこほり

「よし野川其水上を尋ればむぐらのしづく萩の下露」わづかな。葎の葉萩の下露が後には。船さしても。わたられぬほどの。大河となる。こはいものぢや。みな銘々の好む所を建立する。蓼喰ふむしも。すきくぢや。此夫婦の衆は親すき。そのほか女房すき。妾すき。道具すき。仕事すき。のらすき。慾すき。損すき。あまいものすき。からいものすき。金すき。自慢すき。癩すき。年中癩ぢやくといふて居る人が有ものぢや。此外いろくさまんものすきがある。みなむしの業ぢや。其内親すきが。最上理詰がよい。次第く富貴の身となるか。どなたも御望の方はないか。また。當世養子と跡とりとがある。養子といふは。養育しられた。恩を親へ報じ返すを。眞實の養子といふ。また跡とりといふは。たとへ眞實の子でも。親御の御存命の内から。どうしてこうしてと。おもふてゐるがある。これが跡とり。異名を油ねぶりとい

ふて。尾が二つにわかれてある。またむかふの身上ばつかり。目あてにして居る跡とりがある。熊坂長範が子どもどるとき。こがねむしといふ。虫の首を糸でくまり錢ばこの上に乗てあそんでるたれば。其むしが錢ばこの穴へ這入た。いとを引あけたれば。其むしが錢をだかへて居た。それからおもひついた。入物の内にあるものを。とる事工夫仕度した。これが盗入のはじまりぢや。

子を養子にやつても。實の親の方から。何のかのといふは。みな紐付て引すりもどすやうなものぢや。丁どこがね蟲が首綱を引ると。じゆつながらりて。何になと。しがみつ。其しがみつたものぐるめに。引もどさるゝやうしたものぢや。何ほも世間にある事ぢや。其しがみつくものとは何ぞ。或は娘にしがみつるか。錢金にしがみつるか。何なりとしがみついて離しやせぬ。

此前或豪家であつたが。其内へ子どもから。丁稚に來た二才あがり。親かたの娘子にしがみ付て。離さぬ。難儀なものぢや。世間にしては。外聞あしく。夫を内證であつかひ娘をこぢはなしたもある。また娘も銀も家屋敷までも。ひんだかへて。出たこがね蟲もある。これらは長範より咎が重い。また娘をよそへ嫁にやるといふても。同じ事ぢや。先嫁にやるなら。かならず

生てもどるなど。かたく云付て紐を切て。やるがよい。もし腰に紐がついてあると。向ふの家  
 がありがたうない。それですこし我氣に入らぬことがあると。なんのかのく〜と小ごとをいふ  
 其度々に親もとから。それはすまぬ。是は聞えぬと。紐を引ゆる。娘もうろたへ出し。あちら  
 へいてはうろく〜こちらへいてはまじくじ。猿の狂言見るやうに。わけもないものにして  
 仕舞。是が皆ものごと。期にしてする事ゆる。不調法なものになつて仕廻。すべて世界の事は  
 みな期を以てする事なれど。是に二色の品がある。世界のためを期にすると。おのれが爲をあ  
 てにするとの違ひがある。これをたとへてみれば。醫者どのが病人をみて。どうぞ此病苦をた  
 ずけてやりたいとおもふて。薬をやると。どうぞ此病人本復さして我手がらにせんと思ふて薬  
 をやるとは。同じあてめで大に違ふところがあつた。これからモウ二三だんも下卑ては頭から藥  
 禮をあてにして薬をやるがある。みな同じ藥なれど。病人へ利き道が大きに違ふ。また醫者ど  
 の、身に。こたへる果報も大きに違ふことぢや。みな本をすてゝするばかりの算用でゐる。  
 植木の枝や葉に水かけると根の所へ水かけるとの違ひがある。麥の穂の所や葉の所へ糞かけ  
 と。枯てしまふ。根本へ糞さへすれば枝葉逆行屈能實る「よしあしの枝葉のせんぎ入らぬもの  
 とかく心の根を知るがもと。本心を知るといふも。別の事ではない。我本来の本の心を知るゆ

ゑ。枝葉にとり付く迷ひがすくなう成て。心安う家内がをさまる。はなはだ利功なものぢや。  
 是までそれほどにも思はなんだ御先祖や親御様が實に大切になる。是が則根に土かふのぢや  
 家内繁昌子孫長久に違ひはない。一家中から子孫の末まで和合して萬事に仕合がよい。内外の  
 奉公人衆丁稚どのまでが。毎月親里へ見廻状出すやうになると。親達が悦び安堵するゆる。子  
 も安心して奉公が大切に成「着物を疊むに。襟もとを持てたゝめば心安うたゝまれる事を。お  
 くびや裾を持て。たゝまうとする故。しわくたになる親御様方を危末にするは。しわくたにす  
 るのぢや。それで家内がぐわつたつき出す。親捨ふ〜と親を捨てるのぢや。親御様は座敷へ  
 すてられ。つれない事ぢやといふてござる。座敷の小隅や藏の二階で泣てござる。御亭主が親  
 御を捨る氣になると。家内中が隠居様をのけものにして。相手にせぬ。丁稚が隠居へ遊びに往  
 たのまで。旦那殿が腹立てしかりつける。何でうろく〜隠居へ往のぢや重てから往をつたらき  
 かぬぞと。けんく〜と犬の寄合のやうになる。それで丁稚までが隠居様をけんく〜い  
 ふ。隠居様は捨られながら。ちつとなと家内のためになりさうな事いふてはしかられ。みなの  
 氣のつかぬことを氣をつけてはしかられ。すたるものをひろひ廻りてはしかられ。めんやう年  
 寄といふものは。ぐすく〜役に立ぬ事ばかりするものぢやと。息子どのも嫁も一つに成



ておだてるゆるる隠居様はうろく／＼してござる。目もあてられぬいたはしいものぢや。家内の見まつべして儉約するは福の神じやに其福の神いやがりて貧乏神信心するのぢや不仕合な筈ぢや。身上が悪うなるほど喧嘩がはじまる。是が小人の常。たゞ欲深いゆゑ人があいそつかす。天道に見はなさるゝと。ろくなことはおもひつかぬ。たゞ此方の勝手ばかり身勝手は我まゝ。わがまゝは迷ふたのぢや。迷ふといふは此からだを。我ものにしたゆゑぢや。何ほわがものにして。我ものにする事ならぬ。だん／＼年が寄敷が出来る。白髪にいられたり。齒を抜れたり。腰をかゞめられたり。長才坊にいられても。ねだりに行所もない。腹立ることならぬ。其あけくに死で仕まふと。焼か埋かどうもほかにしようもない。夫をどうぞ仕やうもあるものやうにおもふてるゆるる。何をいふも金のことぢや。金がなければどうもならぬと。こやかましようにえかへる。たとへ金銀が澤山にあつたとて。どうするえ。ゆめのごとく幻のごとく。泡のごとく。影のごとき。ないもせぬ此からだを期にしてるゆるる。なすとする事茶碗に一ぱいの水で大火事消すやうな積りばつかりしてゐるのぢや。能考へてみたがよい。熱に浮されてたわ言いふてるるやうなものぢや。

外道の法に此世で火定に入て來世の果報を願ふといふことがある。火定といふは。生ながら火

の中へ入て命を終り來世にわがおもふ通りの榮花がしたいといふ願ひぢや。たとへわがおもふ通り榮耀榮花にしたとて。高が二十年か三十年のあひだの事ぢや。それもきつと慥なともあるまい。其夢のやうなとに骨をらすが外道の法ぢや世にまた知識方の入靜といふことがある。是は格別やうすのあるものぢや。これにも様／＼の御願力ある事なれど。大體は天地の御心をうけ續給ひて。大慈悲心をおこし。修し得たる佛心を末世の衆生に送らんとて入靜し給ふ事もある。此やうなおかた／＼もなければ世を導き人を救ふ役人がないやうになると。世界が夷國のやうになりて。義理も法も失せて仕まふ。スリヤこれみな世界國土のための大願ぢや「おのれ一人前の榮花を願ふ外道の修行とは大にわけの違ふ事ぢや。此外道の法を今日の上でみれば借錢のなるだけ借錢して。世間をあつかひ。其とわりにあたたまをさけ。腰をかゞめてあやまり廻りどうやらこやらみなが。聞届て下さつて相すんだヤレ／＼うれしや有がたや。これから敷延して借錢氣のない所へいて贅八百をいひちらし。さも美々しいすがたをあらはして。活計歡樂とする。これが一旦くるしき火定に入て來世の果報を願ふ外道の法と同じ事ぢや。此やうな廻り遠い果報を願はんより。人には人の道がある。しかも心安い事ぢや。其道筋さへ。つとめてるれば。何の氣遣ひなく此身はひとり助るやうにしてあるを。しらぬ故我身のためばつかり

はかりて却てくるしむ。夫ゆゑいつまでも夜が明けぬ。暗いものぢや神佛へ参りても。此方から精出して拜んで上たら佛さまが。お助りなされて。御悦びに此方の願ひをかなへて下さるやうにおもふてゐる。やつぱり。ためをまつ心が離れぬ。みないつはりの信心ぢや佛様に花をあけるに根を切て上るは心の根を切て上るといふ事で。これが無爲自然にいたる事を勤るのぢや無爲とはわれもしらずして人を助われも助かりてゐる。事がある。是が何のためといふをしらぬがゆゑ無爲といふ。又有爲とは。わが心に覺るゆゑ形の上においてくるしみがある。たとへば途中で乞食に錢一文やつても。有難ひといはぬと。どうやらふり返りてみる心がある。これが返禮をまつ心ぢや有爲の病ぢや。此有爲の病ひがあるゆゑ。たまく人の世話などしておれがこれほど世話するを。何ともおもはぬといふて腹立る。あつたらとぢや。其やうに恩に着せる心なら始めから世話せぬがよいけれど有爲を待の仕業は。みな形にくるしみが付てまはる。此道理がわからぬと。腹立る事を年中商賣のやうにおもふてゐる。ソコで家名も腹立や。朝から晩まで腹立るが商賣ぢや。大きな看板かけて。現銀大安賣腹立所家内残らず。腹の立合にぎやかな。商賣ぢや。朝むつくり起ると旦那のぢや。ちやんと帳場にすわり。コリヤ長吉きのふ權兵衛殿所へ往て何といふたぞい。ハイかようくく其ような持持の明ぬとがあるか

今一かへり往てこい獄胸めがと。朝の間から腹立かける。見世の衆も。ちつと氣をつきやいのおれにばつかり腹立させて。何をうろくしてゐるのぢやと。がみくくくにかへる。番頭どの口のうちに。あたいまくしいと。ほやくを聞いて其やうな。ぐづくした事では埒があかぬ。もつとづはらたてにやこちの商賣はいかぬといふて。ござる所へ表へ御客がある。手代衆がよう御出なりました。マア御上りなさいませ。イヤサ此間買ました代物目をかけてみれば貳百目たらぬ。アリヤどうしたものぢや。ソコで手代衆がめつそやな事おつしやれませ。あなたのみでござる通り。私方では。りんと目を改めて上ましたに。違ひはない。イヤそれでは目が足ぬゆゑ。戻します。イヤ一旦賣付た物。請とらぬと。たがひにあらそひ。腹の立合。所へ旦那のぢや出て左様ならば中とつて。折合にいたしませやう。夫で御了簡被成ませ。客もせう事なし。腹立仕廻て相談が究る。全體此うちには請取千本と渡し千本と二挺こしらへてあるゆゑ。いつでも仕廻は喧嘩になる。あちらむいてゐる人を。足小股とつて突倒す工面ばつかりしてゐる。是が有爲の願ひぢや。無理無體に金をもふけんとするゆゑ。無理無體に金がきえて行。人をつき倒してもと。正直におもひ詰たものぢや。其かはりに腹立る事は何ともおもはぬ。腹立る商賣ぢや。大がい此くらの種を蒔にや。欠落分散心中身なけ首くまり。子孫斷絶

の花が咲ぬ。乞食種でも。貧乏種でも極樂種でも極樂種でも。蒔なくに何を種とて萍の浪のうねく生しけるらん。よいとでもわるいとでも。たねのとほりに花が咲實ができる。

松翁道話 第二編、巻の中

上土にいつの頃より麥一ト穂。天地が生ものゆる少もゆるみがない。少ばかり水があれば直に魚が生ずる。少しばかり土があれば直に草が生ずる。去年正月に神明様のしめ繩に雨がかり。土ほこりがかりて。藁の勢氣が残りてあつたやら。芽を出したれば。しめ繩に稲が出来たといふて、大に人群集が有た。みると聞事直に手あしがはえて動きはたらく。人目を忍べどみる目。かく鼻。すこしも油断はならぬ。おそろしい事ぢや。よい事でも。悪い事でも。ふやすが天地の御商賣なれど。わるい事は世界の妨となり。人には大きに害となる。それゆる天地の功德が消る。よい事はふえるほど世界の扶けとなる。そこで御舍利様がふえるといふは。天地ははたらきの大きいとをいふたものぢや。わづか麥一粒天地へあづけてごらうじませ。凡貳合ほどで御返濟なさる。壹匁がつかひものとして。五貫目ほ

どのため入て下さるは。天地より外にはない。天地がための天上ぢや「物を施して恩に着せぬは天」ものを請てふやして戻すは地「其ふえたものは人此三を合して一乗の法といふ」神道では。陰陽冥合蒔生といふ事はすなはち。天地自然の御すがたぢや。此御姿を如來ともいふ。如來は如如の中より來るといふて。此虚空の内からによつと出たものぢや。見るも。聞も。覺えるも。知るもによくと殖るばかり。今まで何ともない。此所へ扇をよと出せば扇と知ものがふえた。音がすれば何のおと。かの音と。知ものがふえて出る。何と有がたいとが。むかしからあるぢやないか。此見聞覺知するものをしりて。ごらうじませ目も鼻も身も心も有ものぢやない。それでも死だものぢやない。過去よりも未來へ通るづほろほう。雨ふらば降れ。風吹ば吹。あくびしたり。くつさめしたり。のびしたり。何と大な男ぢやないか壹匁の銀。預ると六十萬億那由多恒河沙貫目で御返濟なさる。慥な借人ぢや程に。とてもものにあなた任せになさりませ三千世界と同年になつて。天地一ぱいの生佛。よい事がふえるばかり。其かはりに悪いとも又ふえるぞ。あなた任せにしてるとよいとばかりがふえる。どちらなりと。あなたがたの御望次第。其ふえたを光明とも御光ともいふ。「あみだ如來の御光が四方八方へさしてあると。又世界から

も。有がたいといふて。御光がさし込む。双方たがひに。あひさしの御光で持てあるのぢや。あれが片一方許ぢやもたぬ。又旦那どの、御光が家内中へさすと。又家内からもさし込で。旦那をたすける。御光が強いほど。家内ばかりぢやない。一家一門近在近國。得意がたは勿論。諸々國々からもさしてある。江戸長崎中國北國九州皆あみだ様の御光が。あたまのぎりぎりから。足の爪先まで。足袋となり草履となり。雪踏ふんどし下駄ゆもじ手拭頭巾帶着物鬢付あぶら元結紙。腹は諸國の藏やしき。どこの米喰ふもしれぬ。女中がたは櫛かうがい。かんざし丈長其外のやとひ道具たばこ菓子類酒肴海山里の珍物。かすも限らぬ御光佛。此身はすなはち法身方便の尊像家内の諸道具八百萬の神達十萬分身三世の諸佛。みな御光佛ぢや。よつてあみだ様に御慈悲の心がないと諸國から御光を引たくつて仕廻しやる。そうすると人が相手にせぬやうになると。頬かぶりして。しほくと。ひとりあるくはみな御光のとられたのぢや。權兵衛はどうしたのぢや。アリアヤ此間親方から暇が出た。道理でをかしい顔して居るとおもふた。本に影がない。これ光明のとられたのぢや。どこそこの息子どのはどうしたのぢや。先頃から内を出てゐる。何としたのぢやへ。彼のぢやわい。彼とは何ぢや。ハテ馬の糞や小便呑された道理でいろがわるい。みな御光のとられたのぢやによつて。旦那どの、御光がつよいと。子孫

のするまで。光明がさす。此家の主はたれぢや。あみださま。法華宗ならば妙法が家主。御先祖が家主。家内は佛壇ぐらし。佛壇の内でけんくわすると。御先祖が家明いひ付さつしやる。御亭主は當寺の住職家屋しき諸道具は御先祖の什物一ツも倉末にする事ならぬ。すこしでも紛失させたら。住持はからかさ壹本で寺ひらかにやならぬ。家屋しきばかりぢやない。この骸も御先祖の預りもの。それを我ものにする。たちまち無間地獄のくるしみを請る。おそろしいぞぢや。餘所へ往て馳走にあふもみな御先祖の御光。戻つたら直に佛壇へ御禮申すのぢや。忘れまいぞえ。御先祖の宿這入りから。今日まで何萬日になるぞ。毎日く何萬日の御回向ぢや開帳まるりして御らうじませ。神様や佛様や祖師様方の御一生御持なされた。錫杖のつゑの頭巾のと。みな御身にふれられた。袈裟衣の類ひぢや。銘々ども、御先祖御身にふれられた。衣類着そ、古じゆばん。手拭きやはん。わらぢかけなど。御命日にとり出して。其ときの御苦勞を今日の。ありがたさに。おもひくらべて。大體御禮申さるにやならぬ。いづれの御先祖でも腹の中から錢銀や道具諸式もつて。うまれた御かたもない。みないろくさまんと難行苦行人にやとはれたり。重荷持たり。ひもじいめ寒いめなされた汗あぶらぢや。其時の御苦勞の御姿ををがまんとおもは。今日丁稚衆のたばこ盆掃除するのや。重荷もつてスウ〜いふ衆達

を見ておもひ合せ。其苦勞がつもりくして。今日の何屋何兵衛様ぢや。  
 近來茶湯など。もつばらはやる。是も仕やうに依て。其家の御祈禱にもなる事ぢや。其仕様は  
 どうなれば。御先祖の宿這入なされたときの。古道具おしき一枚茶碗一ツ鹽入の水壺のといふ  
 類ひをとり出し。御命日や御逮夜に家内不残うち寄て宿ばいりのときの。たつた一ツの古茶碗  
 に茶をたて。おしきには。あられ干飯の口とり大和風呂にかけ土瓶摺鉢の水溢しも風雅なも  
 のぢや。床のかけ物は御先祖の御筆のものを表具とし。古じゆばん古帯の切々を集め一文字風  
 袋となし。親子兄弟夫婦一家親類うち寄て御先祖がたの御不自由なされたとを。おもひ出して  
 咄合今日の冥加を報じつくすをこれを眞の茶の湯といふ。  
 毎日毎晩でも茶の湯が出来る。世に大切な所の御先祖の御道具で家内が御恩を報じ盡すのぢや  
 茶の湯も心得がわるいとおごりになり。すこしでも。錢の高い道具を賞翫するやうになり。し  
 もせぬ人の道具を買集み。方々で身上つぶして来た道具を重寶してゐる。此井戸茶碗は堀出し  
 ぢやのと。不吉なものばつかりを集る故終には身上堀こんで仕まふ。わるいものすぢぢや。世  
 に大切な御先祖の衣類着せよ。此やうな物は外聞がわるいの何のといふて。雑巾にしたり。  
 しめしにしたりする家は。仕廻は終に家屋しき。諸道具まで。雑巾や。しめしにして仕廻ふ。

みな御先祖の汗あぶらをわがものと。おもふゆゑ。われ計利功者になつて。山の大将おれ獨り  
 明ても暮ても何十貫目の。何百貫目の。銀目ばかりおほえて。何十貫目何百貫目く寝言  
 にまでいふてゐる。子供が芝居見て戻りに。とんからからくくと。太鼓もなしに口でばつ  
 かり。とんからくといふて居るやうなものぢや。人は笑ふがすぢらふが。構やせぬ己は金持ち  
 や。かたよれくと世間へひけらかしたい。難儀な病ひぢや。此やうに。そりかへりて。ある  
 く様になると。堂島から綱付て引こしかける。天狗のなりかゝりぢや。屋根の上へあがりて  
 アノ雲がこうなると。風になる。又どうなると。雨になると雲や風を相手にして。相談してご  
 ざる内に貳分五厘五分五厘六分といふ。聲の響に。火のみから。ころりと氣絶して落たり。目  
 むいたり血を吐たり。身代も頓死頓病夜の八ツ時分から起て何をうろく考へ出すのぢやぞ。  
 わつけない事。あつたら骨を折たものぢや。今日の家業に其半分精出したら。もそつと利功  
 な事が出来そうなものぢやけれど。身寄とりが。みいらとりに行様なもので。あの人は焦付。  
 たけれどおれはめつたに焦付はせぬといふて。三百目持て行ては焦付。五百目持て行ては焦付  
 壹貫目もつて行ては焦付。段々衣類諸道具から。家屋しきまで焦付して仕廻。そろく一家親  
 類のものまで焦付し。後には。しりもせぬ他人の銀に。歩を出し廻りて焦付す。いかい世話や

きぢや。みな此方から焦付に行のぢや。  
 糊を竹の皮か。ほうろくの裏に付ておくと。蠅がひつ付に来るやうなもので。手足ばかり  
 ひつ付てヒイ／＼といふてる。蠅もあり。其中にすこし知恵ありそうな蠅はにけてもいぬも  
 あり。又そばへよつたらひつ付くとおもふて。より付ぬはいもあるけれど。何をいふても。大  
 勢むらがり。にぎやかなものぢやによつて。おれや。そばへはよらぬ。遠くから様子を見るば  
 つかりぢやと。自身ばかり。能合點して居ながらひつ付もあり。又いつそ五體うち付て。息の  
 せぬのもあるけれど。一連度生竹の皮ぐるめに流れくわんでう埒の明たものぢや。能考て御  
 らうじませ。米は大切命の親ぢや。其命のおやに。命をとらるゝとは。どうしたものぢやな。  
 又薬は命を助るものぢや。米も薬種も命はとりはせぬ。みな命を助けるものなれど。たゞ何十  
 何分何分といふ直に迷ふたものぢや。みな直に迷ひ名に迷ひ。かたちに迷ふは。みな用るやう  
 のわるいゆるぢや。愛欲の門違ひで命を仕廻ひ身代を仕まふ。みな方たゞりぢや。方違ひの御  
 札。張所が違ふてある。銘々きつと胸に張のぢや。金神のたゞりといふも。金の神のたゞりぢ  
 や。鍋かける所へ釜をかけると。へついが損じる。兩方ながら無理してゐるのぢや。身の分限  
 をわすれたが。大きな方たゞりぢや。

「身の業のよきにうなづきあしきにはかぶりをふるがかしら役也  
 よいとかぶり／＼して。悪い事に合點／＼するのは。首のほねが違ふてある。難波へ往にや  
 直らぬ。みな方違ひぢや。雀と鷹と念頃になると。仕まひは喰れて仕まはにやならぬ。

「聖人のをしへをきかず終に身をほろほす人のしわざなりけり  
 猫とねすみと酒盛をするやうなもので。あぶない仕事ぢや。酔が廻ると。どこぞでは。ねすみ  
 がしてやらるゝけれど。猫めもとつて喰ふはずの鼠を近寄せて馳走するは。心に何ぞ一物ある  
 ゆゑぢや。其奥念もしらすに。鼠が猫に手寄求めて。追従輕薄するは。鼠も心の内に大きな望  
 みがあるゆゑぢや。終には身も家も。してやらるゝ。あぶないこはい仕事を無理にしてゐるの  
 ぢや。

まめは豆同士。あづきは小豆同士。縁組すれば。何の申分はないとを。くるみと豆と無理な縁  
 談をとり結ぶゆゑ。いつでも仕廻に口舌が出来る。くるみの大きな家柄を自あてに。なた豆が  
 嫁入して往たけれど。格式ばかりで正味の所がすくない。其くせ付届けばかりに張込で終  
 には豆が喰れて仕まふ。我分限より不相應な目上な人に追従して。其返禮に身の上仕まふも。  
 猫めが爪を隠して酒肴をこしらえ。やさしいこゑを出して。音頭とると。ねすみ調子に乗て

汗水になつて。をどりをるやうなもので。

「だまされてまだ其上に精出してをどりて舞ふてそして喰ふ、銘々どもは。どうぢやな。汗水になつて。をどりてゐる株ぢやないかな。らつちもない所へ義理ばつて。ボン／＼してゐるやせぬか。喰れてゐるやせぬか。どなたも御腹の中と相談して。御らうじませ。銘々心得事ぢや。兎角花美な心をやめにして。めい／＼の宗旨／＼に順ひ。先祖を大事。家業大事にしてさへるれば。當分は埒の明かぬ様に見ゆれど家内安全子孫長久ぢや。何にも氣遣ひなどはない。是に迷ふがゆゑに三界城。これを悔るがゆゑに十方空。三千世界が廣／＼となつて朝からばんまで。西國順禮。一向宗なら廿四は。法華宗なら千ヶ寺参り。四國八十八箇所も。日本國の廻國も毎日／＼朝からばんまで。順禮をしてゐるのぢや。親父様の御機嫌はよいか。母さまどこも御悪うはござりませぬか。御得意様方の御きけんはよいか。商賣に無理はないか。家内の者を。むごうはしてゐるか一家親類と不和にはないかと。毎日／＼順に禮拜して廻るゆゑ。これをまことの順禮といふ。

第一ばんに。不斷樂や岸打波は三熊野の那智の御山にひ／＼瀧津瀬。小人は「不斷くるしや岸打波は身のうへに。何ぞ口舌がなうて叶はぬ。

背中の負連は平生二親を負つれる心持。方赤いは二親のある人。眞中のかいは片親ある人。みな白いは兩親のない人と看板かけて此身はいつでも親子一體御老人方を同道するゆゑ。老つれるともいふ。大事の此身は本來我なしの無東西。いづれの所にか南北あらん。人我の隔ない事を悟るがゆゑに十方空。迷ふがゆゑに三界城とは此順禮が逆禮になるゆゑ。親子兄弟一家親類銘々城をこしらへて。貪瞋癡の軍が始まる。貪欲とは飯碗の内から白飯合する兵糧責。瞋恚とは一家親類知音近附。たがひに火花をちらしあらそふ火責。愚癡は糞責。糞を熱してたがひにかけあふ内證のとまでも。たがひにあらはしいどみあふ。きたないくさい仕とぢや。毎日毎日三惡道の大合戦ぢや。どなた様でも御腹事におほえがあらば。ちつと御休みなされませ。又覺の御方様がたは。よう目をさまして御らうじませ。朝からばんまで。三世の諸佛が禮拜してござるに違ひはない。夫がみえぬと三惡道の地獄廻りぢや。

此三惡道といふは。衣食住の三ツより起る。天地のあひだに生を請るもの。此三ツの外に仕事はない。上。天子様より下庶人にいたるまで。此衣食住の三ツを。わが分に應じ。ほどようつとめ守りさへすれば。天變地殃もなく。天下太平五穀成就。萬民快樂子孫長久ぢや。此外に人に用はない。

此大道をしらぬものは。たゞよいものを身にまとひ。うまいものを喰ふてあそんでるたい。それゆゑ酒と金銭のほしいと博奕と。けんくわと。色事とを仕事のやうに覺てゐる。ぜにかねのほしいは。貪欲喧嘩。嗔愚癡ゆる色と酒に迷ふ。貪はむさほり。嗔はあらし癡はうろたへもの先うまいものをくひたがるは。御腹中のよい上じやによつて。うまいものでなければ喰ぬ。喰たうへにもくひたがるは貪欲のむさほり。これが直に餓鬼道のくるしみ。よいもの着て人にまけまいとする。嗔毒のあらそひ。これ修羅道のたゝかひ。よいもの着てうまいものを喰ふてはらが大きうなると仕事がいやになりて遊びたい。のらくくしてろくくな事はおもひつかぬ。此愚痴なたねが畜生道へ宿這入。何とこはいものぢやないか。此貪嗔癡の三惡道にうろたへまはる有様を。とくと考て御らうじませ。元來ないもせぬ我をこしらへたゆるの思慮ばかりぢや。其思慮に貪嗔癡といふ名を付けたものぢや。「名ばかりで諸行無常のひゞきあり。一向迷はぬやうにしてやるといふて。葬禮の時は鉦と鐘とをたゞいて。とんちんちん。まだ其上に鏡鉢と太鼓とぐわんどんと打鳴して。泣たり。笑ふたり音ばかりでして見せる。ほんなうも菩提も釋迦の口がなる。こゑに貳ツのはりあるかなとは。聲にかはりはないといふ事ぢや。是此人も一生の間やかましよう言はしやつたが此やうな音ばかりになられました。と

んちんちん思慮ばかりとんちんちん

此やうにするると死だ人の祈禱にもなるやうに思ふてゐるけれど。みな跡に残りて居るものへ見せしめじや。此通じやぞへ。追付番があたりて來るぞ。御用心くどなたも御合點かな。活た人を棺に入て死人がかいてゆくぢやぞへ。御得心かな。それもしらすに日がな一日とんちんちんの三惡道をまいく。味劫業目が舞たらやいとすよ。氣が付たら目を明て見たがよい。ながうもぬ此娑婆を千年も萬年もおもひ馴た心から。うれしい事かなしい事氣の強いときもあり。氣の弱いときもあり。其外あらしひねたみそねみ色々さまざまな事を味々劫業してしばらくは人道へ出て人におれそれ禮義を盡しる時もあり。又天上の果報を得てヤレうれしやとおもふたもちつとの間で。ほどなく地獄へ打こまれ。ハアスウく苦しむ有様。久しう餓鬼畜生道にゐるときの臭氣がぬけずにあるゆゑに。地獄の苦しみのがれがたし。諸念の源のかぶたが離れずにあるゆゑ。わづかにも念が残りあれば。其念が世界へこぼれてちつとでも便りがある。芽を吹出す。おれがよいか聞て下され。たゞ人に譽られたいが難病業病其くされ骸を結構なちりめん羽二重につゝみまはし御腹の中の土産は何々ぞ慈悲もなければ。情もなく。たゞほしいをしい憎や可愛やのがらくたもの許を結構な重箱に入。結構なふくさにつゝみ擔け



まはるやうすを。どつくり本心の目鑑かけて御らうじませ。額に角をはやし。丸はだかに虎の皮のふんどし。股暗ばかり張込んでる。此役にも立ぬ所へ贅をこきたがるゆる。三界城を建立す。城とは何ぞ。我といふ隔をするゆる家内が住にくい。それで世界にもすみにくい。兎角我なしにさへなると。一家親類住吉ぐらし  
住吉の御門が十一所みな扉なし。御本社土間にござる。此方と對座して御逢下さる。平等一枚なるの儀をしへてござる。

我に身體なし慈悲をもつて神體とす

我に神力なし正直をもつて神力とす

我に智恵なし忠孝をもつて智恵とす

我に奇特なし無事をもつて奇特とす

我に方便なし柔和をもつて方便とす

王陽明曰 目に體なし萬物の色を以體とす

耳に體なし萬物の聲を以體とす

鼻に體なし萬物の嗅を以體とす

口に體なし萬物の味を以體とす

心に體なし萬物の感應の是非を以體とす

目といふも鼻といふもみな體なき事をかんがへて御らうじませ。

松翁道話第二編 卷の下

田舎者が住吉の反橋を中程迄渡り。向ふへは行ぬ。こはいといふて跡へ戻つたといふ事じや。むかうへ行も跡へもどるも同じとじやけれど。大きに違ふた様におもふて居る。

死で佛になるとおもひ詰てる人と。生ながら此身の事をしらぬ人と。同じ事なれど。餘程違ふた様におもふてる。じやに依てむかふへはこはがりて能ゆかず。跡戻りする。同じ事

をしてゐるのじや。それゆゑ御神託に「有のないのと。おつしやるやうな。御人體じやござり

ませぬと云。又松原に並んである。石燈籠が一々説法してござる。中にもこけかゝつた石燈籠

が。此やうにいがみが來ると火をとほすことがならぬ。たれも世話のしてがないと。此まゝこ

けて仕廻にやならぬ。難儀なものじや。先刻濱邊へ御座船でおやまや藝子牽頭持やとふて遊ば

してもらふ客衆が。此あたりを。そはくつれ立あるき。此石燈籠はあぶないものじや。めつ

たに側へ寄なといふて通るゆゑ。わしよりこなたの身上があぶないといふたけれど。聞ぬかほして行過たが。あなたがたは。どうじや。もしこけかゝつてはないか。人があぶながりてゐやせぬか。此序に旦那寺の石塔もいがみはないか。こけかゝつてはないか。水か上りてゐるか。花が枯てはないか。花の枯た石塔は内が大方が干からびてゐるものじや御用心なまりませ。扱これほどたんとある。石燈籠や。人間じやが。みなちつとづゝくるひがある。まんぞくなは。すくないものじや。みな住よし様の御託宣。有がたい事じやないか。

「松風のこゑのうちなる隠家はむかしも今も住よしの神

此松風のこゑのうちなるかくれ家とはいづくのほどぞ。我なしに成て松かぜのこゑのうちへ這入りて仕廻へば。いつでも住よし様じや。

「よしあしと思ふ心をふり捨て、たゞ何となく住ばすみよし。たゞよしあしとおもふ心が我じや。此我さへ打殺て仕廻へば性は善なり。天道次第で善い事ばかりがふえる。家内が善人なれば住よしぐらし。富貴繁昌子孫長久のもとの。家内を善人に仕やうはどうじや「子曰く直を擧げて諸の狂を錯けは則ち民服す、狂を擧て諸の直を錯ば則ち民服せず」よい事をあけてあしき事をその儘にして置のじや。肴を喰ふに。よい所の身の所ばかり喰ふて。骨の所は犬や猫に

喰すのじや。それを骨の所ばかりしがむやうにするゆゑ。咽に立てやかましい。悪い事はすて。よい所ばかりあけるじや。八兵衛此間は。ひどい精が出るの。ハイ〜と顔付がにこにこ〜する。ようしたもののじや。性は善なる證據じや。又わるいといはるゝと誰じやとて心よいものはない。八兵衛は一向時あかずじやといふて見たがよい。そのときはどのやうな顔になるぞ。をかしけなものになる。内方のほん様はかしこいといふと。たばこ盆引すつて来てをぢさんばつぱ〜といふ。イヤモあいつはあほうじやといふと。直にあほうになるコリヤ茶汲んでこいといふても。いやじや〜といふて。にけてゆく。しかるより響るはいひよい。それをめつたにしかるゆゑ。人柄が段々悪うなる。ソコデ善人すゝみ帳といふをこしらへて月に一度づゝ響かけると人柄がすつ〜と能なる。其やうに響ると付上りがすると云はやつぱり悪をあけるのじや。すべて商内物代呂物に大極上々吉飛切無類などゝするはみな代呂物への響言葉じや。向役にたゝすの寢息代呂物とは書はせぬ。佛經にも。どのやうな赤凡夫でも善男子善女人といふてある。あれも悪男子悪女人といふたら一向寄付人はない。また善男子善女人に違ひはない。性は善なり。涅槃經に衆生本來成佛なるが故也。畢竟人欲にうろたえて。赤凡夫になつてゐるでこそあれ本來の株多はよう離してある。夫を人欲同士が背くらべして悪人を仕込

ゆる宿這入してから埒が明ぬ。丁稚は十一旦那は五十。四十年違ふてあるを同一年で。もの言ては合點せぬ。嫁御は二十一姑御は五十。是も三十年違ふてある氣で相談せにや。いつでも日舌が絶ぬ。其かみわけがないと。丁稚も隠居も下駄も焼味噌も一所になつて。家内が犬の期器のやうになる。夫では詰らぬ。何でも善とばかりを家内中が善事帳へ付る。すこしでもよい事はしるし。わるい事は一向に付る事ならぬ。其帳面を月に一度づゝよみ上る。佛壇へ御あかしをあけ其前で段々に響かける。長太郎は跡の月より此月は大分よい事が多いの。おりんもだん／＼よい事がふえるぞや。さて番頭どのきつう精が出ます。御隠居様御悦びなされませ。此間藏の戸前の掃除して鼠穴の吟味が有た大方番頭どの、差圖である。よう氣を付て下さる。嬉しい事じや。扱是からが褒美に古帯一すぢ古じゆばん或は下帯一手掛一すぢとよい事に應じてそれ／＼に褒美をやる。さうすると家内中が悪い事はいはずによい事はばかりを付る。もうし旦那さん岩松どのが御使に往て早う戻れました帳面に御付なさりませ。おすぎどのが香物の納屋を綺麗に掃除してゐられます。久助どのがこのやうにたんと錢さしを夜なべにして置れました。御家様が出てわたしがいひ付もせぬに丑松が御速夜の花を立てさんじましたと。總／＼がよい事ばかりいふやうになると。よい事だらけで家内安全。旦那どの、留主の間に盗みするもの

がないやうになる。けうとひものじや。之を道くに政を以てし、之を齊ふるに刑を以てせば、民免れて耻なし。あまり制止がきびしいと。うそた付て恥を何ともおもはぬやうになる。是かしかる事を先にするゆゑ。みなぬす人になる「よそから鯛を一枚もらふた。けふの鯛は氏神様のお下りじやによつて。骨ぐちくはにやならぬといふたら。何ほ鯛でも誰も喰てはない。骨を喰ふは悪を上るのじや。骨を喰は犬の役。よい人のせぬ事じや。役者の番附にも。上り役者。下り役者はあれど赤下手役者とは書はせぬ。あほうよといふと。ちやつとあほう顯はして見せる。まだもつとあほう見せうかと。段々阿房つくして見せる。こちの心の通りをむかふへあらはして見せる。ようしたもののじや。阿房羅利といふて地獄の役人じや。あんまり心安うするものじやない。之を道くに徳を以てし、之を齊ふるに禮を以てせば耻ありて且つ格る。譽る事を先にして。善事を引あけてやると。人柄がぐ／＼とあがる。佛陀から御先祖の御悦び。無造作などで皆よい人となる。善人といふは極樂の役人毎日／＼極樂の體相を顯はして。今日をくらすは。有難い事の天上じや。どなたも今晚から仕かけて御らうじませぬか。甚道理のよいものでござります。又譏りばなしは堅御法度此譏りばなしといふものは。向ふからもお

もひの外氣を張て返禮するものじや。後には通ひ付になつて毎日〱商内がはづむと節季に差引がやかましい。あらそひの始りじや。止めにするがよい。

それほどいひたくば。我事をいふたがよい。我事は何ほほど譏りても尻の來る氣づかひけがない。

わたしはわかい時からよくうそを突たものでござります。親のものは折々盗まして買喰ひした事度々で御ざります。喧嘩してをり〱たゝかれたともござります。若い時から自慢すぎて赤はちかいた事もござります。節季〱にはみす〱無理としりながら不足錢突た事もござります。人に銀出さして禮は私がうけた事もござります。

おはづかしい事でござりますが。御主人や親の御恩より。どうでも女房子は大切に存じます。〱わは義理をしらぬのか。但し恥をしらぬといふものか存ませぬ。それでも顔は人じやが。心は犬や猿の仲間へ宿這入いたして居ますかして。けん〱けんいふてよう人にかぶりつきますくちなはの修行もいたしましたゆゑ執着ふかう人をうらみませぬ。其上のたくりまはつて。あへさがすゆる人にあいそつかされます。此前ぬえ男といふてみせた。みせものは則私でござります。御歸が三文なれど今日は法樂じや。めづらしいみせ物とくと御らんなされて下さりませ。

扱をり〱。がざみや蟹が見舞に見えます。どうでもよこに歩行ゆる同行業じやとおもふてるそうにござります。何と此やうに我事を譏るは懺悔といふて大きな功德じや。つみがほろびて助ります。朝夕佛壇で看經するも我身の懺悔じやけれど今日靈々と生てござる諸佛諸人様方に我身の咎を申上はなほ功德が深い。我事を我いふゆる間違ひはござりませぬ。其上で主人にざんげ親御様へざんげ私は是まで大きに心得違ひいたしをりました。此後急度相改め慎みませう。幼少の時より。今日までの不忠不孝どうぞ御慈悲に御了簡下さりませと。眞實に懺悔すると。主人も親も安心する腹の中のごもくをさつぱりと掃除をすると。内外清淨六根清淨拂ひ給へ清め給へじや。

「うちあけて見れば大きな駒が出たあとと軽うてもとの瓢箪もとの赤子になりて今日をくらすと。病けがぬけて心安い。其上うれひ災難もなく息災で大體有難いものじやない。

「米蒔て米がはゆれば善に善悪には悪が報ふとぞしれ  
麥まけば麥が出来米蒔ば米が出来。少も天地に間違ひはない。又麥でも米でも黍でも稗でも其外一切の穀物。實が入ほどゆらくゆられて智恵付は。風でうごく様にみゆれど天地から身

體を能して下さるのじや。身體がよくなるほど慇懃に御辭儀なさる。のしあがるは不作になら  
御しらせじや。人もめつたにのしあがるは追付不作になる不作になるといふて觸あるくのじや。  
男でも女でも顔ばかり美しいとて仕事嫌ひは役に立ぬ。茶わんの底に穴のあいたやうなもの  
で夜尿たれはどつこいやつても間に合ぬ。跡からねだりに来る悪い事を好む人は家内の諸道具  
までが悪人になる。きせるがあたまた、いたり。ほうきが背中へかぶり付たり。己が役前は勤  
めずにみな傍法羅行していろくの悪作しを。是がみな化したものじや。我心の向やうで此仕  
事した手が盗みしたり。筆さきで。くろめたり。こはいものじや。みな佛さまが鬼になつたの  
じや。佛といふも神といふも水と氷のごとし。善人も悪人も本は一水。心さへあらたむれば  
みな成佛じや。

「雨あられ雪や氷とへだつれど解れば同じ谷河の水  
魚と水とはまだ形がある。水と氷とになつて暮すのじや。朝からばんまで流れくわんぢやう。  
しばらくもとままるものはない。

逝く者は斯の如きか、晝夜を捨てず。其流れを杖でかきまはせば濁る。にこるけれどもしばら  
くみてゐる間に濁りは消てしまふやうなれど。泥のそこへしづんだのじや。悪は沈みてようう

かまぬ。其所々に滞りて説法する。去によつて悪は説に及ばぬ。御直説法じや見事な錦手の  
茶わん。直も安いけれどたゞいてみれば音がビジャク。此不返事では心もとない。又こちら  
の茶わんは。チト不調法なけれどチャンク返事がよい。どちらを買ふぞ。不返事は氣じゆつ  
ない。どうでも顔がふくれてある。やつぱりチャンチャン此方いたしませう。

八兵衛殿は不男なけれど。返事がよいのでもらひ人が多。權兵衛殿は男ぶりはよいけれど仕  
事嫌ひは賣口が遅い。折々頭痛腹いたの作病はどうでも世帯持の悪いといふ御直の御説法じや。  
旦那殿の慈悲深い奉公する衆の大な仕合。又人づかひの悪い旦那どのもやはり奉公人の仕合  
どうでもむごうつかはれたほど宿這入して勝手がよい商賣をはやう仕にせる。

嫁御を善人にするも。姑御が響かけるじや。こちの嫁はせんたくものでも仕立ものでも其はや  
さ手きゝでござります。火燵に火のいけやうまでがよい。朝まであんばいやうあたゝかい。わ  
しが履ものといふと大事にかけてくれますと。めつた無性には、様か嫁をほめてまはるじや。  
そうすると大が鼻をこゑな嫁御でもあんまり響かれて。せう事なしに善人になる。みな譽殺し  
て佛にするのじや。とむらひがみな此通りじや。格別あや切のした人でもなければ。死ると院  
號の居士號の禪定門の禪尼の或は信士の信女のと名を付て。大勢が寄かゝりて結構な御經讀て

譽そやすじや。此御經が直に心の譽言葉じや。夫を讀て總くが譽かける。さうすると大がいなまよひも。譽殺されて成佛する。ようしたものだじや。今日生てる人でも同じ事じや悪い事いふて譏るのも。よい事いふて譽るのも同じ口手間じや。同じ事なら機嫌ようくらすが徳じや腹立て無理いふ人に口たれて足納すが施餓鬼なりけり

たゝ餓鬼はまけをしみが強うて。自慢するが病ひじや。随分譽てさへやると。心よう成佛する此餓鬼といふも我見といふて。我を立たのじや。どれほどおろかなものでも。我かしこしとおもふてゐる。これがすなはち衆生。本來成佛なるがゆゑなり。心は天の丸無垢じやによつて。天を尊ぶは則天の道じや。たとへ私欲に暗んでゐても。やつぱり天の心でくらんでゐるゆゑ。どのやうな愚痴ものでもわれ尊しとおもふてゐる。直に天の心で性は善なる證據じや。夫じやによつて本心をしらぬものは其所がむちやくちやで。本心と私心と。心と形との道理が不分明なゆる。私心の方でつゝぱり返りみな跡で難儀する。それゆゑ神佛聖人の教の道を立て。教化し給ふは其私心を引たくりて仕まふのじや。學問の道他なし。八宗九宗とも此我見をこぢはなすより外に成佛のみちはないでござります。

京海道に向ふの明神といふがある。此神社におもしろい繪馬が上てゐる。博奕打が發起して案

を金槌で打くだき。かるたを庖丁で刻んでゐる。其かたはらに兩親が肩ぎぬかけて拜んでござる。其跡から親類や同行とおほしき衆中も拜んでゐる。御内儀さまは一向堂に打臥手を合して泣てござる。ちいさい子も同じやうに案の欠を石でたゝきくだいてゐる。其博奕打の背中から御光が四方へさしてゐる。珍らしい繪馬じや。親が發起するとちいさい子までが案の欠をうち碎てゐるは。悪い種の跡へ残らぬ證據じや。御兩親が拜んでござるゆゑ御光がさしてゐる。直に佛さまになつてござる。あり難い事じや千手の暗室に一燈をいれるれば暗いづくんか去すなはち神明さまぢや。五十年六十年迷ふてゐる暗がりも即今の一念發起してみれば。忽ちあきらかにわたりたる。

「くらがりて影ほうしめを見失ひ火を燈してぞ見つけたりける

本心が明らかにさへなれば。影ほうし私心が見ゆるゆゑ迷ひがない。本心がくらくいと影ほうしがみえぬゆゑ私心を我心のあるじにしてゐるゆゑ。暗がりてうろたへにやならぬ。此繪馬の博奕打のやうに銘々ども、親達に拜まれてゐるか但し親を泣してゐるか親類一家はなんといふて拜んでゐるぞ。お山や芝居から拜まれてゐるぬか。世間からはどのやうに拜んでゐるぞ。女中方吳服屋香具屋から拜まれてゐるぬか。又本心御知なされたおかたの御内さまが。何と

いふて拜んでござるぞ。若案じてはござらぬか。こちらの人が本心知れましてから。一向商賣不情でのらつかれますと。いふてござらぬか。本心を疑に遣ふて遊歩行を本心のらといふ。是は聖人の御罰を蒙る事でございます。皆此ほうの姿の通りを向ふから拜んでござる佛さまといふてをがんでるか。鬼さまといふて拜んでるか。我心は向ふに明らかに顯れてあるゆゑ。向ふの明神。此明らかな神さまを身に反。そうして誠有は樂しみ是より大なるはなし。

松翁道話第三編 卷の上

むかし唐土の張公藝といふ人は。九代があひだ。一門眷屬一つ家にくらしてゐた。恭も時の御門高宗皇帝。公藝が家に行幸ましくて勅諭あるは。汝が家は年久しく親類同居して中よく家治り相したしむこと甚もつて奇特なることじや。親類の中も年久しきうちにはたがひに口舌もあるものじやが。定而一族相したしむ納めかたあるべし。具に申あけよと御説ありければ。張公藝。敬で忍の字を百ばかりかいて献じ奉たといふことじや。忍とは。即堪忍のことじや。此かんにんの道さへまもらば。身納り國治る。和合の道忍の徳たる諸善萬行も及ばずといふて。一切堪忍一つで世界中が治まる。けつかうなものじや。

「堪忍ときけばやすきに似たれども己にかつのかへ名なるべし

おのれに克とは。我身勝手にかつのじや。則天道様への御禮じや。今日いひたいことを明日までかんにんするのじや。酒のんだり肴喰たりすることも。ちつとづかんにんするのじや。よい物着たいもけふ一日のかんにんと思ふて先へのばすのじや。日本の宗廟御伊勢様が。かやぶきに三杵米で堪忍をしへてござる。是ほど緋縮緬でかみゆふたり。びろうどを草履のはなをにするけれど。しめ縄はやつぱり薬じや今の割してみるとしめ縄もいと巻にするか。金糸で緋か。せめて水引ぐらるにしさうなものじや。斗帳もやつぱり白木綿じや。是も緋とんすぐらゐにはなりさうなものじや。所をやつぱりむかしの通り白木綿でかんにんしてござる。堪忍を行ふは道にかなふ根元じやといふことじや。人の願ひさまなれど。まづ第一ばんに衣食住のねがひがおもじや。是も我身分相應にとのふたらもうそれでよいことじや。それをいろいろ様々と奢をほちくり出して心まかせにせんとするゆゑ。いつかわが心にこと足り。たんのうする日あらんや。少欲知足と云て。物事たんのうするが人の道じや。それをあるがうへにも。つまかさね。あるが上にもむさほりほしがる。小人の常色よき着ものをきて。其はなやかなるを誰に見せてほこらんとするのじや。人の心のうつくしきこそたのしけもあるに。腹の中には

ねたみ。そねみの。とがりばつかりねぢこんで狼がうちかけ着たやうなものじゃ。はづかしいものじゃぞへ。

「やぶれたる着物をきても足ことを知ればつゞれの錦也けり

島の内燈心やの娘御。十二や十三で壹合の米でたんのうし。夜はひととき計ねぬ。そうなければ仕事が出きぬ。佛壇の御あかしと相合で夜業するのじゃ。それで大病の母御を介抱してござつた。何と正真ものじゃぞへ。鈴鹿の萬吉さま五つ六つばかりから。道中往來の旅人の風呂しきづゝみや。ちいさい荷などもつて。三文五文の錢をもらふて母御をやしなふてござつた。是が己を殺して堪忍するの。どうのといふ。了簡はなけれど。我まゝがないゆる。自然と道にかなふたものじゃ。是が不肖不性な顔でつとまるものじゃやない。いつでもこゝろこゝろとうれしい心特でなければ出来ぬ仕事じゃ。此堪忍の出来ぬものは孝行はなほできぬ。孝行がすぐにかんにんじゃ。どなたも堪忍が出来ぬ。わしはよつほど不孝ものじゃ天下の咎人じゃといふことと覺悟したがよい。どうで長もちは出来ぬほどに。むかしの殷の紂王。夏の桀王。王様に生れ位は十善萬乘此上なし。智恵拔群に秀て。衆にすぐれてありながら。燈心屋や。萬吉様から見れば皆小人じゃ。なぜになれば我まゝでかんにんが出来なんだ。いはんや其外の衆においてを

やじや。親の跡式商賣仕にせ金銀諸道具た、み送してもらひながら。もつとおごられぬといふて。小言いふ。これ等は一向論にかゝらぬ。小人といふてもちつとつりとらにやならぬ。それにまだよいふことじゃ。こちら親に何にももらはず、また借錢をゆづつておかれた。畢竟やりはせぬけれど。よその親からみてはこちらの親父は大體仕合せものじゃやない。じやによつて親の恩はほこりほどもない。夫を今日どうぞ。かうぞ。くらしてゐるは。皆おれが仕出したのじゃ。おれがくといふてゐる。其おれがからだは誰にもらふたのじゃ。といへばおれがたのみもせぬに。親父がこしらへたゆゑ此やうに難儀するとおもふて居るが。其なんぎすると思ふからだぐるめに。此方へもどせとおやぢがいふたらどうするえ。生ながらからだに家明付られたらたましひの引取所がないが。其ときは一言の申分無之候じや。畢竟是がおやの慈悲で其精落が。なけりやこそ。むかしから其まゝですんで通れ。是が他人と他人とでみたがよい公事はまるまけじや。

此間も齒のぬけた人が。上手な入ば師に壹兩貳歩だして仕てもらふたといふ人がある。正真の齒とはどのやうなものじゃといへば。ソリヤ大きなちがひじやといふてござる。それでかんがへてござらうじませ。ものゝ喰へぬやうな齒でさへ壹兩貳歩じや。此けつかうな齒がたゞじや。



それにまだあるじや。こゝに指が壹本無いといふたら三百目出さしやれ。うまれ付のやうにしてやるといふものがあつたら。貧乏質に置いてなりと三百目や四百目は出す。此なんにも役にたため眉毛がなうても五兩や十兩は出す。そんなら此からだをひとつ／＼直打いれて見たがよい三十貫目や五十貫目の物じやないぞへ。それをたゞもらふてゐながら。おれやなんにももらやせぬとはあんまりあつかましい。今爰に知行百萬石の大名にしてやろほどに首をくれいと云たら。ハイといふて首をやるものがあらうかな。どのやうなよく深いものじやとて。めつたにやるものはあるまい。ソリヤ百萬石にもかへぬからだじやぞえ。それほど有がたいものをもらふてゐながら。おりや何にも貰やせぬとはあんまり勿體ないことじや。けれどもそれを今更差引せうといふ親はない。其代りに物ごとかんにんして世間のまじはり。一家一門中ようしてくらしてくれよと。親御の御たのみ。其外に親の望みはないそれを用ひぬゆる。天道様から御刑罰がくだるのじや。恐ろしいものじや。どなたも我まゝの出ぬやうに堪忍が大事じや。またくひ物といふてもうまき味ひがいつまでも。口のうちに置ものでもない。じばらく咽をこすまでのたのしみじや。また家居も雨露をふせぎさへしたら。もうそれでよいことじや。其上をねがふは。皆我身のあだを願ふのじやと思ひとりて。堪忍すればおのづから道にかなふ。孔子も貧し

うして樂しみ。富で禮を好むものにはしかずと仰られた。此禮をこのむとは堪忍のことじや。あるひは妻子眷屬の。心にまかせぬも堪忍して。睦しくくらし。又心かなはぬ朋友にも。堪忍してあらそはず。するぶん我を殺してまじはるときは。一生が安樂な。龜食をくひ。水をのみ。脛を曲て枕とする。聖人のたのしみ。すこしもはなやかなことはない。おごりはくるしみの種。身をうしなひ家をやぶる根本。唐土の大舜。かたましき親御につかへ給ひ。孝道成就なされたも堪忍ばかり。主人に忠義を盡すといふも堪忍なくば皆不忠となる。婦人の舅姑につかへ夫に順ふもかんにんなくては女の道に背く。萬事萬端我腹の中の本心にまかせて。すこしでも氣味わるひことは皆々堪忍しておもひとゞまる様にするのじや。南都の御社中の内に。堪忍箱といふものをこしらへて。家内が堪忍を御つとめなかつた所がある。此家は上分の人ばかりが堪忍するのじや。あるひは花見にゆきたい。今日の入用拾匁と見て。七匁で堪忍する。のこり三匁を右のかんにん箱へをさめる。内の御家様今年の衣物百五十匁とつり。それを百廿匁で堪忍する。残りの三拾匁をかんにん箱へ納る。あるひは諸式諸道具にいたる迄。上分に用ひるものは是まで三拾匁の品を貳拾匁ぐらゐてかんにんする。残りの拾匁を堪忍箱へ入る。此通りに旦那をはじめ御家様。子達まで上ぶんばかりかんにんして。

其かはり店の手代衆をはじめ下女小者にいたる迄。よいものをやり。よい物をくはずやうにする。扱正月と七月に堪忍箱のかにんの溜り銀を取いだして家内の者へそれ々にわつてやる。これで旦那殿に裏表なし。平等一切の心じや。目のまへで旦那様。うら口で旦那めくといはぬやうにする。是が一粒萬倍御舍利様のふやしやうじや。まささへすればはえるやら。段御仕合がよい。是等は仕にくいことじやない。甚心易いことで。利功な仕事じや。人にわらはれたり。人にしかれてさへ堪忍してモウ拾ふじやまゝいモウ廿匁じやまゝい。とてもなら五十匁の方が徳じやといふて。錢銀をつかふ人がある。是等はよそに堪忍箱こしらへて内の銀を精出してよそへ入に行のじや。家のつぶれることさへ堪忍してつとめてる。かんにんの仕所が間ちがふてあるのじや。堪忍せずに家つぶすが徳か。堪忍して家相續するが徳か。これはマアどなたも御腹の中と相談してごろじやるがよい。堪忍も口でばつかりかんにんくいふて身に行はぬ人がある。是を畑水練といふて。さしきで水のけいこするやうなものでまさかの時役に立ぬ。眞實ひだるいめに逢たものでないと乞食にものをやるも思みのやうに思ふてゐる。自身つとめても見ずに。人ばつかりいぢるものがあるものじや。是がこれ畑水練じや。壹萬石以上の御大名様方の御膳部の御料理。一日が金壹兩あてといふことじや。それから段々十萬石

廿萬石と。御知行に應じて御膳部の格式が有ることそふな。それにある御歴々の太守様が一汁一菜になされて。年々其餘銀をもつて。家中の無據借金を濟して御遣りなさつたといふことじや。是を其様子も知らぬものが一通りにきいては。ちいさい思召じやの。始末な殿様のといふけれど。親の心子しらす。佛の心凡夫しらす。勿體ないことじや。水の中ではたらいでゐる人の心も知らず。岡から見て何のかの小言いふ。さうじやない。こうじやないとマアはたらいてみたがよい。待目には下手にみえたるわらし守。御上の思召もしらす。下として小言ばかり。皆罰のあたることじや。兎角天地のおほしめしにかなふやう。兩親に此身をまかせてさへるれば氣つかひなことはない。何にも六ツかしいことはない。もし不調法の出來たときは。其尻は親が引うけて。さはいしてくれる。何事もひとつく親達に問ふてするのじや。親御達は天地にとふてなざる。我了簡でしたことは。皆此身のかぶりとなる。身をまかすが。堪忍じや。知りもせぬおやまや藝子に身をまかすゆる仕廻に難儀する。狼やうはばみと跡さしてねるやうなものじや。大體恐しいものじやない。しまひはこちのからだをしてやらる。此様なおそろしいことさへ堪忍してつとめてる。皆よそのかんにん箱へ銀入れに行。算用のあはぬはづじや。一年中の店おろしの引合やう。毎日毎晩店おろして見るがよい。親の心と我心と。

引合たか引合ぬか。主人の心と我心と。引合てあるか引合てないか。もしすこしでも喰ひちがふた所があらば。親の前へ手をつかへ。主人の前へ手をつかへ。今日晝すぎのことは。わたしが大きな不調法で御ざります。どうぞ御かんにん下されませと。眞實にわびことすると帳面がさらりとさえて。たがひにうれしい。ぢきに利のあることじや。此帳面がきえぬとたがひにむし〜〜利が喰ふて夜がねられぬ。仕まひは大きな損じや。此店おろしは親ばかりじやない。誰にても此通りの店おろし。

「堪忍はかならず人のためならずつまる所は己が身のため

我欲と正直とも店おろして見たがよい。人に憎まるゝ帳合してゐるか。かあいがるゝ帳合して居るかどちらが徳じやぞ。」ふまれても喉たんほゝの笑顔哉「手折れて人にかほるや梅の花た〜〜人のあんまとつて遣るのじや。棒ねぢするに向ふの人のねぢる方へねぢてゐると。兩方に氣苦勞がない其はづじやむかふの手傳ひしてゐるのじやによつて。どれほど向ふがつようても力を出すことがならぬ。大體心安いものじやない。和州鉾立村に清九郎といふ人があつた御年貢に上る米を二俵こしらへて庭におかれたれば。其夜盗人が這入て其米をかたけて出る清九郎目を明きコレ〜其米はこなたに進せうとおもふてこしらへて置た。もつていなしやれ。

おれがしんぜるからはこなたの咎にはならぬ。しかしそれでは持ていに憎い。とてもならあすの暇にござらぬか。それを銀にして置て進せう程に。ソコデ盗人も乗りが来て。夫ならあすの晩來るほどにきつと銀にして置て下されといふていんだ。是がこれ棒ねぢに向ふのねぢる方へねぢてゐるのじや。むかふの手傳ひして遣るのじや。扱清九郎は其翌日米を賣はらひ。銀にして待てる。其後四五日してから盗人が來て此間の米は銀にしてあるか。サア貴様つひ來るといふたゆゑ急に賣たそれで相場よりは少々やすいけれど。堪忍してもつていなしやれと銀を出せば。盗人は引たくり。其銀をひねくり廻し。清九郎の顔を見てイヤモウ此銀はよしにせうと。銀をかへし表へ出るを。コレ〜待しやれ。なぜ其様にいふぞいの。おれが遣るといふのに何の申分があるぞいの。どうぞ持ていんでたもいの。イヤ〜止めにする。なぜに。ハテあんまり貴様のやうに正直過る人のものは取ても拍子がない。あんまりあほらしいわい。其時清九郎いよ〜それに違ひはないか。ハテ何のうそをいほぞいの。それが實なら貴様善人じやあつたらとじやのう。善人は善人じやけれど。くらがりの善人で役にたゝぬ。なぜ世間通用の善人にならぬぞいの。それからぬす人とはなしじや。イヤモウありやうは盗人したいとはなけれど。是は因果じや。今更止て外に仕やうがない。イヤ随分仕様がある其了簡なら。おれ次第

になつてゐやといふて世話やいてとゞく六十六部に仕立て遣たといふ人じや。是が棒ねちにむかふへねぢて善人に仕こんで遣たのじや

「負てのく人を弱しと思ふなよ智恵の力のつよいゆゑ也

松翁道話第三編 卷の中

或とき御地頭様より清九郎の正直を御聞および遊されて。殿様の山を御褒美に下さる。清九郎辭儀してうけず。其のゑを御たづねなされるれば清九郎まをすに。殿様の山でさへ相應にぬすみますすじや御ざりませぬか。それをわたしが山になつたら尙盗人がふえて答人が餘計になります。殺生なことじや。よしになされませとねつからうけ付ぬ。どうも御地頭様も仕様がな。其後御役人がなんと清九郎此山の樹木をぬすまぬ仕様はあるまいかと御たづねなされたれば。ハイするぶんぬす人つかはぬやうになされませ。盗人遣ふとぬす人が寄てさんじます。其盗人をつかふとはどうしたものじやと尋ねれば。さればでござります。これが五里も七里も他所のものが樹木ぐらゐぬすみにやさんじますまい。また少々でも錢金のあるものは尙いたしませぬ。して見れば。いたつて困窮のものが今日をしのぎかねてのとじや。皆御下の困窮な人をちつとづ

つすくふて御やりなかつたら。盗人はまゐりますまいといふてきよろりとして居るじや。此やうに學文せいでも文字をしらいでも。埒のあいた人がある。とんと我なしじや。虚空法界を心の主としてくらしてゐる人はどうもつかまへ所がない。夫ならあほうかとおもへば物ごとがとゞこほらぬゆゑ。さらりくと埒が明く。

「我といふちいさい心すて、見よ大千世界さはるものなし  
此身此ま、虚空ぐらし。生靈死靈も取りつく氣つかひけがない

「ほしをしや憎やかかわいと思はねば今は世界が丸で我もの

「今虚空裏むかしもきよろり行先もいつもかはらぬきよろり也けり

「虚露理とは何をいふかはしらねども味噌をねぶれば味ひをしる。體が虚空同體なるゆゑ。めしを喰へば飯のあぢはひを知り。酒をのめば酒としり。酢をなめて酢としり。酢を吞で酒のあぢはひのないは。本體が酔なるゆゑじや。虚空は是ほど正直なものじや。なんでも物ごと相談のきはむることは此虚空へ出てこねば埒があかぬ。兩方にすこしでもうたがひのある内はものごとが定まらぬ。商内ごとでも。談合ごとでも。一切のことが双方たがひにいかにも御もつとも其通り。そのとほりとはどことじや。たがひに思惑が取れて仕まふと一言の申分もない。此虚空